

# 目 次

## 卷頭言

国内における文化財をめぐる危機	北海学園大学教授 手塚 薫	1
-----------------	---------------	---

## 学芸員課程 科目担当者から

賛作についてのあれこれ	北海学園大学講師 水崎 祥	3
-------------	---------------	---

## 『特集』 被災地の復興と記憶

震災記憶のアーカイブと伝承	北海学園大学教授 手塚 薫	10
奥尻島研修の振り返り	人文学部日本文化学科2年 浅妻 佑軌	19
奥尻と繋がる	人文学部日本文化学科2年 有田くるみ	23
奥尻研修に参加して	工学部建築学科2年 岩佐香菜子	27
奥尻島での研修	法学部政治学科2年 佐藤 宏太	32
はじめての奥尻島	人文学部日本文化学科2年 高橋 佑惟	36
奥尻島研修での学び	人文学部日本文化学科2年 山田穂乃花	40
震災前後の青苗言代主神社例祭について	人文学部日本文化学科3年 蟬塚 咲衣	45

## 新ひだか町における学外研修

新ひだか町博物館での研修で何を学ぶことができたのか	人文学部日本文化学科2年 金野詩流玖	52
併設施設としての博物館の特徴について		

—新ひだか町博物館の事例から—	人文学部日本文化学科2年 夢田 あみ	56
-----------------	--------------------	----

## 学生課外活動報告

小平・遠別地域の化石発掘調査を終えて	法学部法律学科3年 佐々木理子	61
--------------------	-----------------	----

## 課程科目学生レポート

ミニミュージアムのねらいと講評	北海学園大学教授 手塚 薫	65
博物館経営論「ミニミュージアム制作」を終えて	人文学部日本文化学科3年 蟬塚 咲衣	67

## 2018年度 博物館資料論 学生レポートの目的と講評

—オブジェクト・ディスクリプション・レポートについて—	北海学園大学講師 水崎 祥	76
博物館資料ドキュメント『ヘアピン(スリーピン)』	人文学部日本文化学科1年 酒井 葵	79
博物館資料ドキュメント『STAR WARS R2-D2 万年カレンダー』	法学部1年 城野ひかる	84
博物館資料ドキュメント『十二支の鈴根付ストラップ(辰の絵柄)』	経済学部1年 米田 梨華	89
博物館資料ドキュメント『本(上橋菜穂子著・精霊の木)』	人文学部日本文化学科1年 本間 藍花	93
博物館資料ドキュメント『汽笛ぶえ』	工学部建築学科1年 高橋 奈緒	99
編集後記		105

\*学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。



## 国内における文化財をめぐる危機

北海学園大学教授 手塚 薫

国や道府県が文化財に指定した貴重な美術工芸品が散逸している。国内約2万件の指定文化財（国宝・重要文化財を含む）のうち、所在不明が298件にのぼり、今後さらに膨らむ可能性があるという。

これにはミュージアムを取りまくいくつかの根本的な原因がある<sup>(1)</sup>とされる。高齢化や過疎化で、地域の守り手が減り、セキュリティ機能が低下する中、寺社にある文化財の盗難被害が顕著であるのがその1つである。

また、都道府県の文化財の「所在確認」の手法は、期間も確認方法もばらばらであり、効果的な取り組みになっていない。所在確認が事実上なおざりにされてしまっている。重要な美術工芸品でなくとも、日本国内の博物館、美術館は収蔵スペースが長年の資料収集によりどこでも手狭になり、予算獲得もままならないため新規の収蔵庫増設は困難な状況にある。

貴重な文化財を未来に引き継ぐために、コレクションを保存環境やセキュリティに優れた博物館や美術館の収蔵施設で預かる寄託制度もあるが、収蔵スペースが限られていることから十分機能していない。そもそも国内の博物館や美術館は職員数が足りているとはいえない、退職しても補充がなされないまま非常勤職員をあてがうケースも増えている。その結果、自前の資料の整理や保管もままならない状況におかれてしまっている。これは北海道内の多くのミュージアムにも当てはまる現象である。

文化財が失われている現状に危機感を抱いた国は、2018年8月に文化財保護法を改正し、自治体や所有者が保存と活用の計画を立てて認められれば、国が支援するとした。しかし計画が必ずしも認められるとはいえない、財源も十全ではないため実現性に乏しいとの指摘もある。

所在不明298件中には盗難が58件（重文28件、都道県指定30件）含まれており、寺社の被害が目につく。寺社以外では、個人所有の所在不明物件が圧倒的多数を占め、種別では刀剣が133件が多い。これは、愛好家の需要があり、転売されやすいからだと考えられる。所有者の死去、転居、売却ごとの「届け出」がなされないことが多く、一方で、行政が長らく「所在確認」をしないうちに散逸してしまうケースが目立つ。散逸の防止策に求められるのは、適切な管理の第一歩としての「所在確認」の徹底と、文化財の保存と活用について官民が力を合わせ、法改正による国の支援の充実を図ることである。

職員数や収蔵スペースに限りがある道内のミュージアムの現状を踏まえ、学芸員課程を開講する大学として、中身のある貢献を果たすことはできないだろうかと考え続けていた。

資料はあるが、人材や資金が恒常的に不足しているため、基礎的な資料調査（資料整理・記録保存・データベース作成）やその成果を普及するための企画展を実施できない地域が多いのは、道内に限らない。世代間ギャップが拡大するなか、地方のお年寄りなどとのコミュニケーションを通じ、すでに伝承の機会が途絶え、若い世代が知らない歴史・産業・生活・民俗資料など物質文化についての基礎的な知識を身につける機会となると同時に、道内博物館が地域住民との仲介役を担うことで地域の活性化にも資する。一方で大学が地方の文化と文化財行政に積極的にかかわることにつながると共に P R 活動にもなる。

新ひだか町博物館と本学の学芸員課程の連携事業はそのような取り組みの一環である。資料のクリーニング作業や資料情報カードの記録など整理作業の業務の一部を分担するなどのミュージアム活動の基本を体験させていただいている。初回は 2016 年 11 月 6 日のことで学生 10 名と引率教員 2 名が参加した。2018 年は 10 月 5~6 日に実施し、参加学生は 29 名と一番活況を呈した。3 年にわたって実施してきた本事業は、残念ながら大学予算の縮小で中止を余儀なくされている。さいわいにも、奥尻町での文化財の研修に必要な札幌からフェリーターミナルのあるせたな町までの往復バス代は、地域貢献型アクティビティング代金として予算化された。今後は道南のミュージアム等施設で、新ひだか町博物館同様、実務的で現地の文化財行政にも資するような活動を思案しているところである。

#### 注

- (1) 2018 年 8 月 18 日朝日新聞朝刊（1 総合）記事より

# 贋作についてのあれこれ

北海学園大学講師 水崎 祐

## はじめに

世の中には数多くのいわゆる偽物が出回っている。また、有名な美術館<sup>(1)</sup>で所蔵する作品には数多くの贋作が含まれているという都市伝説をよく耳にする。そこで、博物館<sup>(2)</sup>資料においての贋作について考えてみる。

## 言葉での表現

偽物、贋作、まがい物、偽造、模造品、複製、模写…… これらは全て本物ではないモノの呼び名である。英語でもこのような表現は多く存在する : fake, forgery, sham, counterfeit, imitation, duplication, replication, etc. これらの言葉にはネガティブな表現から、必ずしも悪い意味ではない表現まである。例えば偽物、贋作などの表現はよろしくないモノに対しての言葉である。一方、複製や模写、さらにはレプリカといった片仮名用語の表現も馴染みがあるが、先の表現に比べて必ずしもネガティブなイメージではない。

偽物/贋作、複製/模写、どちらも本物ではないという点では同じである。では、どこが違うのか。そこには二つの基準があると考える。

まず、どの様な意図で作られたのかである。そこに本物であると偽る意図があつての制作であるかである。そして、その使用方法が二つ目の基準である。それを実際に本物として扱うか、あくまで複製として扱うかである。

同じモノでもその背景に本物と見せかけて騙そうという考えがあり、本物として扱えばそれは偽物となる。一方、例えば練習のために有名な作品を真似て作り、模写であると公表し、著作権を犯すような使用をしなければ、それは偽物というより模写という部類の作品である。レプリカについても、あくまで複製品として扱えば、実際に触れることが禁じられているモノや、なかなか目にすることが出来ないモノの代用として活用できる。

## 美術館の偽物の都市伝説は事実か？

何年も前の話になるが、美術資料の中でも絵画の贋作を制作する画家についての番組を観たことがある。その技術たるやもはや職人ともいえるレベルである。西洋人であるこのいわゆる贋作職人が様々な技術を駆使して西洋美術の絵画の偽物を制作するのである。経年劣化まで絶妙に表現し、表面の汚れまで再現してしまう。彼はその技術を番組で見せてくれた。

彼の証言によると本名、および所在の分からぬ依頼主からの注文を受け、偽物の絵画を制作してきたという。作品のタイトルは明かさなかつたが、それらは世界的にも有名な美術館に所蔵されている有名な絵画であるという。彼が製作した贋作が依頼主に引き渡された後の行方は一切知らされていないというが、本物とすり替えられ、本物は闇のルートで取引されている可能性を示唆していた。

そうなると、有名作品の偽物の噂は都市伝説ではなく、事実なのであろうか。誰もが知るあの美術館のあの作品が、もし贋作であつたら……と考えると何とも言えない気持ちにさせられる。

### 科学技術の進歩と偽物の発見

科学技術の進化はあらゆる出来事を解き明かしてきた。DNA鑑定技術の進歩により高精度の鑑定が可能となり、長年にわたり未解決であった事件が数十年の時を経て解決されるようになってきている。特にアメリカなど遺体の埋葬は土葬が一般的な国では、墓地から棺桶を掘り起して中に納められている遺体からDNAを採取しての鑑定が可能であるため、数多くの未解事件の真犯人特定に至っている。博物館のコレクションにおいてもX線や材料の成分分析の最新技術を用いての再鑑定により、多くの贋作が発見されている。

鑑定といえば日本の一般家庭で身近なところでは、テレビ番組『開運!なんでも鑑定団』<sup>(3)</sup>がお馴染みである。番組内ではいわゆる専門家ではない個人コレクターのコレクションに偽物であるとの鑑定結果が多く出されている。本物であれば喜び、偽物であった場合はがっかりとしつつも番組は和気あいあいと進行し、長寿番組となっている。

しかし、これはあくまでテレビの娯楽番組内の話である。有名なミュージアム所蔵の誰もが知る有名な作者の作品が偽物であったという報道となれば話は別である。博物館界では、館の一部の主要関係者は自館の有名な所蔵資料が偽物であると知っていても、それをひた隠ししているというような噂もある。館の所蔵資料が偽物であると発覚することにより、その専門職員には真贋を見分ける目が備わっていないとみなされ、彼等の能力が疑われ、館の名声にも悪影響を及ぼすことを懸念しているからだという。まさにミュージアムの信用にかかる大問題となってしまう可能性もある。

### 贋作の企画展

先に述べたように博物館として贋作を所蔵することは都合の悪い事であり、避けたい事態である。しかし、ものは考えようである。この事態を逆手に取った美術館がある。私がアメリカ合衆国ネブラスカ州にあるネブラスカ大学リンカーン校大学院で博物館学を学んでいた時、当時の研究仲間の一人から聞いた話である。彼女がアメリカ合衆国ミズーリ州カンザスシティに所在するネルソン・アトキンス美術館<sup>(4)</sup>での職務に実習生として携わっていた時の話である。

この美術館でも多くの贋作を所蔵しており、その扱いに頭を悩ませていたという。世間

では所蔵品が偽物であることが発覚し、その美術館がバッシングを受けるという事態も珍しくない。自館の贋作について隠す意図がないにしても、第三者がこの事実を取りあげて世間に公表すれば、贋作の存在を隠ぺいしていたとの誤解を招きかねない。かといって、あえて積極的に公表するにしても、そのきっかけがなく、いつ、どのような機会に、どのように公表するのが適切なのかもわからない。

そんな中、ネルソン・アトキンス美術館が行った企画展は興味深い。この企画展は館が所蔵する贋作をテーマとした展示である。館が所蔵する贋作を集めて展示し、その作品が贋作であると判明するに至った経緯とその鑑定技術を紹介するといった内容である。隠しておきたい存在であった贋作を敢えて主役にしたのである。

世の中に贋作が蔓延しているのは否定しようのない事実であり、博物館が意図せずにそれらを所蔵してしまっているという現実に理解を求めるとともに、来館者は贋作コレクションに興味深く接して学ぶ効果があったという。

この企画展は S. W. O. T. 分析においても評価されるべき発想である。「S」は Strength (強み、長所)、「W」は Weakness (弱み、短所)、「O」は Opportunity (機会、好機)、「T」は Threat (脅威となる物事) である。事業経営全般のみならず、博物館の企画・運営にも効果的な分析とされている。「S」をいかに維持し、「W」をいかに改善・克服するか、「O」をいかに活かすか、「T」のリスクをいかに軽減して乗り切るか……これらの項目を挙げて、運営計画を作成し、実践に移すというものである。

ネルソン・アトキンス美術館では、贋作の収蔵資料は「W」であり、「T」は贋作の収蔵資料の存在により館の信用を失う可能性であった。しかし「W」であった贋作の収蔵資料の存在を逆手に取った逆転の発想で「O」として捉え、企画展の成功へと導いたのである。更には「T」の懸念を払しょくすることもできたのである。「S」はといえば、このような発想をした職員とそれを建設的に捉えて受け入れた職員の存在、そしてこの企画を実現させることが出来た組織構造である。



ネルソン・アトキンス美術館の敷地内にある巨大なバドミントンのシャトル。館のアイコンとなっている。  
1998年12月27日撮影 筆者所有

## 偽物の活用

偽物をテーマとした展示事例について言及したが、偽物とその制作技術の活用方法はあるだろうか。先の「言葉での表現」のセクションで述べたが、「偽物/贋作」と「複製/模写」はどちらも本物ではないという点では同じであり、その違いは制作意図とその使用方法が悪か善かである。つまり、物理的観点からは、「偽物/贋作」と「複製/模写」は同じといえる。よって、精巧に作られた偽物は、正しい活用をすれば精巧なレプリカともなる。

博物館資料のレプリカの活用方法は近年、特に博物館資料保存と博物館教育の観点から注目されている。

資料の保存を 100% 優先するには、その資料にとっての理想的な温度と湿度に設定した空間から移動させないのが理想である。光の有無、および強さについてはイキモノ資料以外のモノ資料では光がない状態が理想である。もちろん人が近づいたり、ましてや触ることは言語道断である。よって、展示や研究資料などとしての活用は不可能となってしまう。言い換えると、資料の活用は資料を劣化や破損へ導くということになる。これが博物館が抱える矛盾した使命「資料の保存 VS 資料の活用」である。そこで注目されるのがレプリカである。保存のために活用の制限が多い資料や、実物がない資料についてはレプリカを代用としての活用がその穴を埋める役割を担う。

博物館教育的見地では、学校が言語教育中心の教育機関であるのに対し、博物館の展示は言語に非言語教育の要素も盛り込んだ教育の場といえる。言い換えると、読んで聴いて学ぶ学校に対し、体験して学ぶ場所が博物館である。この体験の場である博物館を効果的に実現するにあたり、資料の扱いも変化してきた。博物館資料といえば「ハンズ・オフ (Hands-off) ⇒ 手を触れないで下さい」というのが通例であるが、「ハンズ・オン (Hands-on) ⇒ 触って下さい」を取り入れた展示が増えている。同じモノを安価で大量に入手できる資料であれば実物をハンズ・オンで使用できる。しかし多くの資料の実物は唯一無二であるため、ハンズ・オンでの活用により劣化/破損を助長するわけにはいかない。そこでレプリカがハンズ・オン用の資料として活躍する。実際に資料を触ることで、より五感での体験に近づくことが出来る。このレプリカが精巧で本物に近ければ近いほど、活用による博物館体験でより正確な情報を体感して読み取ることが出来る。

## レプリカの可能性

博物館では来館者が展示資料に手を触れたり、飛んだ唾などが付着しないよう、更には防犯対策も兼ねて資料から一定の距離を保つように張られた柵越しに資料を鑑賞するというのはお馴染みのスタイルである。この様なスタイルが必ずしも物足りないという訳ではないが、今まで接近し、実際に触れたりすることが出来ればそこから得られる情報は多くなり、より濃い博物館体験となるであろう。現在では遠く離れた博物館に所蔵されている資料でも鮮明な画像で詳細まで見ることが可能なこともある。しかし、自分の思うまま資料に触れて観察するという行為には程遠い。だが、贋作制作技術、言い換えればレプリ

カ制作技術はそのような行為を可能にしてくれるであろう。想像してみよう。例えばダ・ヴィンチの『モナ・リザ』<sup>(5)</sup>やゴッホの『星月夜』<sup>(6)</sup>をただ眺めるだけではなく、壁から外して手に取り様々な角度から顔を近づけて観察したり、更には表面を指先で撫でて絵の具の凹凸を感じたりできたなら。それは、体験学習ならぬ体感学習ともいえるだろう。

レプリカのこのような活用の可能性は美術資料のみならず、さまざまな分野の資料でも役立つ。近年、ニュースで取り上げられている人骨などヒューマン・リメインズ (human remains) の資料の扱いにも新たな解決策が見出されるかもしれない。何年も前であるが、アメリカ合衆国内のとある自然史博物館を訪れた時である。そこでのお目当ての展示資料の一つにシュランクン・ヘッド (shrunken head)、いわゆる干し首があった。溢れんばかりの好奇心と共に館内の展示場所を探したが、そこにあったのは明らかにゴムのような素材で作られた模造品であった。その模造品の脇の解説文には、本物のシュランクン・ヘッドは南米の採集地へ返還されたとの趣旨が記載され掲げられていた。NAGPRA<sup>(7)</sup>に始まった返還運動の一環としてのヒューマン・リメインズの返還によるものである。人道的対応として仕方がない事であると自分に言い聞かせはしたが、期待していた資料との対面が叶わなかつた失望感はかなり大きかった。せめて、ゴムのような素材で作られた模造品の外観、色彩、触感が本物に限りなく近いものであり、実際に触れることが許されていたのであればこれほどの失望感ではなかつたかもしれない。

衝撃的な展示といえば2000年代に訪れた『人体の不思議展』<sup>(8)</sup>も忘れられない。展示されている人体標本は本物の人体（遺体）をプラスティネーションという技術で樹脂加工されたものである。樹脂加工により標本は固く精巧な模型の様であるが、紛れもなく実物の遺体である。世界各地を巡回したこの展覧会へは、深い学びがあり感銘を受けたという趣旨の感想<sup>(9)</sup>が多くあったが、一方では本物の遺体を用いているが故、倫理的、法的、宗教的など様々な観点から物議をかもした。樹脂加工された時点で本来の人体の感触は失われているので、遺体を使わずに樹脂などの素材のみでも同レベルの精巧なレプリカを制作することは可能であろう。本物の遺体を使用しているという事実に魅かれた来館者も多かつたであろうが、精巧なレプリカであればこれほど多くの批判は受けていなかつたであろう。

### 贋作職人からレプリカ職人へ

先の美術作品贋作制作番組で取り上げられていた贋作の制作であるが、その見事といえる技術で私は贋作職人という言葉で表現した。世の中に存在する贋作職人は彼以外にも多く存在するであろう。しかし、贋作の制作というのはよろしくない。せっかくの彼らの技術を良い方向で役立てられないだろうか。

ここでコンピューターのハッカーの話を思い出した。優秀なハッカーは厳重なセキュリティー対策を施した国家規模の機関のコンピューターでさえも入り込んでしまうことがある。この様な行為は褒められたものではないが、コンピューターを操作する能力は超一流と言わざるを得ない。そこで、ある国の機関がハッキング対策として優秀な元ハッカーを雇っているという話である。なるほど、ハッカーの手口を一番分かっているのはハッカー

自身であるから、優秀な元ハッカーを雇うのは理にかなっている。敵を倒すには敵の手の内を最も知っている者を味方につけるということである。

そこで、博物館資料の贋作職人を正当なレプリカ職人へと導くべく、その需要について考えてみる価値はある。優れた制作技術を有する贋作製作者を有能なレプリカ職人へと導くには彼らの技術を正当に評価し、その需要を示すとともに、彼らの技術を保護する体系、或いは制度が必要であろう。そのためには彼らの技術と貢献度を一般的に認知してもらうことも大切である。

日本の文化財保護法（1950[昭和 25]年）では「文化財の保存技術」<sup>(10)</sup>というカテゴリ一がある。これは「文化財の保存に必要な材料製作、修理、修復の技術等」と規定されており、これらの技術で「保存の措置を講ずる必要があるもの」として選定された技術を「選定保存技術」としている。この様な規定で世界規模で認知されるものが機能していくればレプリカ職人の地位の向上も期待できるのではないか。そのためには、各国の博物館協会の交流を通して、博物館資料保存的見地や博物館教育的見地から複製資料の活用について積極的に報告し議論することが重要である。

### おわりに

博物館資料の贋作について思ったこと、考えたことを自由に書かせていただいた。贋作が存在するということは良い事ではないが、敢えて贋作の存在を建設的に捉えてみようと思い立ち、このような形で書き記したきっかけは一冊の雑誌である。学期末の膨大な量の期末試験と期末レポートの評価を終えた後、自宅の本棚にある芸術雑誌の背表紙が目に入った。その特集は「贋作～戦後美術史～」<sup>(11)</sup>である。久しぶりに取り出して内容に目を通した。そこで改めて気付いたのは、本物と偽物を比べてその違いについての説明を受けることにより、より深くその作品の特徴を認識して理解しやすいということであった。そして、これを博物館展示で役立てられないかと考え始めた。つづいて、以前の研究仲間が話してくれた所蔵贋作資料の展示を思い起こし、さらに贋作製作者と彼の技術を紹介していたテレビ番組についても思い出した。

自館で所蔵する資料が偽物であると判明してしまった際に落ち込むばかりでなく、その効果的活用を模索するという方向で乗り切るという選択肢についても考えてもらいたい。

自分は不本意にも絵画の贋作製作者の高い技術に驚かされてしまったが、その精巧な技術が悪事に利用されていることが非常に残念であり、何とか健全な方向で活かせないかと願った次第である。そこで贋作製作者をレプリカ製作者へということを考え始めたわけである。とは言え、誰も見分けることが出来ない複製品は厄介だ。巨大な闇組織が大量に作る偽造紙幣には、本物とは異なる箇所が必ず一ヶ所あるという。なぜならば、偽札を偽造する者は廻り巡ってきた偽札を自分たちが掴まされないように本物と偽物を見分ける為である。精巧な複製資料が至る所で活用されるのが当たり前の世の中になんでも、本物と複製資料との区別がつかなくなってしまうようなことを回避する対策も忘れてはならない。

## 注記

- (1) 本文中で「美術館」と表記しているものは「美術博物館」、つまり「アート・ミュージアム (art museum)」を意味する。
- (2) 本文中で「博物館」と表記しているものについては、資料の分野にとらわれず「博物館全般」、つまり「ミュージアム (museum)」を意味する。
- (3) 『開運！なんでも鑑定団』：1994年4月19日から日本のテレビ東京、およびテレビ東京をキー局とする日本の民間放送テレビのネットワーク系列各局で放送されている鑑定バラエティ番組
- (4) Nelson-Atkins Museum of Art : アメリカ合衆国ミズーリ州カンザスシティに所在する美術館。1933年12月11日に The William Rockhill Nelson Gallery of Art and the Mary Atkins Museum of Fine Arts として開館。1983年に現在の名称へ改称。
- (5) Mona Lisa : レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519) が描いた油彩画。1503年から1506年の間に制作されたと考えられているが、1517年頃まで手を加え続けていたという説もある。最近の研究により製作が始められたのは1513年以降であるという可能性も加えられている。日本やアメリカ合衆国ではモナ・リザ (Mona Lisa) として知られているが、ヨーロッパなど多くの国ではジョコンダ/ジョコンデ (La Gioconda / La Joconde) と呼ばれている。フランス、パリ市のルーヴル美術館所蔵。
- (6) The Starry Night : フィンセント・ファン・ゴッホ (1853年-1890) が1889年に描いた油彩画。アメリカ合衆国ニューヨーク州ニューヨーク市のニューヨーク近代美術館 (MoMA) 所蔵。
- (7) NAGPRA (Native American Graves Protection and Repatriation Act) : 日本語ではアメリカ先住民墳墓保護・返還法と訳されている。
- (8) プラスティネーションという技術によって樹脂加工を施した人間の死体の実物をさまざまなポーズで多数展示した展示会。1990年代から日本を含む世界各国で催されてきたが、様々な物議をかもし、各地で裁判所による中止、および禁止命令が出される。
- (9) 「死体ビジネス？ 学術？ 見せ物？ 今も各国で開催『人体の不思議展』の功罪！」、excite ニュース、2018年8月28日 08:00、  
[https://www.excite.co.jp/news/article/HealthPress\\_201808\\_post\\_3761/](https://www.excite.co.jp/news/article/HealthPress_201808_post_3761/)
- (10) 文化財保護法（昭和二十五年法律第二百十四号、施行日：平成二十八年四月一日、最終更新：平成二十六年六月十三日公布〔平成二十六年法律第六十九号〕改正）  
第十章 文化財の保存技術の保護  
「文化財の体系図」、文化庁、  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/gaiyo/taikeizu\\_1.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/gaiyo/taikeizu_1.html)
- (11) 『芸術新潮』1991年11月号、新潮社、1991年11月1日発行

## 《特集》 被災地の復興と記憶

### 震災記憶のアーカイブと伝承

北海学園大学教授 手塚 薫

#### 1. はじめに

本学の学芸員課程では、宮城県での文化財レスキュー事業や被災ミュージアム活動へも参加し、その概要をたびたび本冊子「学芸員課程学事報告書」（第 26 号・30 号）でも取り上げてきた。2018 年 8 月には四半世紀前の北海道南西沖地震に見舞われた奥尻島で「記憶地図ワークショップ」も実施し、被災経験をアーカイブし、後世に伝える方策を現地の住民の方々と話し合ってきたところである。本特集では、まず被災記憶の伝承方法について、広域に被害が及んだ東北太平洋側の事例と範囲が局地的だった奥尻島との相違を中心に考察することにしたい。つづいて、昨年夏以来の奥尻島における学生の活動を 7 本のレポートの形で掲載する。

#### 2. 東北アーカイブ

2019 年 3 月 11 日で東日本大震災から 8 年目を迎えた。復旧・復興へ取り組む被災地（岩手県山田町）の状況を記録し、発信する活動として 2012 年 2 月に始まった「東北アーカイブ」がある。定点記録用のカメラを設置し、90 分間隔で、1 日に 16 枚の写真を撮影し、人が自然に時の移ろいを意識できるようにし、SNS 上で編集して公開するという試みである（山城 2013）。さらに、商業、漁業、観光業、医業、教育等に携わる地元民に発災当時や避難所での生活、なりわいやまちの復興に対する思いを映像に記録し、復興に向かうプロセスを後世に残そうとしている。このように復興に向かうまちを記録・発信・アーカイブすることにどのような意義があるのだろう。山城は以下の 3 つを指摘している（山城 2013）。

1 震災から月日が経つにつれて被災地の実情が報道されなくなるなかで、知りたいと思う人がいつでもその情報に接することができる。

2 外から見守るという支援は、地元の人々を勇気づける。

3 まちの復興過程を後世に残すことが重要である。

震災や震災後の復興の記録を残す手段には様々なものが考えられ、一概にどれが優れているとは言えないのが実情である。

#### 3. 3・11 伝承ロード

震災の実情を効果的・効率的にアーカイブしつつ、その教訓を後世に伝える震災遺構の

活用をめぐる議論が高まっている。被災エリア各地に残る震災遺構などを、統一標章（ピクトグラム）を用いた看板を設置するなどして、福島県いわき市から青森県八戸市までつなぐ「3・11 伝承ロード」が計画され、震災伝承ネットワーク協議会が主導している。青森県、岩手県、宮城県、福島県、仙台市が連携し、交流促進と地域創生を進めながら地域の防災力強化を目指すもので、4県1市のほか国土交通省東北地方整備局が協議会の組織に加わっている。2020年度一杯で「復興・創生期間」が終了し、復興庁の予算が切れる前に、各地の行政担当者は遺構整備を急ピッチで進めており、地元住民の意向が十分に反映されないなどの不満が表面化しているとも聞く。住民が震災の記憶の伝承と運営に実質的かつ継続的に関わることでこそ、震災の記憶を語り伝えることができる。恒久的な施設整備が介在すると様々な思惑がからみ、熟考できないまま伝承の行方があいまいになることが懸念される。

### 震災伝承ネットワーク協議会

2018年11月27日に国土交通省からプレスリリースされた資料に基づき、震災伝承の取組を見てみたい。震災伝承の課題と対応方針が以下のように掲げられている。

#### 震災伝承の課題

- ① 数百年に一度の規模の災害に備えるためには、インフラ整備では限界があり、個人や民間による取組が必要（国民全体の防災意識の向上が必要）
- ② 行政の取組だけでは、人的資源に限界があり、地域や民間とも協力が必要
- ③ 長期的かつ普遍的な防災教育のためには、震災遺構等の伝承施設を活用することが重要（視覚、聴覚、触覚等の五感で震災の実情や教訓を体感）
- ④ 大規模災害の被災エリアは広大であり、個々による取組ではその実情を総体として表現することが困難であり、被災エリアが連携し、総体として表せる一体な取組が必要
- ⑤ 東日本大震災の被災地は、人口減少が著しい地域であり、震災伝承には地域の活性化に繋げる視点も必要
- ⑥ 国土の守り手である関係機関が震災時に果たした役割を継承し、担い手の確保の取組も必要

#### 対応方針

1. 東日本大震災の実情と教訓を末永く後世に伝承を図るためにには、産・学・官を含めて東北全体が連携し、一体となって取り組む。
2. 震災伝承をネットワーク化し、活用することにより、効果的・効率的な防災力の強化につなげる。
3. その伝承活動を支える仕組みづくりとあわせて地域活性化に資する取組を行う。

東日本大震災のような広域にわたる震災の記憶は、個々による取組では総体的な表現が困難であり、産・官・学が一体となり、震災遺構等の伝承施設を、防災意識の向上のため

に活用することの重要性が述べられている。そのため、震災伝承のネットワーク化、地域の防災力の強化、地域活性化という3分野を策定し、それぞれの方向性を以下のように示している。

- I. 震災伝承ネットワークの運営・伝承ロード形成
- II. 防災プログラムの基盤形成と開発
- III. 復興に向けた地方創生・地元支援

Iに関しては、「震災伝承施設」の公募をかけて、採択された取組に資金援助を行うというものである。災害遺構が記憶を伝承する優れた媒体として機能する特性を活かそうとしている。また、施設の整備だけでなく、IIではそこで発信される防災プログラムコンテンツを用意し、さらにはIIIにあるように、地域資源・資産を活用して新しい地域づくりをコンサルティングするなど地元支援にまで踏み込む意欲的なものあり、巨額な資金を投入する方策である。「震災伝承施設」への応募状況は2019年2月15日に東北地方整備局によって発表された。それによると、青森県内3件、岩手県内75件、宮城県内102件、福島県内26件の合計206件であり、2019年3月中には結果も公表される予定である。

このように、個々に分断された震災記憶を粒子の一粒一粒としてではなく、それら粒子が寄せ集まつた波として一体的に管理しようとする姿勢にはメリットがないわけではない。たとえば、北海学園大学の学芸員課程でもたびたび文化財レスキューに参加させていただいているが、その活動の舞台の1つとなった宮城県石巻市立旧湊第二小学校は、海沿いに立地しており、東日本大震災で1階部分が津波の被害にあったが、かろうじて2階と屋上は津波に飲み込まれることはなかった。もしこの施設を成功体験に裏打ちされた避難場所として、震災伝承施設として登録活用しようとすると、今後さらに大きな津波が来た場合に効果的な伝承体験とはならないばかりか、誤ったメッセージを発信することにもなる。しかし津波で多くの犠牲者が出て岩手県大槌町旧役場庁舎とセットで「震災伝承施設」として運用するのであれば、津波ごとに規模も周期も異なる災害に予断をもって臨まないためのバランスのとれた伝承ロードの形成に資することにつながるかもしれない。

#### 4. 奥尻島の記憶の可視化

一方で災害規模が東日本大震災よりは小さく、阪神・淡路大震災同様、ハード事業の復興が優先でその多くが被災者の生活再現につながらず、創造的復興とは程遠いものであった奥尻島は、1993年に発生した北海道南西沖地震から25年以上が経過し、記憶の風化が懸念される。上述した震災伝承ネットワークほどシステムティックな伝承手法以外に何ができるだろうか。

我々は2015年から奥尻島内の歴史や文化に関する調査を実施している。奥尻町は震災から5年後の1998年には完全復興宣言を行っているが、現在は震災以前から徐々に影響が強くなっている少子高齢化や人口減少の問題に直面している。奥尻島の東海岸中央部に位置する谷地地区では、4年前に村祭りが中止となり、地区住民が楽しみにしていた山車

曳きも再開のめどがたっていない。地区住民が連携して活動するような機会が減っており、祭礼のような社会的行事の中止が地域社会の連帯を弱める現象も日本列島各地で報告されている。

そこで、2018年8月に谷地地区において、8名のこの地方の歴史や文化に詳しい住民に参加していただき、自由に会話を進めてもらいながら、大判の地図の上に、「村祭り」、「村の魅力」、「災害」について聞き取った情報を付箋に記入して重ねていくという形式のワークショップを実施した。地図を使って記憶を呼び起こし、会話が盛り上がることで、より多くの情報を正確に引き出すことができた。その成果をGIS（地理情報システム）で処理し、可視化したものが、写真1と図1-2である。被災地の復興支援ツールとしても活用されているこの「記憶地図」を用いることで、人々の持つ記憶を位置情報と結びつけて視覚的に表現することができた。個人の頭の中にある記憶や地域の人々が共有するべき情報を地図に表すことで、断片的だった知識を統合するメリットがある。また、被災経験など過去の嫌な記憶も楽しい記憶や地元の魅力とともに語り合うことで、記憶が呼び覚まされ、活性化する効果も確認できた。

ワークショップの成果の一端は、北海学園大学教育開発ニュース第41号の「学芸員課程におけるGISの利活用」（2018年10月1日発行）、北海学園大学「学報」第116号の「GISを活用し『記憶地図』作り」（2018年12月1日発行）、北海学園大学人文学部「ヒューマン」Vol.12の「記憶地図ワークショップ」（2019年2月発行）で紹介したほか、北海道民族学会の2018年度第2回研究会（日時：2018年11月24日、会場：北海道博物館）で学会発表したのちに学会誌「北海道民族学」第15号で「記憶地図による地域情報の可視化－奥尻島谷地地区における事例－」（2019年3月31日発行）として報告されているので、併せてご一読願いたい。



写真1 2018年8月に谷地で実施した記憶地図ワークショップの様子

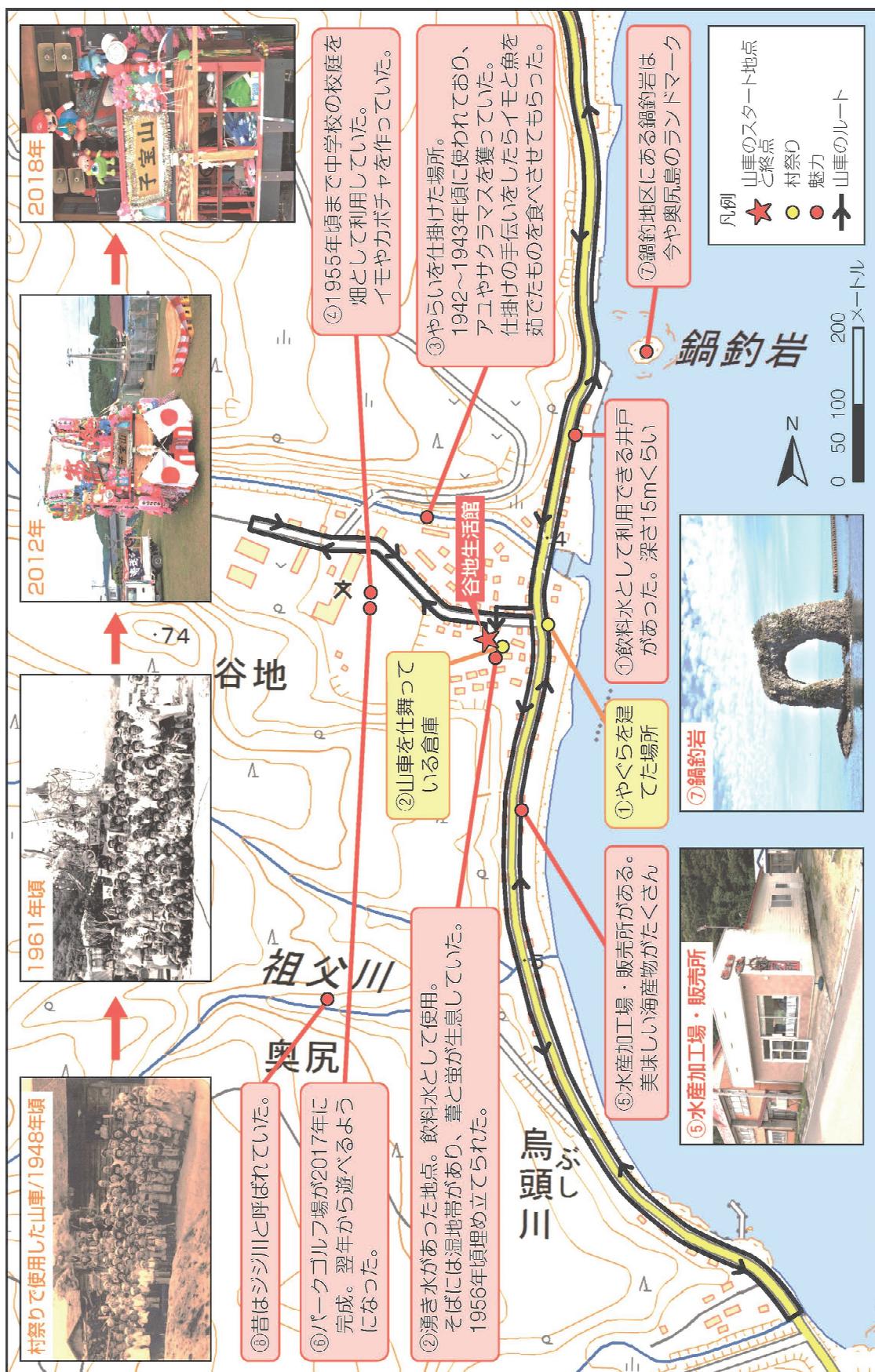


図1 奥尻島谷地地区の記憶地図 村祭り・魅力編  
(北海学園大学人文学部『ヒューマン』2019.2 Vol.12より転載)

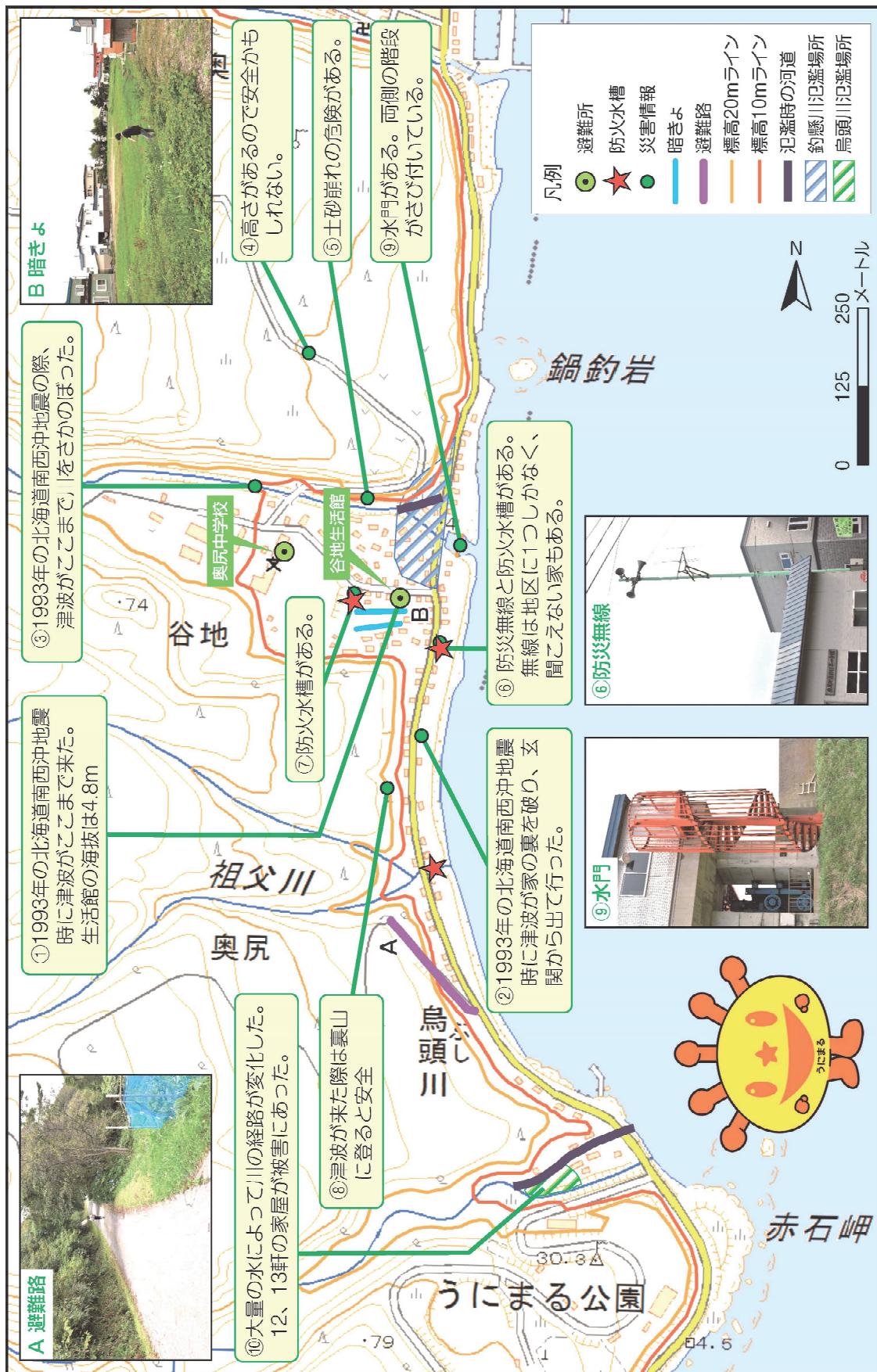


図2 奥尻島谷地地区の記憶地図 災害編  
(北海学園大学人文学部『ヒューマン』2019.2 Vol.12より転載)

## 5. 復元ジオラマ模型

記憶地図に類似した災害情報などを可視化した成果物には、ハザードマップと復元模型がある。ハザードマップは行政が定める避難所や地形をもとに危険場所を示した地図であり、住民がどのように地図を活用すればいいのかをふだんから確認しておく必要があるのに加え、ミクロで変則的な挙動を見せる災害に必ずしも対応できないという欠点もある。復元模型に関しては、立体模型の強みを活かし、見る人に街並みや景観を認識させやすいという効果もあるが、制作時間やコストがかさみ、移動や運搬にも手間取るなどの難点がある。東日本の被災地において被災前の故郷の街並みを復原していく神戸大学の「『失われた街』模型復元プロジェクト」や国立民族学博物館の竹沢尚一郎氏が吉里吉里地区の震災前後の変化がわかるジオラマ模型をつくり、国立民族学博物館での展示のうちに地元に寄贈した例が知られている。口頭では伝わりにくい津波の遡上高など、直接生存に関わる情報を一目でわかりやすく表現できるなど、明らかなメリットがある。

こうしたジオラマ模型の先駆的な事例は奥尻島であるが、一番津波の被害が大きかった青苗5区の町並みが震災4年後に住民自身の手も加わって復元され、現在も奥尻島津波館のエントランスホールに展示されている（写真2）。震災後一定期間が経過し、過去を振り返り震災前の町並み残し、往時を偲び、子孫に語り継ぐ媒介となるなど、コミュニケーションを促進させ、喪失感をいやす機能を果たしたという（若林2003）。東日本大震災復興支援として実施された「『失われた街』模型復元プロジェクト」（企画・構想：神戸大学楓橋修研究室）の取り組みで2011年12月に作成された鵜住居街並みのジオラマ模型があり、2016年9月には、ワークショップ（「記憶の街ワークショップ in 鵜住居」）が行われ、追加制作後、旧南三陸国道事務所大ホールで公開され、現在は岩手県釜石市の市立鵜住居小学校に保管されている。震災後しばらくの間は、被災者を勇気づける媒体として役立ったが、現在は常時公開されているわけではなく、経年劣化が進み、そのサイズの巨大さから保管に苦慮しているという事例もあることを付け加えておく<sup>(1)</sup>（写真3）。

サイズやメンテナンスなど、制作後のことまでを十分考慮に入れないと、復元模型の長所を活かすことはできないのだと考えさせられた。一方で2次元タイプの記憶地図は、手軽に制作でき、修正なども容易に行えるうえ完成後は壁面にかけられるため、場所も取らないなどの長所があり、ハザードマップと対照することで地元住民に自主的な活用を促すことができる。

## 6. 面としての記憶のアーカイブ

東日本大震災のような大規模災害では、震災伝承をネットワーク化し、活用することにより、効果的・効率的な防災力の強化を図ることができると期待されるが、奥尻島の災害は、陸続きではない島という限定された空間で発生したものであり、他地域との連携も構築しづらく、その体験も分断化・孤立化し、個人的な記憶のなかに埋没してしまいがちである。しかし、記憶は、個人のどこで誰と何をしたのかというようなエピソード記憶でさ



写真 2 奥尻島津波館で展示されている震災前の  
青苗市街地復元模型 縮尺 1/600



写真 3 岩手県釜石市市立鵜住居小学校に保管されている震災前の鵜住居街並み模型  
縮尺:1/500 撮影者:八巻栄 撮影日:2019年2月26日

え、いかに個人的であるように見えても出来事を経験した時の周囲の状況や時間・空間・社会的なコンテキストとともに蓄積されるという性質を持つ（大塚 2019）。同時代の同地域の人々であっても、この世で起こるすべての事象をリアルタイムで体感できるわけではなく、報道や伝聞、書物などで二次的にしか把握できないことも多数存在する。M.アルヴァックスの「集合的記憶」というコンセプトによれば、個人の純粋な記憶は存在せず、時間が水平に流れ去るのではなく、それぞれの集団がその時々に利用可能な記憶の「社会的枠組み」によって過去を再構成する営みであるという（安川 2008）。その射程は自分自身の経験の範囲にとどまらずに、世代を超えて伝えられる先人の経験や、雑誌、書籍、絵画、彫刻、建物や街路などの過去の痕跡を介してそれ以前の時代へとさかのぼる（浜 2010）。つまり、時間は流れ去るのではなく、垂直方向に積み重なっていくと、アルヴァックスは述べているのである（M.アルヴァックス 1989）。このコンセプトを適用すれば、災害などの記憶は、先人の経験を通じて上書きされ、人は祭礼など先祖伝来の数百年続く年中行事という社会的なコンテキストのなかで新たな体験を積み重ねていくことになる。記憶の自律的で個別合理的な側面に依拠したり、記憶をばらばらな点として個人主義的にとらえるのではなく、「社会的枠組み」を通し、地域住民が同じ観点でまとまって物を見ているのだという認識に立てれば、奥尻島のような局地的な災害のケースにおいても、現地社会における地域住民の「村祭り」、「村の魅力」、「災害」などの断片的に見える記憶を、旧慣に基づく行事のなかで、あるいはより人為的な「記憶地図」のうえで、先人の民俗知とも融合しながら再度統合し、あらたな集団的記憶として将来に語り継いでいくことはできるのではなかろうか。

※本文中の写真に撮影者名が表記されていないのは、筆者が撮影したものである。

#### 注

- (1) 村中亮夫氏のご教示による。

#### 引用文献

- M.アルヴァックス 1989『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社.
- 大塚望 2019「人の記憶に残る博物館についての一考察」『国学院大学博物館学紀要』43 : 101–112.
- 浜日出夫 2010「記憶と場所－近代的時間・空間の変容－」『社会学評論』60(4) : 465–480.
- 安川晴基 2008「『記憶』と『歴史』－集合的記憶論における一つのトポスー」芸文研究 94 : 282–299.
- 山城弥生 2013「復興の記録を未来に残そう『東北アーカイブ』の取り組み」『文環研レポート』32 : 10–11.
- 若林佳史 2003『災害の心理学とその周辺－北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチー』多賀出版.

# 奥尻島研修の振り返り

人文学部日本文化学科2年 浅妻 佑軌

## 1. はじめに

私は2018年8月22日から26日にかけて奥尻島で行われた研修に参加した。私自身、離島に興味があり色々な島に行ってみたいなど感じていたため今回の研修に参加することにした。今回の研修では、1日目と最終日を移動日とし、2日目は観光協会のお手伝いと奥尻島津波館の見学、3日目は谷地地区でのワークショップ、4日にワークショップの振り返りと稲穂ふれあい研修センターの見学を行った。本当は鍋つる祭りの視察もする予定だったのだが、台風の影響で延期になってしまいそれは叶わなかった。島の村祭りというものに興味があったため残念だったが、それ以外の活動で多くのことを学ぶことができた。ここからはこの研修で行った活動とそれによって学んだこと、感じたことについて述べる。

## 2. 観光協会のお手伝いと奥尻島津波館見学

私達は二日目、日中に観光協会でのお手伝いを行った。観光協会へはバスで向かうのだが、奥尻島のバスは、バスが来たらその場で手を挙げることで停留所以外の場所でも乗り降りできると先輩から聞いて、札幌とのシステムの違いに驚いた。道路で手を挙げて本当にバスが止まった時は少しうっくりしてしまったが、無事バスに乗り観光協会へたどり着くことが出来た。観光協会でのお手伝いの内容は村祭りで使うbingoカードの切り分け、スタンプを押していくというもの。枚数が多く、単純作業だったので大変な作業だったが高校の時に生徒会として似たようなことをしていたためか、我ながら素早く作業完遂できたのではないかと感じる。前半研修に来ていた友人から奥尻島のマスコットキャラクター「うにまる」くんの中に入り、フェリーをお迎えするお手伝いをしたと聞かされていたため、てっきり自分もやると思っていたのだが、今回は「うにまる」くんの中に入ることはできなかった。作業が一段落ついた時、私は観光協会の周辺を散策することにした。この日は天気がよく、奥尻島らしい奥尻ブルーの綺麗な海を見ることができ、とても気持ちが良かった。岸壁から海を見るとウミタ



【↑観光協会の「うにまる」くん】

ナゴ、クロソイ、ガヤ、サンバソウ、ハゼの仲間など多くの魚が泳いでおり、奥尻の海の豊かさを実感した。また岸壁にはたくさんのウニも居て、とても奥尻島らしいと感じた。

周辺の散策を終えた後、私たちは奥尻島津波館へ向かった。奥尻島津波館とは奥尻島に大きな被害をもたらした北海道南西沖地震についての展示を行っている博物館だ。入館するとまず、北海道南西沖地震についての映像を視聴した。地震の被害や悲惨さが分かる10分ほどの映像だった。その後、館内の展示を見学した。奥尻に点在する遺跡から震災当時の写真まで多岐にわたる展示が行われていて、北海道南西沖地震の被害から復興への様子などを知ることが出来た。館内を見学した後はすぐ近くにある時空翔や青苗徳洋記念碑を見学し、奥尻島の復興の歴史に思いを馳せた。



【↑時空翔】

### 3. 谷地地区でのワークショップ

三日目には谷地地区でのワークショップを行った。このワークショップは谷地地区の方たちと「村祭り」「魅力」「災害」について会話を進め、地図にその内容をどんどん書き込んでいくことで、「記憶地図」を完成させていくというものだ。私は当日、「魅力」の担当だったため、地区の魅力に関することを付箋に書き、マップに張り付けていくのが仕事だった。だが、もともと人と話すのが得意ではない私はうまく話を聞き出せる気がせず、とても不安だったのを覚えている。「魅力」というある意味どういう意味にでも取れるようなことを担当したために余計に不安になってしまっていたのかもしれない。しかし、ワークショップが始まると、来てくれた地域の方が次々にお話を聞かせてくれたため、その心配は杞憂に終わった。むしろ複数の方が同時にしゃべっているのでメモに書きとるのが大変だったぐらいだ。これは奥尻島の学芸員である稻垣さんや、先輩方が場を和ませたり話をどんどん振ってくれたおかげでもあるので非常に感謝している。その中でも私が「魅力」の聞き取りで特に興味深かったのは生き物に関するお話だ。昔はすぐ近くの川で魚をとる手伝いをしたら、見返りとしてイモや魚を食べさせてもらったという話や、昔はホタルが居たという話、奥尻にはタヌキは居るがキツネは居ないから川の水を飲める、といった話がどんどん出てきて面白かった。また、自分の担当では無いのだが災害の話が結構あり、多くのことを考えさせられた。北海道南西沖地震で実際に津波が到達した地点や被害、大雨による川の増水、防災施設や設備の現状など地域の人でしか知りえないような情報をたくさん知ることが出来たのは本当に良かった。

結果として多くのことを知ることが出来た今回のワークショップだったが、反省すべきことが多くある。まず、自分から話しかけたり、もっと聞いたりすればよかったという点

だ。ワークショップを通して中々自分から質問したりすることが出来なかつたので、もし次回があれば、この点を改善してもっといろいろなことを聞き出したい。二つ目がメモの字が汚すぎるという点。このワークショップの時は焦っていたのか、フィールドノートに書いた自分のメモがあまりにも汚く、後から解読するのが非常に大変だった。もう少し、整理したフィールドノートの使い方をしていきたい。また、聞き取りの精度も低く何回も聞きなおしたりしてしまつたため、これからも練習していかなければ感じた。

#### 4. ワークショップの振り返りと稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室の見学

研修四日目の午前中にはワークショップの振り返りを行つた。前日に貼つていったメモの確認と補足などを行い、谷地地区の記憶地図はひとまず完成に近づいた。他の人のメモの中には自分がしっかりと聞き取れていなかつたり、まとめることが出来なかつた話もあり、自分はまだまだだと痛感すると共に、複数人で聞き取りをするメリットは大きいなども感じた。話し合いでの振り返りの後はワークショップの中で登場した場所や施設を実際に確認し、写真を撮影した。実際に避難道を登つてみたり、錆びついてると言われている水門を確認したりして、まさにフィールドワークという感じがして非常に楽しかつた。その中でも特に印象深かつたのが暗渠の発見だ。前日の聞き取りでは「この辺に自衛隊が暗渠を作つていたような…」という話が出ていたが、その中では詳しい場所まで特定するには至らなかつた。その暗渠を探し当てることが出来たときは気持ちが良かつたし、達成感を感じることが出来た。

野外での振り返りが終わつた後は、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室の見学を行つた。稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室には、奥尻島で捕れた化石や遺跡から出土した土器、石器などが展示されている。また、島民から寄贈された古い生活用品もたくさん展示されていて、昔の島生活の様子を知ることが出来る。建物自体も廃校になつた小学校を利用しておつり、とても雰囲気が良い博物館であつた。奥尻町史などの資料類も充実しており、奥尻について調べることがあれば是非立ち寄つてほしい場所だと感じた。

稲穂ふれあい研修センターの見学を終えた後は、手塚先生にうにまる公園へ連れて行っていただいた。うにまる公園には「キタムラサキウニ」をかたどつたモニュメントがある。このモニュメントには120本の棘があり、夜にはライトアップされるらしい。また、この公園は高台にあるので、天氣が良ければ奥尻の海を望むことができて景色がかなり良いのだろうと思われる場所であった。



【↑うにまるモニュメント】

この日は台風が迫っていたため天候が悪く、残念ながら綺麗な景色を見ることはできなかった。

## 5. 最後に

今回の奥尻島での研修は非常に楽しいものであった。私たちの宿泊場所は廃校を利用したものであり、それだけで私はワクワクしたし、毎晩自分たちで協力して料理を作るのが小学校の宿泊学習の様でとても楽しかった。また、少しだけだが奥尻の自然や文化にも触れることができた。学習面でも、私は今までここまで本格的なワークショップで聞き取りをする経験はもちろんなかつたし、フィールドワークもゼミで少しやったことがある程度の私にはとても勉強になった。この五日間で学んだことを忘れずに、これから講義や卒業研究に生かしていきたい。台風で日程が一日短縮し、鍋つる祭りの見学をすることができなかつたのは残念だったが、それでも素晴らしい「非日常」の時間を過ごすことができた。本当にあって良かったと心から思える研修であった。

こんな風に思えるのも、今回の研修でサポート、指導してくれた先輩方や手塚先生、稻垣さんやワークショップに参加してくれた谷地地区の方達のおかげであり、感謝しております。本当にありがとうございました。



【↑奥尻島最後の夕食・チャーハンパーティー】

## **奥尻と繋がる**

**人文学部日本文化学科2年 有田くるみ**

### **1. はじめに**

私は、今回の研修ではじめて奥尻島に行った。指導してくださる先生方、2人の先輩、そして同じ学年の仲間3人と共に、2018年8月7日から8月12日までの間、奥尻島の中で貴重な体験をし、さまざまなことを学ぶことができた。

この研修に参加してみようと思ったきっかけは、島で仕事をする学芸員の方は、どのようなことをしているのか気になったからだ。1年生のときの実習で地元である小樽の博物館に行っていたため、町にある博物館の学芸員の方がどのようなことをしているのかは見たことがあった。学芸員の方の仕事がどのように違うのか、自分で見てみたいと思い研修に参加した。

また、行ったことのない奥尻島がどのようなところなのかも知りたかったというのも参加した理由の一つである。

本文では、奥尻島で体験したこと、そこで私が感じたことについて述べる。

### **2. 稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室**

実習中に多く訪れたのが稻穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室だ。実習でお世話になった稻垣森太さんが管理をしている奥尻島の展示・資料保管施設である。

ここでは施設内と収蔵庫の視察、新聞の切り抜き作業の手伝いを行った。

稻穂ふれあい研修センターは、元稻穂小学校の校舎を使っている。そのため、教室だった小さな部屋がいくつかあり、それぞれテーマごとに資料がわかかれている。

テーマは大きく3つに分かれている。1つ目は、奥尻島の人が昔使っていた民具だ。家具などの生活用品から漁業などのさまざまな産業に関わるものまで展示してあった。

2つ目は、自然環境に関わる展示である。奥尻島の海や森のこと、動物のことなどについての展示がある。

3つ目は、遺跡についてだ。縄文時代から擦文時代のものがあり、本州とは少し違った文化について知ることができる。また、勾玉づくり体験もやっていて、観光客から人気があるようだ。

展示全体の特徴として、自由に触ることができる資料がとても多かった。民具や貝殻などの小さなものから、遺跡から出てきた大きな土器まで、展示してある資料の多くが触れるものになっていた。

これほど多くのものが触れる資料展示室に行くのははじめてだったため驚いた。自分で見て、触って知ることができるので、このような博物館があってもよいと感じた。

収蔵庫には、奥尻島の学校の文集や学習指導計画、まちで行った事業の資料、広告紙の原

稿などが保存してあった。見に来る人がいるかもしれないため保存しているそうだ。

稻穂ふれあいセンターは、木曜日と土曜日しか開館していないそうだ。管理している稻垣さんが教育委員会などほかの仕事もしなくてはいけないためだ。一人でさまざまな仕事をやるのは島の学芸員の特徴でもあると感じた。



稲穂ふれあい研修センター



触れる土器の展示

### 3. 奥尻島津波館

8月10日には、津波館を見学しに行った。25年前の7月12日に起きた地震による津波のことを伝えるためにつくられた施設だ。

私たちは、解説員の方のお話を聞きながら館内の見学をした。館内には被害の状況がわかる写真や展示が数多くあり、当時の奥尻島の状態がよくわかった。私は災害があったときはまだ生まれていないためどのような被害があったのかはあまり詳しくはなかったが、思っていた以上の大きな被害にあっていたことを知り驚いた。

展示だけではなく、解説員の方の説明や映像でわかりやすく当時のことがわかった。地震や津波のことを忘れず、次に起きた時のために備えていくことは大切なことだと感じた。



奥尻島津波館



奥尻島津波館の中

#### 4. 奥尻島のお祭り

先輩方の研究の手伝いのため、奥尻島で行われているお祭りに参加した。私は村祭りである赤石祭と奥尻島で久しぶりに行われた花火大会に参加した。どちらも、先輩方の手伝いでお祭りのスタッフの方やお客さんに聞き込み調査を行ったり、お祭り自体のお手伝いを行つたりした。

8月9日に行われた赤石祭は赤石地区の村祭りだ。今回は天気があまり良くなかったため、町民センターの体育館で開催された。赤石祭は奥尻島の村祭りで唯一打ち上げ花火をやるお祭りだという。スタッフもお客さんも地区内からの人が多く、毎年地域の人たちもいろんな人に会えると楽しみにしているようだった。



赤石祭の会場  
(町民センターの体育館)

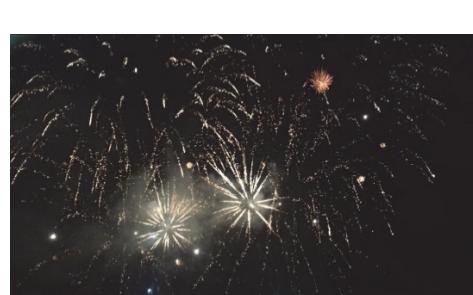


赤石祭の山車

8月11日にはLIGHT UP NIPPONという花火大会が行われた。この企画は、花火で東北を元気にと、全国のいろいろな場所で同時に花火を上げようというものだ。奥尻島では、チム島おこしの方々が中心となって企画を進めていた。大きな花火大会は久しぶりだったようで、多くの人が見に来ていた。



会場準備中



花火

村祭りと新しい花火大会の企画の二つに参加させてもらったが、どちらも住民の方を中心とした多くの人が一所懸命準備をしてお客さんを楽しませていた。

聞き込み調査とお手伝いの時にたくさんの人と話すことができていろいろなことが知れたので、とても勉強になった。

## 5. おわりに

今回の奥尻島の研修で、多くのことを学ぶことができた。

学芸員はいろいろな仕事をしているというのは知っていたが、小規模地域の学芸員の方はもっと多くの仕事をこなさなければいけないということがよくわかった。指導してくださった学芸員の稻垣さんも、稲穂ふれあい研修センターの管理と教育委員会、津波館の仕事までやっているそうだ。島で働く学芸員さんの特徴なのではないかと感じた。

研修でたくさんの体験をさせていただいた。多くの人と交流をした。先輩のお手伝いで村祭りの聞き込み調査を行った。聞き込み調査もはじめてやったため、はじめは少し不安のまま聞き込みを行っていた。しかし、奥尻島の方々はとても親切にお話してくださり、なんとかやりきることができた。この体験は今後に生かすことができると思うため、できてよかったですと感じる。

研修中、はじめてのことばかりでなかなか自主的に動くことができなかつたように感じる。先輩方や同期の3人に助けられながら、多くの経験を積むことができた。今後、またこのような機会があれば、もっと自主的にさまざまなことに挑戦していきたい。

最後に、このような経験をする機会を与えてくださった手塚薫先生、たくさんのこと教えてくださった稻垣森太さんに感謝申し上げます。

## **奥尻研修に参加して**

工学部建築学科2年 岩佐 香菜子

### **1. はじめに**

私は2018年8月7日から8月11日の4泊5日の奥尻研修に参加した。私は奥尻島を訪れるることは今回が初めてであり、行く前は楽しみでもあり不安もあった。しかし研修に参加して奥尻島の自然に触れたり、住んでいる人々とお話をしたり、札幌とは違う生活を体験して有意義な研修を送ることができた。

私がこの奥尻研修に参加した理由は、1年生のころから北海学園大学の学芸員過程を履修していて、学芸員に必要なのは自主的な、積極的な行動であると様々な先生から教わっていた。しかし、私は自動的に行動することが苦手であった。今まで何か行動したいと思っていてもなかなか実行できずにいた。今回手塚先生や稻垣さんがこのような機会を与えてくれて、この奥尻研修を通して実際に働いている学芸員を見ることで、何か今後の自分にプラスになることがあれば良いと思いこの研修に参加することを決めた。

そして私は建築関係にも興味があるので、奥尻島の建築物にも目を向け、様々なことを学ぶことができ良い奥尻研修であったと思う。本文では、この研修に参加して学んだことや思ったことを述べる。

### **2. 稲穂ふれあい研修センターにて**

今回、2年生は稲穂ふれあい研修センターの学芸員である稻垣さんの仕事のお手伝い、奥尻観光協会のお手伝い、3年生の蝉塚さん、佐々木さんの村祭りの調査の主に島民へのき取り調査、赤石祭りへの参加、津波館視察を行った。

一日目は主に移動であった。札幌からせたなのフェリー乗り場まで4時間半のバス移動、さらに奥尻島までフェリーで1時間半かかる。到着後、海洋研修センターにて稻垣さんと今後の予定について打ち合わせをした。

二日目から本格的に活動が始まった。稲穂ふれあい研修センターにて学芸員である稻垣さんの手伝いを行った。まずは、稲穂ふれあい研修センターの見学をした。擦文時代をはじめとした遺跡資料、漁業、農業関係の道具資料、勾玉についての資料などがたくさん展示されている。体育館には展示しきれない資料などがたくさん保管されていた。この稲穂ふれあいセンターは元稲穂小学校を利用しておおり、教室ごとにブースが分かれています、学校の面影が残っている（写真1）。現在稲穂小学校は平成15年に宮津小学校と統合、平成26年に宮津小学校と奥尻小学校が統合し、奥尻小学校となっている。展示については基本ハンズフリーで実際に触って体験できる。



写真1 教室を利用した展示室



写真2 昔と今の対比

そのため、物の本質が理解できると稻垣さんはおっしゃっていた。触れない資料については、ケースに保存されている。昔と今の道具の対比（写真2）、実際の遺跡の一部分を再現、勾玉を実際に作れるコーナーなど、様々な工夫がなされていた。印象に残っている資料は、

その後に、稻垣さんが研究に使用する新聞の切り抜きの手伝いを行った。稻垣さんは学芸員として研究職もしながら教育委員会の仕事も兼任している。また、津波館の管理をしている。これは人手不足の島ならではの特徴だと感じた。

### 3. 赤石祭り

3日目は奥尻地区での赤石祭りに参加した。午前中は前日に引き続き稲穂ふれあい研修センターにて稻垣さんの研究に使用する新聞の切り抜き作業を行った。昼頃から私たちが研修中の生活の拠点である町民センターにて、地区のお母さん方のお祭りで売る焼きそばを作るお手伝いをした。お母さん方は初対面の私たちにも親切に教えてくださり、優しく接し

てくれた。6時ごろになると赤石祭りが始まり、私はビールやチューハイ、ジュースの販売の手伝いをした。また、先輩の村祭り調査の手伝いのため聞き取り調査を行った。快く調査を引き受けてくれて、細かくたくさん情報教えてくれた。私が特に気になったことは、年々お祭りの参加人数が少なくなっていることである。特に子どもが減少していると聞き、島を離れる若者が増えていると感じた。

最後は、研修に来ている同期、先輩、先生もお祭りに参加し、bingo大会や花火を楽しんだ（写真3）。赤石祭りに参加して、地域全体が一体となってお祭りを成功させようという気持ちが伝わってきた。札幌などのお祭りとはまた違う、貴重な体験をさせていただいた。

#### 4. 津波館視察

4日目には主に奥尻島津波館（写真4）の視察をした。津波館は1993年7月12日22時17分、奥尻島の北方沖の海底で起こった北海道南西沖地震による、甚大な被害を後世に伝えるための博物館である。地震直後には巨大な津波が押し寄せ、198名の方が犠牲となった。この津波館は津波の被害が最も多かった青苗地区にあり、地震前は岬の端まで家が多く建ち、一番人口が多い地区であった。1分24秒の揺れのあと、時速500～600キロメートルの速さで津波が地震後約5分後には押し寄せた。東日本大震災での津波は時速120キロメートルだったので、相当な速さである。この津波で家や電柱がまるごと流され、アスファルトは剥がされるなど一瞬でいつもの生活が奪われた。

奥尻島津波館ではこの被害についての資料を数多く展示している。写真資料や、立体模型（写真5）、また、震災当時の小学生が書いた詩、震災をイメージしたオブジェ、犠牲者198名を慎む「198のひかり」など展示に関しての様々な工夫がなされていると感じた。



写真4 奥尻島津波館



写真3 ビンゴ大会の様子



写真5 模型展示資料

そして地下1階には映像ホールがあり、映像で地震の被害を感じることができ、より深い知識が得られる。震災についての資料のほかに、奥尻島で発掘された勾玉についての資料も展示されている。この建物は円状であり、全体がゆったりとしたスロープになっているため車いすで来られた方や小さな子どもも楽しめるような工夫がなされていたと感じた。

この大変な大震災の被害を忘れてはならないという奥尻の人々の熱意が感じられた

た視察であった。

## 5. おわりに

この4泊5日の奥尻研修では、前文より示した他に奥尻島の自然や歴史、人々の温かさを感じた研修になった。以下写真とともに紹介する。

2日目に、宮津にある宮津弁天宮というところを訪れた。文政年間（1818～1829）に宮津地区の漁民によって海上安全と豊漁を祈願して作られたものである。宮津弁天宮は崖のような高い場所にあり、そこに行くには急な階段を登らなければならなくとても怖かった（写真6）。

また、鍋釣岩というとても珍しい形をした岩も見ることができた。これは形が鍋釜の釣をかけた様子に似ているために命名された。岩の上に生えている植物はヒロハノヘビノボラズと言って、蛇も登れない場所であるということからつけられたのだそうだ。奥尻にはこのように島の周りに小さな岩はたくさんあるがこのような珍しい形の岩にはびっくりした（写真7）。



写真6 宮津弁天宮



写真7 鍋釣岩

の大きな相違点だと感じた。そして、研修中に何度か聞いたのだが、人が亡くなった際に島内にアナウンスが流れる。そこで葬儀の日にち、時間場所などがアナウンスされる。最初に聞いたときはとても驚いた。

札幌との違いに驚きもたくさんあったが、初めて訪れた奥尻という地はとても新鮮で楽しい研修になった。最後に奥尻島に住む人たちはみんな優しく、温かな気持ちにさせてくれた。今回このような貴重な体験をさせていただいた、手塚先生、稻垣さん、先輩の蟬塚さん、佐々木さんに感謝申し上げます。

また、奥尻島に初めて訪れて、色々なことを経験することができた。一番驚いたことは、奥尻の虫はとても大きいことだ。また私は奥尻に来て初めてゲジゲジという存在を知った。町民センターには夏の時期は虫がたくさん出るらしく、一緒に来た同期と虫に格闘しながらの生活を送った。また信号機が島に2つしかないということも驚いた。島を一周するようには道路があり、狭い道も多いためところどころに待避所が設置されていた。交差する場所がないため、信号機も必要ないのは札幌と

# **奥尻島での研修**

**北海学園大学法学部政治学科2年 佐藤 宏太**

## **1. はじめに**

僕は、平成30年8月7日から8月11日にかけて、奥尻島の研修を行った。今回、この研修に参加しようと思ったきっかけは、僕は、子供の時から旅行が好きで、小学生の高学年の時から約五年かけてそれぞれの地域の観光を行いながら、博物館を回り、道の駅をすべて回ったことがある。北海道の様々な地域を訪れて、その地域の文化や特産物などに触れたからこそ、一度奥尻島を訪れたいと思っていた。また、学芸員過程を履修していて、奥尻島にある博物館の資料の閲覧やそれぞれの地域の名所を見学することで、奥尻についての歴史や文化に関する知識を深めながら、様々な人と交流したいと思っていたので、今回の奥尻島の研修に参加するに至った。本文では、奥尻島の研修に参加するにあたり、体験したこと、経験したことについて述べる。

## **2. 奥尻での研修**

ここでは、お祭り以外で主に行った研修について述べたい。今回、奥尻島の学芸員である稻垣さんにご協力いただき、稲穂ふれあい研修センターの視察、奥尻島に関する新聞記事を保存するという運営補助を行った。稻垣さんは、普通の学芸員とは違って、様々な業務を一人で複数兼務していて、何かを専門的に研究することではないという点が札幌などの都会の博物館とは違う部分だと感じた。稲穂ふれあい研修センターは、元は小学校であった場所を活用していて、実際に展示を触ってもよいという特徴がある博物館である。太平洋戦争のころの本の閲覧や本物の縄文土器なども触れることができ、より印象に残すことができた。また、奥尻の歴史に関する資料も数多く展示されていて奥尻に関する知識が深まった。次に、観光協会にお米などの食べ物を差し入れていただいた代わりに、奥尻島観光案内所で奥尻島のマスコットキャラクター「うにまるくん」に扮して約50分ほどフェリーの送り迎えを行いながら、観光客の方と写真撮影などの交流を行った。キャラの中の人になるのは初めての経験だったので、中の人の苦労がよく分かった。「うにまるくん」は頭が非常に大きく、中で、背中でリュックサックのように背負わなければならず、かなりの重さであった。さらに頭の周りにウニをモチーフにしたとげがついているので、方向転換する時も細心の注意を払って行わなければいけなかった。一番苦労した点は、一切話すことができない点だ。観光客の方などと交流する時も体全体を使ったジェスチャーで答えるのが精いっぱいで、いつもは出来ることが出来なくなるというのは大変だと分かることが出来た。



稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室

うにまるくん

### 3. 奥尻の祭り

僕は、8月9日に行われた奥尻島の赤石の地域のお祭りのお手伝いを行った。赤石町内役場から借りたテントの部品を組み立てや、車に乗せていただき炭火台や食べ物を地域の方々の協力を得ながら調達、体育館で行われる会場設営などを行った。日頃お祭り自体には参加したことがあっても、事前の準備に参加することは初めてだったので、お祭りが、たくさんの人によって成り立っていることを実感させられた。また、祭りでは帰省して帰ってくる若い人が多いので、若い人がいると、どこの人の子供なのか気になる人が多いと聞き、他の祭りよりも地域の交流の深さを感じることができた。8月9日と10日に行われた獅子舞の寄贈の視察は赤石のお祭りの会場の近くの神社で行われた。その後、昔の村祭りについての調査を行った。そこでは、山車は昔押す形ではなく、担ぎ上げる物であったということ、50年前のお祭りでは猿田彦（歴史上の人物の名前で、お面をかぶっている。アマテラスの神様が来た時にお迎えする役目）と呼ばれる神様の先導役を先頭に、猿田彦子を護衛する人、はたもち（赤い旗を持つ、役目を終えるとおこずかいがもらえる）、やっこ（神様の荷物を持つ役目）、獅子舞の人、太鼓を叩く人と持つ人、山車を曳く人（神様の盛り上げ役で、列の一番後ろに分かれ、合計36人で赤石地域を一軒一軒回っていた（ルート 保食神社⇒鳥頭川⇒赤石⇒恩顧浜⇒赤石⇒保食神社）という昔のお祭りについての内容や、車が通り始めて、優先的に車を通すようになってから山を曳くことがなくなっていたという、お祭りの移り変わりについての貴重なお話を聞くことが出来た。奥尻の昔を考えるうえで必要な資料であると実感し、また話すことが出来る機会があれば、またお話を伺ってみたい。



お祭りの準備風景



獅子頭の寄贈が行われた保食神社

#### 4. 奥尻の観光

奥尻について深く知るために、さまざまな場所で観光を行った。

まずは、宮津弁天宮を訪れた。お社までの道のりは険しく、海に突き出た岬の頂上にある。一つ一つの階段の高さが高い急な階段のため、上り下りにはとても注意を払う必要があった。また、弁天宮では、宮津地区の福の神として弁天様が祀られていて、昔は、お酒を飲みながら神輿を担ぎ、階段を上下しながらお社へ奉納していたと聞き、非常に危ないと感じたが、亡くなっている人が一人もいないと話を聞き驚いた。階段の左右には良い景色が広がっていて、写真を撮影することができ、お参りもすることが出来たので、訪問した価値があったと感じた。

つぎに、奥尻島津波館を訪問した。ここでは、奥尻の津波に関する展示のほか、奥尻の歴史に関する資料も取り揃えられていた。奥尻島津波館は奥尻島の最南端の地域である青苗にあり、津波館は奥尻島の地震で壊された多くの民家の跡地を使い建てられた場所である。また津波が来た時に備え、盛り土をするなどの工夫が施されている。展示の案内をご担当のスタッフの方が誘導をしてくださる他、約9分間の1993年に起きた北海道南西沖地震についての映像を見ることができ、奥尻島の歴史についての知識を多く身につけることが出来た。また僕は今月、北海道胆振東部地震にて初めて震度5強の揺れを体感し、物の破損や停電の被害に遭い夏休み全体を通して、地震について改めて考え直すことができ、今後に向けてよい経験となった。



宮津弁天宮へと続く道



奥尻島津波館

## 5. おわりに

今回の奥尻島研修は僕にとって、初めての島での長時間の滞在であった。アブなどの虫や、買い物をする時の環境など、いつもと違うことを多く体験でき、とても良い経験となった。研修前は奥尻島のイメージは、津波で大きな被害を受けたというイメージが強かったが、研修後は奥尻には伝統的な祭りや文化などが存在し、島民の方々が奥尻を活性化させるために頑張っている姿を目の当たりにしてもっと奥尻を盛り上げられるような手助けをできればと感じるようになった。また、研修の中で奥尻の新鮮なアワビやホタテなどの海産物も食べることが出来た。中でもウニを人生で初めて食べたときのおいしさは今でも心に残っている。神威脇という地域の気持ち良い温泉にも入ることができ、奥尻の魅力を多く堪能することが出来た。

最後に、奥尻島の研修と共に参加し活動した仲間と僕たちの先輩である稻垣森太さん、奥尻島の研修の準備をしてくれた先輩方、研修の機会を与えてくださった手塚先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

## はじめての奥尻島

人文学部日本文化学科2年 高橋 佑惟

### 1. はじめに

2018年8月22日から26日まで行われた、奥尻島研修に参加した。私にとって初めての研修で、前日まで緊張していたのを覚えている。当日は札幌から瀬棚までバスで移動し、瀬棚からはフェリーで奥尻島に向かった。その日の朝はいつもより早かったため移動中はほとんど眠っていたが、いざ奥尻島に着くと、無事についたという安心感とこれからどんなことをするのだろうかという期待感に包まれた。

今回の研修では、観光協会のお手伝いや津波館と稻穂町民ふれあいセンターの視察、ワークショップを行った。どれも奥尻島に来ないと体験できない活動であり、この研修の有意義さを感じた。奥尻島の学芸員である稻垣森太さん、人文学部教授の手塚薰先生をはじめ、3年生の先輩方や同期に助けられながら充実した日々を過ごすことができたと思う。これから、この研修で経験したことについて述べる。

### 2. 奥尻島津波館と稻穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室の視察

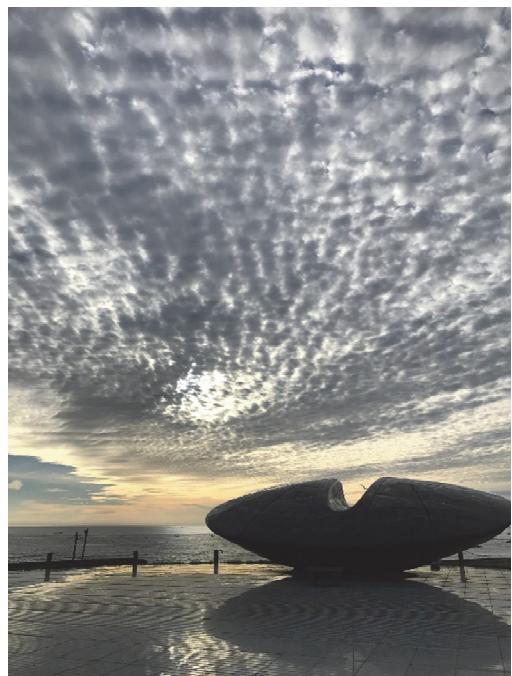
1日目は移動が主で、本格的な活動が始まったのは2日目からだった。2日目は午後1時から観光協会の手伝いをして、午後3時に奥尻島に到着した手塚先生の出迎えをした後、手塚先生の車に乗せてもらい津波館へ向かった。津波館に向かう道中、北海道南西沖地震で亡くなられた方々の慰靈碑を見た。慰靈碑に刻まれた多くの名前と「自然の猛威に、私たちは己の生死さえも、運命という言葉に委ねる以外、なす術を知らなかった」という言葉に、地震と津波による被害の大きさと恐怖を感じられた。津波館では、まず初めにビデオ資料を見せてもらい、その後に震災から復興までに関わる展示を見学した。当時の震災直後の様子を映像や写真、立体模型で詳しく知ることができるのだが、なかでも印象に残ったのは子供たちが綴った詩だ。子供たちの視点から見た震災をリアルに感じられて、一層この震災が恐ろしいものだったことがわかった。正直に言うと、私は奥尻島に来るまで全く北海道南西沖地震について知らなかった。今回津波館を訪れて、ワークショップで島民の方々に震災のお話を聞く前に知識を取り入れたし、奥尻島で震災があったという事実をしっかりと知ることができたので良かったと思う。また、津波館で学んだことをこれからも忘れずに、後世に伝えられるようにしなければならないと思った。

3日目にはワークショップを行った。これは後で述べることにする。4日目は、本当は鍋つる祭りが開催され、私たちもそれに参加する予定だったが、台風の影響で祭りが延期された。そのため、この日は稻垣さんが所属している稻穂町民ふれあいセンターに行くことにな

った。先生と先輩が島民の方にお話を聞いている間に、私は施設内を見学していた。稲穂町民ふれあいセンターはもともと小学校で津波被害を受けた建物を建て直して利用しており、教室が展示室として使われていた。奥尻島の自然、縄文文化、擦文文化、戦争、生活用品や農業・漁・林業に関する道具についての展示のほか、村祭りで使われた山車の写真や北海道南西沖地震の際に送られてきた救援物資などが展示されていた。また、勾玉づくりが体験できるスペースもあった。現在の奥尻島を作り上げてきた資料が多く展示されており、奥尻島を知るには外せない場所だと思った。今回は特別に稻垣さんに資料を収蔵している部屋を見せてもらい、実際どのように資料が保管されているのか知ることができた。元小学校ということもありどこか懐かしい雰囲気で、じっくりと見学できる場所だったと思う。また、展示物に触ってもいいということで、実際に触ってみたり触ることで感触を比べてみたりすることができた。あまり来ることができない場所であるため、隅々まで見学できてよかったです。



奥尻島津波館



時空翔

### 3. ワークショップ

3日目はこの研修で一番大きなイベントであるワークショップを行った。奥尻島谷地地区の魅力、村祭り、災害の3点について島民の方々に話を聞く、という活動で、当日には8名が集まってくれました。はじめ、皆さんすぐには話してくださらないかもしれないという

不安があったが、全くそんなことはなく、すぐに話し始めてくれた。昭和38年の奥尻大火の話から始まり、川の氾濫や飲料水について、水道化、村祭りのことなど様々なジャンルの話を聞かせてもらった。氾濫によって鍋釣川や鳥頭川の本流が変わったことや、谷地地区は岩盤が安定していてほかの地域よりも土砂崩れが少ないと、水道は谷地地区から始まつたこと、村祭りが子供たちのために始まり山車の名前を付けるのにもめたことなど、いろんな話を教えてもらうことができ、どれもここでしか聞けない話でとても興味深かった。

谷地地区の村祭りは、谷地地区の子供たちのために始まったそうだ。奥尻地区や赤石地区には山車があったが谷地地区ではなく、それだと子供たちがかわいそうだということで村祭りが始まった。山車の名前である子宝山は、子供たちのために、という思いを込めて名付けられた。しかし、現在は人手が足りず、祭りができない状況が続いているという。この話を聞いて、大学から有志を募って協力隊を結成できないかと思った。

私が印象に残った話は、水門を上るのに使う螺旋階段が腐っているという話だ。震災や津波の被害があってから避難路やそれに関する看板などが作られるようになったそうだが、消火栓がなく防災無線が一つしかないなど、災害対策はまだまだ不十分なところがあり、腐った螺旋階段がそれを表しているようだと思った。万が一に備えてしっかり対策を取る必要がありそうだ。

今回初めてワークショップに参加したが、正直話を聞くので精一杯で、自分から質問をすることができなかつた。今思えば、もっとできたことがあったのではと後悔する部分もあるが、この機会を重要な教訓として役立てたいと思う。

#### 4. 奥尻島での生活

奥尻島に滞在している間、私は奥尻町民センターに宿泊していた。事前に先生から昆虫がいるとの情報を受け取っていたので心構えはできていたし、実際思いのほか平気だったが、いたるところに虫がいて、普段虫をあまり見ないで生活しているため新鮮に感じた。移動は基本的に車の移動で、改めて車の便利さを感じ、車は島民にとって必要不可欠ではないかと思った。周りを見渡せばすぐ山と海が見え、奥尻島が自然豊かなことが間近で感じられたし、その分自然の猛威が凄まじい場所もあるのだろうと思った。

町民センターでは自炊生活だった。私はあまり料理が得意ではないのだが、稻垣さんや先生、先輩方、それに同期がいたので心配することはなかったし、それなりに手伝いができたと思う。慣れない生活ではあったが、周りの人と協力することができた。



最終日の夕食

## 5. おわりに

今回、初めての研修だったが、率直に言えばとても楽しむことができた。失敗や後悔がないわけではないが、すべてが新鮮で貴重な体験だった。ただ、台風の影響で村祭りに参加できなかったこと、滞在期間が1日縮まったことは本当に残念に思う。この研修で奥尻島のことだけでなく、学芸員を目指す者として必要なことを教わることができたと思う。また、先輩方の活動を近くで見ることができて、今後どのように活動していくべきかとても参考になった。今回の奥尻島研修で、私はこれから何に向かって学習していくべきか、改めて考えるきっかけを得ることができたと思う。

最後に、このような素晴らしい機会をつくってくださった稻垣さんと手塚先生、頼りになる先輩方と一緒に感謝を申し上げます。ありがとうございました。



鍋釣岩

# **奥尻島研修での学び**

**人文学部日本文化学科2年 山田 穂乃花**

## **1. はじめに**

私は、2018年8月7日から12日にかけて行われた、奥尻研修の前半組として参加し、奥尻島に5泊6日滞在した。当初は人生で初めて離島に訪れるということもあり、短い期間ながらも島での滞在に不安を抱えていたが、島の学芸員である稻垣森太さんをはじめ、手塚先生、3年生の2名の先輩方、同期3名とともに協力しながら、島ならではの貴重な体験をすることができた。私がこの研修に参加しようと思ったきっかけとなったのは、「離島での生活を体験しながら、博物館を見学することができる」という点である。以前、大学進学前に大学のホームページに掲載されていた奥尻島での研修の記事を見てから、学芸員課程を受講したら必ず参加しようと決めていた。また、移動や宿泊施設の関係上、少人数での研修ということから、より内容の濃い体験ができるのではないかという期待もあったため、すぐに参加を決めた。この研修に参加するにあたり、事前に先輩方と手塚先生から、実際に訪れた際の体験談や島の行事などの予備知識を丁寧に教わることができた。奥尻島到着後は、島民の方々や観光協会の方々と交流しながら学びを深める機会が多くあり、とても有意義な時間を過ごすことができたように思う。本文では、奥尻島で学んだ生活や経験について述べる。

## **2. 稲穂ふれあい研修センター**

1日目は札幌から奥尻島へ、バスとフェリーに乗って約6時間半と、とても長い移動となった。2日目と3日日の午前からは、島の学芸員であり、私たちの先輩である稻垣さんが勤めている「稻穂ふれあい研修センター」にて、見学と新聞の切り抜き作業を行った。

「稻穂ふれあい研修センター」は海と山に囲まれた場所にある元稻穂小学校の校舎をそのまま使用しており、今まで見てきた博物館の中では「博物館らしさ」のようなものが薄い、というのが第一印象だった。実際に中に入つてみると、かつて使用されていた民具や土器、漁業関係の資料、戦争の際の衣服等の資料があり、バラエティに富んだ展示がされていた。奥尻町に関する豊富な資料とともに、ところどころには小学校の時に使用されていた教室のプレートや内装がそのまま残されており、体育館や図書室などは収蔵庫として活用されていたことにも興味深さを感じた。何より驚いたのが、多大な資料を展示しつつも展示ケース自体が存在せず、来館者が気軽に様々な資料を手に取ることができるという点である。一部のハンズオンの展示を除き、博物館に展示ケースがないというのは初めて見ることで、資料の中には7000年以上前の縄文土器も展示していることをお聞きし、

実際に触れる事が出来たのは本当に貴重な体験となった。展示している資料のほとんどを手に取ることができるというのは簡単なことではなく、日光や人の手に触れることで資料の劣化を進める事となる場合もあり、盗難などといった被害も考えられると思うが、稻垣さんからお聞きした「ガラスケースがないことで物の本質が分かる」という観点には同意できる面も多々あった。また、このような展示方法は奥尻島だからこそ強みだと改めて感じた。

一通り見学を終え、新聞の切り抜きと整理の作業に移行したが、思っていたよりもかなり難易度の高い作業となった。私は切り抜かれた新聞記事を指定された分野に分けるという内容を主に行つたが、そのまま振り分けるのではなく、一度記事の内容を確認し、自分なりにどの分野に当てはまるのか考えなければならなかつた。最初のうちは慣れるまでに時間がかかったが、先輩方や稻垣さんにアドバイスを頂きながら日付ごとに整理をしながら作業を進められた。指定された分野に振り分けていくうちに、記事量の多さに偏りがあることに気が付いた。自然や遺産を扱う記事に比べて、奥尻島に関連する記事がとても少なく、記事の内容も災害などについて扱っているように感じ、さらに奥尻島への理解が深まつた。その後、ここでの作業の際に読んだ新聞記事の内容が滞在中に知識として約に立つ場面があり、このような体験をさせてくださいましたことに感謝したい。



7000年前の縄文時代の土器



ガラスケースのない展示

### 3. 赤石祭り

3日目の午後からは、私たちが宿泊している赤石地区の「奥尻町民センター」にて行われる「赤石祭り」の運営のお手伝いと聞き取り調査を行つた。赤石祭りは赤石地区に居住している方をはじめ、地区内にある保食神社の方々などを中心に赤石地区が一丸となって盛り上がる行事の一つである。先輩方は保食神社の方々に聞き取り調査を行うことで、私は同期の有田さんと岩佐さんとともに、町民センター内にある体育館で会場の手伝

いと聞き取り調査を行った。会場内では、お祭りならではのジュースや食品の販売を行っており、引換券を受け取って商品を渡す、という作業が主であった。個人的に接客の経験が少なく焦って間違えてしまう場面があったものの、島民の方々から温かいお言葉を頂きながら経験を積むことができた。

お手伝いの合間に、お祭りの運営をしている方や参加者の方々に村祭りの調査ということでお話を伺う時間があった。各自で質問調査票を手に、「島のどの地域の村祭りに参加した経験があるか」等の簡単なアンケートを取るという調査であったが、私は20代から30代の4人の方々から貴重なお話を伺うことができた。4人の方々からは、「25年前の震災前後で、村祭りに変化はあったか。」という質問の際に必ず「人口が減った」という旨の内容が挙げられた。「25年前の南西沖地震の際、自身は実際に被害にあわなかつたものの、人口の減少により村祭りの活気が減った。」とのことで、村祭りの魅力や山車について話してくださった時とは一変して暗い表情になる姿が印象に深く残った。今回の赤石祭りはとても賑わっているように見受けられたが、お話を伺う中で参加者の違った一面を見ることができ、様々な刺激を受けた。聞き取り調査後は先輩方や手塚先生とも合流し、bingo大会への参加や花火の鑑賞などといった、お祭りの参加者側として楽しむことで、赤石祭りに深く携わることができたよう思う。



お祭りで使用された山車



花火鑑賞

#### 4. 奥尻島津波館

4日目の午前からは、手塚先生と同期3名とともに奥尻島津波館の見学を主に、青苗地区や神威脇地区の視察を行った。奥尻島津波館は奥尻島について事前に学習した時から、訪れてみたい施設として個人的に興味があった。25年前に津波の被害にあったという事実を現地で学ぶことができるということは、普段では体験できないことであり、大きな期

待っていた。津波館の職員の方による解説が約30分程度、ビデオ鑑賞を10分程度行い、その後は20分程度の見学となった。25年前の南西沖地震では、奥尻島の先端である青苗地区の被害がとても大きく、1分24秒もの長い縦揺れが続いた後、高台を含めた500数軒がすべて津波によって流されてしまったとことをお聞きした。館内の写真パネルには、現在の青苗地区の姿と地震発生当時の悲惨な様子が多く残されており、津波による火災で被害にあった写真や復元模型等も配置されていた。そのような物が原型を保てないほどの大きな震災を受けつつも、完全復興までに2年から5年という早さにはとても驚いた。また、津波館には津波の関する資料のほかにも、昭和51年に青苗遺跡で発掘された丁字頭勾玉やなべつる岩に関する資料などが多数あり、津波のことだけではなく、青苗地区について知る良い機会となったと思う。

津波館見学後は時空翔を見て回り、神威脇地区の視察に向かった。神威脇地区は奥尻島の西側にある地区で、稲穂地区や赤石地区とはまた違った雰囲気があり、民家などよりも岩場が多い印象を受けた。途中にある神威脇温泉では聞き取り調査を行いつつも実際に入浴できる時間があり、研修中も和やかな雰囲気で視察ができた。限られた期間の中で各地区の特徴を見ながら奥尻島一周ができた事には、手塚先生や稻垣さんのご協力があってこそだと改めて実感した。



津波に流される瓦礫の復元模型



時空翔

## 5. おわりに

今回の研修は学芸員過程を受講してから初めての長い研修であったが、奥尻島という珍しい環境で貴重な体験をできたことは、私にとって大きな学びとなった。当初は不安もあり島民の方々との交流でもぎこちない部分があったが、島ならではの地域性に触れ、様々な場所に訪れる事で知識を深めていくことができた。普段の実習であれば見逃してしまう

ような景色にも驚きや発見が詰まっていて、博物館での作業以外でも刺激を受けることで自身の視野の広がりを感じられた。また、普段とは違う慣れない環境の中で自分から積極的に動き、学びを深めていく姿勢の重要性を再確認できたため、この研修で得たことを今後の大学の授業で生かしていきたいと考えている。

最後に、限られた期間の中で貴重な体験をさせて下さった稻垣さん、たくさんのご指導をして下さった手塚先生、丁寧にアドバイスをしながらリードして下さった先輩方に感謝申し上げます。また、助け合い協力しながら活動を共にした同期3名も本当にありがとうございました。

# 震災前後の青苗言代主神社例祭について

人文学部日本文化学科3年 蟬塚 咲衣

## 1. はじめに

私は大学三年生になって以降、奥尻島で行われている「祭り」に関心を持ち、調査を続けてきた。2018年6月に「賽の河原祭り」、2018年7月に「室津祭り」、そして2018年8月に島の各地区で行われている「村祭り」を調査するために奥尻島を訪れ、1993年に発生した「北海道南西沖地震」によって祭りにどのような影響があったのかを明らかにする目的で調査を行った。その中でも、学芸員課程の研修の一環として2018年8月7日から8月26日までの約三週間にわたって実施した調査では、五つの地区で参与観察を行い、実際の「村祭り」を目にすることができた。ひとことで「村祭り」と言っても、地区によって行われる催しの様子は異なっており、それぞれの地区の特色が感じられた。

全ての祭りについて記述するのは難しいため、今回は2018年8月と2019年3月の二度にわたくて調査を行った青苗地区に焦点を当てる。青苗地区は「村祭り」の中で唯一、猿田彦や神輿、山車が連なり地区を練り歩く行列が現在も行われている地区である。「北海道南西沖地震」において奥尻島の中で最も大きな被害を受けたにも関わらず、再興を遂げた青苗言代主神社例祭について記していきたい。

## 2. 青苗地区と震災前の言代主神社例祭について

初めに、青苗地区と言代主神社の震災前の様子について記す。青苗地区は奥尻島の南の端に位置し(図1)、人口861人、世帯数487戸と、奥尻島内で最も多くの人口を有する地区である。「北海道南西沖地震」では、死者87名、行方不明者20名、住宅の全半壊戸数342戸という被害を受けた。

青苗地区的祭りは、1831年に「恵比須神社」と称して創立されたのが始まりとされるが、神社は1872年に「言代主神社」に社名を変更し、さらに1995年に「青苗言代主神社」に変更され、それが現在の神社である(図2)。

震災前の言代主神社例祭は、猿田彦、神輿、樽神輿(子どもが担ぐ神輿)、山車二台が行列を作り、青苗地区の家を一軒一軒まわっていくというものであ



【図1】奥尻島

った。祭りの期間は毎年 8 月 12 日から 8 月 14 日である。各家では食べ物やお酒などが振る舞われ、午前中から日付が変わる時間帯までかなりの時間をかけて地区をまわっていたようだ。神輿担ぎについてはわら草履を履いて行われており、主に漁師が担いでいたようである。祭りが始められてからかなりの時間が経過しており祭りに関する由来は分からなくなっている中で、神輿については過去に青苗の岬で遭難した船に積まれていたものを震災前まで使用していたという興味深い話もうかがうことができた。

山車についてはニシン漁の際に歌う歌である「きりごえ」（島の人は「はおい」と呼んでいる）を、家に住んでいる人の職業によって大漁祈願や商売繁盛など意味を変化させながら、家の中や玄関で歌い上げる。子どもが担ぐ樽神輿はお酒の樽を担いでいたようだ。「北海道南西沖地震」の際に発生した津波と火災によって祭りに使用する道具は全て失われ、現在使用している道具は祭り再興の際に購入したとうかがった。



【図 2】青苗言代主神社

### 3. 青苗言代主神社例祭の調査

次に、私が 2018 年 8 月 12 日から 8 月 14 日に行った青苗言代主神社例祭の調査について記す。宵宮である 12 日の夜には神社で神主による神事が行われる他に、青苗地区の公園で行われている夏祭りの会場まで山車が運ばれる（図 3）。山車を曳くのは、子どもたちと「はおい」「下声」と呼ばれる大人たちである。震災以前には山車は「恵比須山」と「船魂山」の二台があつたが、再興する際に祭りの担い手の減少や金銭的な理由に加え、山車の歴史も考慮され話し合われた結果、「恵比須山」だけが作られることになった。夜の暗闇の中でライトアップされた山車は会場でも存在感を放っており、神々しく感じられた（図 4）。



【図 3】山車曳きの様子

8 月 13 日は本宮であり、行列が地区内をまわる一日目である。私は同期の佐々木理子さんと二人で、午前中には青苗言代主神社に到着し、その後は神輿や山車の後ろについてまわりながら聞

き取り調査を行った。現在の行列は、樽神輿と船魂山がなくなったため、猿田彦、神輿、恵比須山という三つの要素で構成されている。聞き取り調査では、どこに住んでいる人が青苗地区の村祭りの担い手になっているのか、村祭りについて最近の変化や気付いたこと、震災前後の村祭りの変化、村祭りの魅力だと感じるところについてうかがった。ここではいくつかの証言を取り上げながら述べていきたい。

村祭りの担い手については、神輿の担ぎ手に関しては主に現在青苗地区に住んでいる人に声が掛けられているようだった。例外もあるが「職場で手伝いの依頼を受けた」<sup>(1)</sup>など、募集が掛かる範囲は限定的な印象を受けた。かつては漁師を中心となって担がれていたようである神輿だが、「普段の仕事では付き合いがない人との接点ができる」<sup>(2)</sup>という証言からわかるように、現在は担ぎ手の職業の多様化に伴って、祭りが異なる職種の人々の交流の場としての機能も持っていることがうかがえた。祭りの担い手の属性については、青苗地区以外でもどのような傾向が読み取れるのか、分析を続けていきたい。

村祭りについて最近の変化や気付いたことについてうかがうと、最も多かった証言が「人が減った」ということだった。子どもや若い人がいないという若い世代に関する声の中には、「子どもがいれば、親も盛り上げようとした」<sup>(3)</sup>という子どもがいるからこそ生まれる活気について話して下さった方もいた。昔の祭りの様子を知る方は、「昔は今の倍の人数がいた」<sup>(4)</sup>「昔は 40 人から 50 人いた神輿の担ぎ手も今は半分以下」<sup>(5)</sup>など、昔と現在の人数の差について述べながら「寂しくなった」「人手が足りない」と話していた。人が減ったことによる祭りの継続を懸念する声も上がっていた。

震災前後の村祭りの変化については、二台あった山車が一台になってしまったという声が多かった。また、「町並みが代わったことで賑やかさに欠ける、昔は道路が狭かったため大勢集まって騒ぐことができた」<sup>(6)</sup>や「昔は道が狭かったので、あまり横に移動する必要がなかった」<sup>(7)</sup>という復興された町並みによる祭りの様子の変化に関する証言もあった。一方で、「震災後に帰ってきた人もいる」<sup>(8)</sup>や「復興への思いから夏には奥尻島に帰っていた」<sup>(9)</sup>など震



【図 4】現在の恵比須山



【図 5】台車に乗っている神輿

災を機に島に戻ってきたという方もおり、プラスな一面もうかがえた。

村祭りの魅力についてうかがうと、「元々は大漁祈願の意味だったが、島を離れた人がまた来る場所になった」<sup>(10)</sup>や「帰省してくる人が多いため、懐かしい人と会える再会の場になっている」<sup>(11)</sup>という証言から、祭りの意味合いが変化してきているような印象を受けた。また、若い世代からは「大人と関わることが普段あまりないので、祭りは良い機会」<sup>(12)</sup>という声もあり、祭りは幅広い属性の人々が集まり、顔を合わせる場になっているようである。そして、「中学校が合併されたため学校のイベントがなくなり、青苗が盛り上るのは祭りくらい」<sup>(13)</sup>や「祭りがなくなると交流の場がなくなってしまう」<sup>(14)</sup>といった証言もあり、この祭りは地区の中でも人が集まる貴重な機会であると認識されているようだった。さらに、「行列と神輿と山車の三つが出ている祭りは青苗だけ」<sup>(15)</sup>という証言から、青苗地区の誇りがうかがえたことも印象的だった。

私たちが調査の中で見ていた神輿は、基本的に震災後に作成した台車に乗せて押すように巡行していたが（図5）、19時頃には担ぐ姿を見ることができた（図6）。昼間は担ぎ手が少ないと台車を使用するが、夜には仕事が終わって担ぎ手が増えるため、担げるようになるのだという。その時に神輿を担いでいたのは大人16人だったが、今回は過去最少の人数で担ぐことができたという話をうかがった。担ぎ手の減少が進む中では、台車をうまく利用するなど、いかに負担を軽減させながら祭りを行えるかが重要なのかもしれない。



【図6】担がれている神輿

また、私たちが神輿を見ていると、神輿の担当の方が「神輿には、地震が来ないように龍がナマズを押さえつけている様子が彫られている」<sup>(16)</sup>と教えてくれた（図7）。この彫刻は世界に一つしかないものであり、震災への思いを目に見える形で表現した例であるといえる。祭りに用いる神輿にこのような装飾が施されることによって一年に一度はこの彫刻と向き合う機会が自然に生まれ、それは震災を忘れないことや、その記憶を世代を越えて語り継いでいくことに繋がるのではないかだろうか。

8月14日は行列が地区内をまわる二日目であり、私たちは昼過ぎから前日と同様に神輿と山車の後ろについてまわった。祭りが最も盛り上るのは二日目の神輿が神社に戻るときであるとう

かがっていたため楽しみにしていたが、天候に恵まれず雨に降られ、体調面も考慮して早めに撤退することにした。また調査をする機会があれば、その時には最後まで見届けられたらと思う。



【図7】

神輿に彫られた龍とナマズ

#### 4. GISによる分析の報告を通じて

2019年3月25日には、私が2018年8月の調査で得られた情報を元にGIS（地理情報システム）を用いて分析した「例祭のルートの変化」についての報告を、青苗言代主神社例祭において神輿と山車に関わっている方々に聞いていただき、さらに聞き取り調査を行った。

GISを用いてルートを地図の上に表現したことによって顕著に表われたのは、震災前後のルートの長さの変化であった。震災以前は字青苗の中を巡っていたが、震災後は隣接する字である字米岡や字富里の範囲まで拡大していたことが分析によって明らかになった。その理由については、元々字青苗に住んでいた人々の家が復興計画によって字青苗外に及んだのではないかと仮説を立てていたが、それについては仮説通りのようだった。さらに「青苗の人が住んでいるところに行かないという考えはなかった」<sup>(17)</sup>という話をうかがい、たとえ巡回のルートが長くなるとしても家を訪ねたいという強い意志が感じられた。一方で、私たちはルートの拡大に伴って隣接している字への影響や、祭りに参加する人の幅が広がるなどの変化が見られるのではないかと考えていたが、もともと人のいない他字の場所への移転のせいで、特にそのような状況は生じていないう�受けられた。

そして、祭りを行う時間について調べてみると、祭りのプログラムや聞き取りで得られた情報によれば、祭りは「大人数で短距離をゆっくり」というスタイルから「少人数で長距離をスピーディーに」というスタイルに変化していたことがわかった。なぜ祭りの担い手は減少しているにも関わらず、長い距離を素早く進めるのか理由をうかがってみると、神輿を乗せる台車の存在と、接待をする家が減ったことで飲む人も減り、行列が早く進むようになったと教えていただいた。さらに驚いたのは「もっと祭りの時間を短くしたい」<sup>(18)</sup>とおっしゃっていたことだった。祭りの

時間が短くなることで手伝う人が増えるそうで、祭りが行われる時間の長さを変更することは、祭りの担い手の確保にも関係するということを知ることができた。

これまでの青苗地区における調査から見えてくるのは、少子高齢化や人口減少などの避けては通れない問題と向き合い、どうすれば祭りを継続させていくのかを考えた上で祭りを変化させているということである。青苗地区は「北海道南西沖地震」によって祭りに用いるほとんどのものが失われたが、祭りをもう一度行おうと話し合いが行われる中で自分たちが暮らす地区と向き合い、将来について考えながら再興されたからこそ、現在も行列を継続できているのではないだろうか。

## 5. おわりに

私は「北海道南西沖地震」の発生時には生まれておらず、その震災についてあまり知らなかつた。青苗地区の復興を遂げた現在の町並みをただ歩いているだけでは、震災の被害を受けた場所であるということを忘れてしまう瞬間があるよう思える。しかし、調査を行う中で青苗地区の方々から震災に関するお話をうかがい、確かにこの場所で起こった出来事なのだということに改めて気付かされた。約半年前、「北海道胆振東部地震」が発生し、私は初めて自分自身が被災者と呼ばれる状況になった。「決して他人事ではない、明日は我が身なのだ」と強く感じた。またいつ来るのかわからない災害と、その地域で受け継がれている「祭り」のような文化の両方に目を向けることで、少子高齢化や人口減少に陥っている地域において、人々が持つ防災に関する知識や地域の文化をどのように伝えていくことができるのかを、これからも探求していきたい。

最後に、これらの調査を行うに当たって、奥尻町教育委員会事務局学芸員・稻垣森太氏、手塚薰先生、村中亮夫先生、学芸員課程の同期や後輩達、そして奥尻島で出会ったたくさんの方々にご協力をいただきました。この場をお借りして、深く感謝を申し上げます。

※注の凡例 仮名／性別／年齢／職業／祭りでの役割、もしくは祭の観覧者の順  
不明の場合は一で表示

### 注

- (1) A氏 男 40代 公務員 神輿
- (2) (1) の人物に同じ。
- (3) B氏 女 40代 公務員 観覧者
- (4) C氏 男 40代 無職 山車
- (5) D氏 男 60代 漁師 神輿
- (6) E氏 男 40代 公務員 先導役
- (7) F氏 男 60代 — 神輿
- (8) G氏 女 50代 — 観覧者
- (9) H氏 男 40代 サービス業 山車
- (10) I氏 女 40代 サービス業 観覧者

- (11) J氏 男 60代 一 観覧者
- (12) K氏 男 10代 学生 神輿
- (13) (3) の人物に同じ。
- (14) L氏 男 60代 自営業 一
- (15) (5) の人物に同じ。
- (16) (7) の人物に同じ。
- (17) M氏 男 50代 特別職公務員 山車
- (18) N氏 男 60代 小売業 神輿

#### 参考文献

- ・北海道奥尻郡奥尻町（2018）「行政区別集計表 平成30年10月31日作成」
- ・北海道奥尻町役場（1996）『北海道南西沖地震奥尻町記録書』

# 新ひだか町博物館での研修で何を学ぶことができたのか

人文学部日本文化学科2年 金野 詩流玖

## 1. 研修の概要

今回の研修は、2018年10月5日から10月6日の2日間の宿泊研修であった。新ひだか町での実習を午前10時ごろから始め、午後4時ごろに終了した。宿泊先となっていた日高判官館青年の家で1泊し、6日には午前10時ごろに新冠町レコード館での見学、その後移動して午前11時過ぎには新ひだか町博物館での実習を開始した。前日同様、午後4時ごろには研修を終え、午後18時ごろに札幌に到着し、新ひだか町博物館の研修は終了となった。

新ひだか町博物館での実習は、最初に常設展示を見学し、次に特別展示を見学した。そして今回の研修のメインである石臼を使用してコーヒー豆を挽くという体験をさせていただいた。そしてその体験を活かし、6日に開催された、来館者がコーヒー豆を挽くという体験を博物館のスタッフとしてお手伝いをさせていただいた。本稿では、常設展示や特別展示、石臼体験について書いていこうと思う。

## 2. 常設展示室

まず初めに、常設展示室の館内見学での発見点や感想、資料の取り扱いや建物構造について触れていくこうと思う。常設展示室での見学でまず感心したことは、空間づくりである。常設展示室は1つの部屋だけで構成されており、いくつかの部屋に分けることはしていない。展示室は天井が高めに作られており、展示物があまり無い印象になってしまふが、それを防ぐために天井にピンク色のメッシュを吊るしていた。メッシュを吊るすことで無駄に空間が広がることなく、1つの部屋として、展示物をうまく見せることができていたようだ。

今回は10月上旬に起こった胆振東部地震で、新ひだか町博物館も被害を受け、常設展示室に展示されていた兜が地震により前方に倒れ、兜の角がガラスケースに引っ掛かりガラスケースに傷がついたようであった。しかしガラスケース自体に保護フィルムが貼られており、保護フィルムに傷がついただけで兜やガラスケースは無傷であった。近年、いつ地震などの災害が生じるかわからない今、このような災害に対する展示の工夫は、全国でしていくべき対応なのだろうと勉強になった。

そして歴史年表は本来壁に展示するのがセオリーであるようだが、新ひだか町博物館は壁ではなく床に置いていた。そしてその机の引き出しにも工夫がなされており年表を見る以外にも引き出しの中に展示されている展示物を閲覧するということも来館者の楽しみの一つでもあり、1つしかない限られた空間の展示室での工夫が最大限になされていたと今回の見学で感じた。

### 3. 企画展示室

次に9月15日から11月4日にかけて行われている『キムンカムイとアイヌ～春夏秋冬』を見学した。この企画展示は名前の通り春夏秋冬に分かれており、館内の企画展示室を春夏、多目的室を秋冬として展示していた。1つの部屋にすべて（春夏秋冬）を展示することは広さ的に難しいとう話をうかがった。しかし通常行っている企画展示よりも予算が潤沢にいただけたため、有名な写真家に展示物である写真を提供してもらうことができたとうかがったときは、展示されている写真も最初見たときよりも違ったように見えた。企画展示は一律に黒いパネル、黒いカーペットで作られ、暖色のライトで展示物が照らされ展示物が映えるようなつくりになっていた。黒いカーペットを使用した理由は他にもあり、靴についていた汚れや泥などが目立ちにくくするため、暗めのカーペットを使用したとうかがった。展示室内の雰囲気と実用的な問題を両方解決していく、展示室内を暗く設定するのはとてもいい案だと思った。

また、冬のコーナーでは、東北のマタギとアイヌとの共通点が多くあり、それについての展示をもっと詳しくやりたかったが、予算と面積の関係で実現できなかつたという話をうかがって、機が熟し、アイヌとマタギの共通点を掘り下げた企画展を行うことが実現できれば、きっとよい展示になるのではないかと想像した。町内にある別の展示施設、新ひだか町アイヌ民族資料館との兼ね合いもあり、アイヌに興味がある人たちから集客が見込めるのではないかと個人的に思った。

### 4. 石臼を使用した教育普及

今回の研修のメインである石臼を使用してコーヒー豆を挽く体験では、1日目に実習生だけで体験できたことにより、どうやって石臼を押さえて豆を挽けばいいか、豆を追加するタイミング、粗挽きや細挽きなど、細かい情報を実際にインプットすることができた。そして次の日の来館者が石臼体験をする企画のサポートスタッフとしてうまく立ち回ることができたのではないかと思っている。

電化製品が普及した現代では、小中学生などは石臼の存在などを知る機会は少ないだろう。実際私は、石臼というものが何なのか、今回の実習で知った。他の実習生は小学校などで使う機会があったから知っているという人が何名かいたが、私のようにまったく知らなかったという来館者は多かったのではないかと思う。小中学生でなくとも、大人が知らないということ大多かった。私は来館者が実際に挽いた豆をドリップしてコーヒーを淹れる役割であったが、意外に小中学生などの子どもも参加しており、石臼の体験をしても

使用した石臼は計3個だが、博物館が石臼を引き取ったときはとても豆を挽ける状態ではなかったという。そして日高で墓石を作っているお店に修復を頼んだところ、まちの子どもの教育普及につながるのであればお代は必要ないと言わされたというエピソードをうかがい、博物館が単に実施している教育普及なのではなく、まちがそれを支えているからこそ成り立つ教育普及なのではないかと思った。



写真1 石臼でコーヒーを挽き体験中の地元の中学生



写真2 挽きたてのコーヒーを淹れて感想をうかがう

## 5. まとめ

1泊2日の新ひだか町博物館での実習を経験して、石臼という存在を知ることができ、それを伝えるための博物館の教育普及活動スタッフとして働けたことはとてもよかったです。石臼をもともと知らない状態で研修に参加できたのも自分にとってプラスに働いたのではないかと思う。来館者と同じような目線で体験行事を手伝えることができた。

そして常設展示室、企画展示室、またバックヤードなどの博物館の全施設を案内してくださった学芸員小野寺聰さんから直接うかがうことができたのはとても勉強になった。個人的にとても興味があったのは、常設展示室、企画展示室ともに空間の作り方である。床のフローリングやカーペットなどの細かい気の配り方は、展示物の汚れの付着などを気にすることももちろん当たり前であるが、それを踏まえたうえでどのような空間づくり（展示物の見せ方など）を行うか、さまざまな要素を考えているのだと実感できた。

今回の研修では、上記に述べたことが個人的にはとても新鮮でとても勉強になった。次に博物館に足を運ぶ機会があれば、実際の展示室の空間づくりやその他の小さな工夫などを見逃さないように目を配りながら閲覧しようと思う。

## 併設施設としての博物館の特徴について —新ひだか町博物館の事例から—

人文学部日本文化学科2年 夢田 あみ

2018年10月5日(金)から6日(土)の2日間にわたって、研修をさせてもらった新ひだか町博物館は、新ひだか町図書館との併設施設として、2015年に開館した。故に、幅広い年齢層の利用者を考慮した工夫が随所に見受けられた。

本稿では、新ひだか町博物館における研修を通して学んだ内容を、全年齢層を対象とした併設施設としての博物館という観点からまとめていく。

### 1. 実習内容

本節では、新ひだか町博物館にて、実習させてもらった内容を順に示していく。

まず、施設全体のレクチャーをしてもらった。両施設の共用部分から、各展示室、バッカヤードから図書館へと、各所における機能や工夫をご教示下さり、利用者の利便性と、資料の保存を考慮した造りが随所に見受けられた。続いて、企画展「キムンカムイとアイヌ」のギャラリーツアーをしてもらった。ここでは、展示物の解説の他、その構成や借用資料の取り扱いについてのご説明もあったため、特に学ばせてもらう事柄が多かった。特に、企画展ポスター作成過程のお話が非常に興味深かった。当企画展ポスターのメインイメージとして使用されている写真は、一頭の熊のシルエット風写真であるが、他にも候補として、正面からの写真や、親子熊の写真が候補に挙がっていたという。こうした候補の中から、シルエット風写真をメインイメージとして採用した経緯について、当企画展の趣旨「アイヌにとっての熊」は、人間に毛皮や肉をもたらす動物としてだけではなく、カムイ（神）としての側面も持ち合わせており、その神秘性を表現するためであると説明してもらった。このことから、展示広告ポスターは、やはり展示と密接に関係しているものであり、視覚的に展示内容や意図が伝わるような工夫を施すべきであるのだと思った。その後、控室の体験学習室へと戻り、収蔵資料「石臼」の観察及び資料情報カードの記入法を教わった。これを踏まえた上で、翌日には、石臼を使用した教育普及行事に携わらせてもらった。なお、当実習では、来館者との会話を通して、当博物館と来館者の関係性についても学ばせてもらった。

これらの実習から得た事柄について、以下の節でそれぞれ掘り下げていく。

### 2. 施設の特徴

本節では、新ひだか町博物館における特徴について、特に、図書館との併設施設である点や、来館者と学芸員への考慮がそれぞれ窺える点を、計3点挙げていく。

まず1点目に、博物館及び図書館の共用部分であるホールについてである。共用部分には、飲食コーナーも併設されていたが、一際目を引いたのは、企画展「キムンカムイとアイヌ」とタイアップした文献資料の設置である。この文献資料の設置は、企画展毎に入れ替えているらしく、図書館と併設していることによる、関連文献資料の充実を感じさせられた。また、一般解放はされていないが、津波発生時の一時避難場所として、高い壁が設けられた屋上も設けられていた。このことから、当博物館は、生涯学習施設としてだけではなく、災害時に市民の安全を確保するための避難施設としての機能も有していることが分かった。

続いて2点目に、各展示室についてである。ここでは、壁床による展示室の印象形成に

について取り上げる。当博物館における常設展示室の床はフローリング、企画展示室の床はカーペットであるのだが、これは、当博物館の前身である静内・三石両町の郷土館に起因するらしい。というのも、これらの郷土館は、薄暗さや微量の臭気により、利用者の訪問が間遠になっていたという。よって、常設展示室をフローリングにすることで、明るく、来館者が気軽に入室できるような雰囲気の形成を図ったらしい。一方、企画展示室は、意図的に暗色のカーペットを用いることで、照明による自在な雰囲気づくりを目指したという。このことから、利用者確保のためには、資料や関連事業の充実だけでなく、環境整備も大きく影響してくるのだと思った。

3点目に、バックヤードについてである。当博物館のバックヤードは、展示準備室や特別収蔵庫、整理準備室等で構成されている。こうしたバックヤードにおいて、最も印象に残ったのは、その部屋配置についてである。常設展示室から展示準備室へ、展示準備室からは企画展示室や各準備室・収蔵庫、さらには、事務室を兼ねた学芸員室への移動が可能であった。つまり、バックヤードだけで各展示室への移動が完了するような部屋配置がなされていたのである。このように、当博物館では、来館者の利便性だけでなく、学芸員の利便性も十分に考慮された施設設計になっていることが分かった。

以上の特徴から、新ひだか町博物館は、図書館併設である利点を生かし、来館者の快適な利用をサポートする工夫を随所に施した上、学芸員に対する高い利便性にも考慮した生涯学習施設であるといえるだろう。

### 3. 資料の取り扱いについて

前節では、新ひだか町博物館における特徴の1つとして、高い利便性のバックヤードについて取り上げた。本節では、それらを踏まえて、収蔵及び展示資料の取り扱いについて述べていく。

まず、収蔵資料の取り扱いについてである。ここでは、特に、特別収蔵庫における資料の取り扱いについて述べる。特別収蔵庫（写真1）は、唯一土足厳禁のエリアであり、壁には、ニオイや湿気を吸着する珪藻土タイルが用いられていた。さらに、温湿度管理については、他部屋よりも、より徹底した管理がなされていた。また、当収蔵庫では、紙・鉄資料の他、特に貴重な資料を管理しているらしい。このように、資料に応じて複数の収蔵庫を使い分けていることから、資料管理のための環境整備には一層の注意が払われていることが分かった。

次に、展示資料の取り扱いについてである。ここでは、企画展示における一例を取り上げる。今回の企画展示では、様々な狩猟具が資料として展示されており、中でも仕掛け弓は、ガラスケース内に入れず、ベルトパーテーションで周囲を囲んで展示されていた。その理由については、資料の突起部による来館者の怪我や、資料の破損を未然に防ぐためであると説明してもらった。このように、展示資料の取り扱いは、資料の破損だけでなく、資料による来館者の怪我を未然に防ぐような配慮が必要であるのだと思った。

以上の点から、博物館における資料の取り扱いについて、収蔵時には、その保存環境を十分に注意する必要があり、展示時には、資料と来館者の被害の両方を防ぐような配慮が求められると考えられる。



(写真 1) 特別収蔵庫内部の様子

#### 4. 展示について

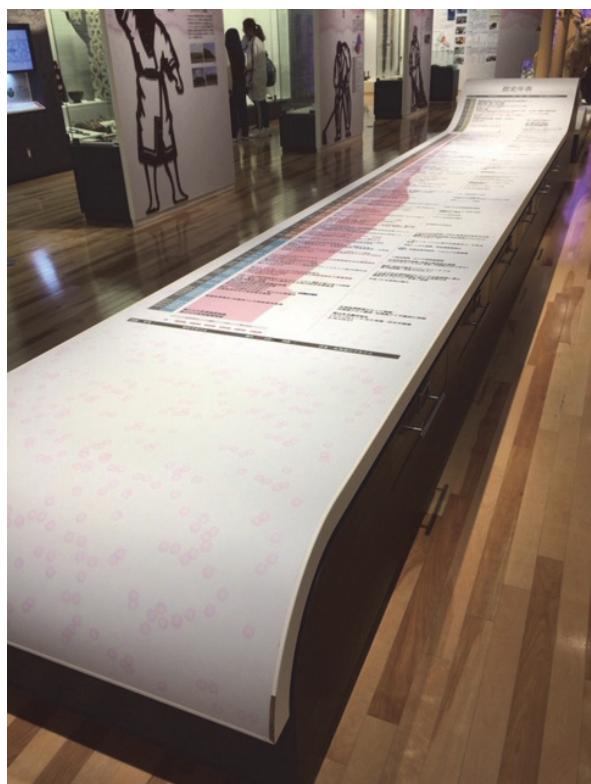
本節では、新ひだか町博物館常設展示に焦点を当て、その概要をまとめた上で、特に印象深かった 2 つの展示について述べていく。

当博物館館の常設展示では、新ひだか町の歴史や文化、自然を、音声・映像資料を駆使したおよそ 10 のブロックで展示・解説していた。例えば、歴史分野については、地域住民の暮らしに焦点を当てた市街地の歴史展示や、町の産業・戦争・災害の歴史展示があった。また、文化分野については、昭和 50 年代の居間再現や、農機具の展示、自然分野については、大型スクリーンによる新ひだか町の四季展示や、動物・樹木の剥製展示がなされていた。

これらの展示の中で、特に印象深かった展示の 1 つ目は、歴史分野の床に設置された歴史年表（写真 2）である。なお、この歴史年表の下は、棚が設置されており（写真 3）、引き出しを引くと、各時代に関する紙資料等が見られるという仕組みになっている（写真 4）。私は、年表はパネルであり、壁に掛けて展示するモノという先入観があつたため、当博物館の展示方法は、非常に衝撃的であり、戸惑いすら覚えた。なお、このように、歴史年表を床に設置した経緯については、以下のように説明してもらった。当博物館における常設展示室の壁面は、非常に限られており、それを有効的に活用するためにも、より優先度の高い資料をガラスケースに入れ、展示すべきと考えた。その最中で、歴史年表を床に設置する展示方法に可能性を見出し、さらに、空間利用の発想から、歴史年表の下に棚を設け、引き出し内にもう一つの展示資料を設置するに至ったという。このお話を、歴史年表のような文字資料を、必ずしも壁面に展示する必要はなく、来館者に伝えたい資料を優先的に壁面に展示し、有効的に壁面を利用することが重要であることを学んだ。

続いて、印象深かった 2 つ目の展示は、小学校教室の再現展示である。本展示においては、町内各小学校における校歌の音声や、廃校後的小学校から譲り受けたアルバム等を資料として扱っていた。なお、アルバム等の資料については、プライバシー保護の観点から、ガラスケース内で展示されていたが（写真 5）、申請を出すと、事務所内での閲覧が可能になるという。このことから、当館が地域に密着した博物館であり、博物館が取り扱う資料も多様になってきているのだと思った。

以上のことから、新ひだか町博物館における常設展示は、来館者に伝えたい資料を優先的に展示する工夫がなされ、取り扱われる資料についても、地域に密着した資料によって、展示が構成されているといえるだろう。



(写真 2) 歴史年表全体図



(写真 3) 歴史年表下棚



(写真 4) 歴史年表下棚の引き出し



(写真 5) 小学校教室再現展示の様子

## 5. 教育普及について

先の第1節において、本研修で携わらせてもらった石臼を使用した教育普及行事について触れたが、本節では、その概要を示した後に、学んだことを述べていく。

今回、携わらせてもらった教育普及行事は、石臼を使用し、コーヒー豆を挽く過程で、その仕組みの理解を促すというものであった。このように、現在では珍しいモノとなった道具を実際に動かし、さらに、それによって出来たものを加工・消費するという教育普及行事は、体験者にその道具を身近に感じてもらい、理解を深める手掛かりとなることを目的に実施されているのではないかと考えさせられた。

また、この実習を通して、様々な来館者と交流させてもらったが、特に、女子中学生2名が語ってくれた当行事への参加経緯が印象に残った。彼女らは、部活動帰りに何か無しに博物館に立ち寄ると、石臼体験が実施されており、興味を持ったために参加したのだという。このことから、この新ひだか町博物館が地元の学生にとって、比較的、身近な存在であるということが感じられた。こうした、利用者に寄り添うような博物館作りは、今後各博物館で意識されるべきであると思った。

以上、新ひだか町博物館における教育普及は、博物館が町民にとって身近な存在であることを強みとして、体験型事業を主に、教育普及に取り組んでいるということができるだろう。

## 6. 全体的な感想

以上、2日間にわたる新ひだか町博物館での実習を通して、図書館と併設した博物館の特徴について学ばせてもらった。特に、展示においては、全年齢層の来館者に考慮し、気軽に利用出来るような環境整備と、伝えたいメッセージを踏まえた見せ方の工夫が、非常に印象的であった。こうした工夫も、地元の学生と博物館との距離を縮める要因になっているのだと思う。また、来館者だけでなく、学芸員にとっての利便性にも考慮し、バックヤードを介して全展示室及び事務室を繋げるという工夫も印象的であった。これらの特徴から、図書館併設の博物館は、それぞれの利点・強みを生かし、全年齢層の来館者を考慮した施設造りが求められるのだと思った。

最後に、この度の研修でお世話になった方々に、深く感謝申し上げます。

# 小平・遠別地域の化石発掘調査を終えて

法学部法律学科3年 佐々木理子

## 1. はじめに

2018年10月22日から24日に北海道小平地域にて、北海道博物館と三笠市立博物館の学芸員の方々が行う、化石の発掘調査に同行した。学芸員課程の非常勤講師として講義をして下さっている、北海道博物館の学芸員の栗原憲一氏からお誘いをいただき、調査に参加することができた。個人的に古生物に興味があり、軟体動物化石がご専門の栗原先生に相談したことがきっかけで、調査に同行することになり、地質調査の方法を学ぶ機会が得られた。小学生の頃に定山渓や沼田町で化石発掘を行ったことがあるが、かなり時間が経っている上、今回のように本格的に地質調査を行うのは初めてだったため、新鮮で非常に面白かった。

発掘調査に関して、当初は横浜国立大学の学生の方々と行う予定であったが、2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震により、学生の皆様が北海道を訪れることが出来なくなつたため、予定を変更し、余震が落ち着いた頃に博物館の学芸員の方々と調査を行った。横浜国立大学の皆様とお会いすることが叶わず残念だったが、栗原先生をはじめ、皆様から地質調査の基本をご指導頂くことができ、大変貴重な時間であった。本文では、3日間の調査で経験したこと、学んだことについて述べる。

## 2. ルートマップの作成

1日目と2日目は天候に恵まれ、秋頃だったため強い日差しもなく、心地よく調査が出来た。初日は10時頃に新札幌を出発し、道中の沼田町で昼食をとった後、13時頃に小平へ到着し、調査を行う川のそばに車を止め、ウェーダーや道具を準備して川岸へと下った。最初に、ルートマップの書き方を教わった。ルートマップというのは川の流れに沿って地質調査のルートとその場所の地質や露頭の情報を書き加えた地図である。方眼紙の端に出発地点を記し、コンパスで進む方角を、歩幅で進んだ距離を測る。2復歩を1mmとして数えてルートを取ってみると、私の歩幅が短かったため、ルートが紙上に大きく記録されてしまった。4復歩で1mmとして換算し直し、もう一度スタート地点から計り直したが、2回目はコンパスの使い方にも慣れたのか、あまり時間を掛けずにルートを取ることが出来た。

このようにしてルートを取りつつ、途中に露頭があればその情報もルートマップに記録した。まず、離れたところから露頭全体を観察し、大体のかたちをルートマップに書き加えた後、露頭の近くまで行き、岩相を調べる。私は岩石の種類を見分けることに慣れていないため、実際に手で触れて粒子の大きさをサンプルと見比べ、堆積岩を判別していた。露頭のどの部分がどのような岩相なのかについても、ルートマップにメモをする。調査をした場所では、泥岩が主体で上部に砂岩の層がある露頭が多かった。

また、ルートマップの製作の中で難しいと感じたのが、クリノメーターの使い方である。これ

は地層の傾き方を調べる道具で、どの方角にどの程度傾いているかを計測することが出来る。計測データを集めてゆくと、その地域全体の地層の重なり方や褶曲を明らかにすることが出来る。使い方については、クリノメーターと一緒に事前に栗原先生からお借りした、坂幸恭の著書『地質調査と地質図』という本で学んでいたのだが、実際に現地で使ってみると、メモリの読み取りに時間がかかるてしまい、慣れが必要だと感じた。

### 3. 化石採集

初日の調査ではルートマップの書き方を教わると同時に化石の採集も行い、2日目は採集を中心に行った。アンモナイトなどの化石はノジュールと呼ばれる岩石の中に含まれていることが多いため、まずはノジュールを見つけられるようにならなければいけない。石灰質で白っぽく、滑らかな手触りなので意外とノジュールは見つかるのだが、すでにハンマーで割られている破片がよくあり、他にも採集に来る人達がいることが窺えた。また、見つけたノジュールをハンマーで割ることも、初心者である私は大変だった。ノジュールを片足で押さえつけ、岩石用ハンマーを振り子の要領で打ち下ろすのがコツである。初めは感覚を掴めず、上手くノジュールに衝撃が伝わらないので、ハンマーの金属音ばかり鳴らしていた。しかし、ノジュールが割れたときは達成感があり、断面から化石が覗いているかどうか確認する作業が非常に楽しかった。採集した化石は欠けたものがほとんどだったが、ポリプチコセラスとアンモナイト数種類の他に、二枚貝を採集することが出来た。自分で採った化石は自宅に持ち帰り、後日クリーニングを行った。2~2.5cmのハイポフィロセラスを偶然岩石から取り出すことが出来た。しかし、その他の化石については余分な岩石はハンマーで取り除いたが、細かい部分はたがねを使う必要があったため完全に化石を取り出すことは出来なかった。



採集したポリプチコセラス

#### 4. 遠別町での調査

3日目は天気が崩れ始めていたので、小平町ではなく遠別町へ向かった。この日はメタプラセンチセラスを目当てに発掘を行った。メタプラセンチセラスは個人的に気に入っている種類のアンモナイトで、コインのように薄く平たい形をしており、殻は真珠光沢を帶びている。崖を登つて探したが、破片ばかりで良い状態のものは見つけられなかった。化石の一部分が見えているノジユールを一つだけ見つけることができ、ハンマーでたたいてみたがアンモナイト自体も割れてしまい、割れた破片ごと持ち帰った。発掘の最中に雨が降り始め、早めに切り上げたため、じっくり探すことができず残念に思う。



調査を行った小平地域

#### 5. まとめ

何回か発掘を行ううちに、必要な装備がわかつてくるとのことで、今回はウェーダーやハンマーなど最低限の装備だけ揃えて、クリノメーターなど特殊な物はお借りした。実際に1日目に沢を登っている途中でハンマーを落としてしまい、藪の中を探すことになってしまったので、急遽現地でハンマーホルダーを購入した。こうした必要な物については、実際に調査を行う中で知ることが出来た。

慣れないフィールドだったため、体力が足りていないと感じる場面もあった。2日目は朝から夕方まで川を2kmほど歩いて化石を探していたので、全身が筋肉痛になってしまっていた。ウェーダーをはくことは滅多にないので、歩くだけでかなり体力を使っていたのだと思う。川底の石

は滑りやすい上に、もし転んでしまうとウェーダーの中に水が入り込み、重みで立ち上がりがれなくなるので、溺れる原因になる。ノジュールを探しながらゆっくり歩いていたので、私がいつも後ろを歩いていたのではないかと思う。日が沈む前に引き上げなくてはならないので、時間が限られた中で安全に配慮しつつルートマップの作成と化石採集を行う必要があり、やるべきことが多いことを実感した。

調査全体を通し、フィールドでは化石を詳細に見る観察眼や、露頭全体を見渡して岩相の傾向を考える力などが必要であるとわかり、冷静に周囲や対象物を観察できるようになりたいと強く思った。古生物学に限らず資料を細かく観察し、調べることは学芸員に必要な能力なので、今回のフィールドで古生物の専門の学芸員として博物館に勤めている方々から、直に一次資料の読み取り方と記録の付け方を教わることができ、とても良い経験となった。また、学芸員の仕事についてお話を聞く機会も得られた。普段は様々な業務をこなしており、意外にも学芸員は出張が多い職業であることが窺えた。多忙な中でも、フィールドに出て研究活動を行うことは学芸員の重要な仕事の一つであるということを知った。

フィールドでの活動は非常に興味深く、調査に参加できたことを大変有り難く思います。お忙しい中、調査の機会を作ってくださった学芸員の皆様に感謝を申し上げます。

## ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

ミニミュージアムは、博物館経営論の一部の時間を使い、展示会を企画し、実際にミニチュア模型、図録、ポスターを制作し、友人たちの前でプレゼンテーションを行う試みである。制作は講義時間以外にも、スケジュールをやりくりして自宅や学芸員課程実習室で継続される。現実と遊離したテーマパークやドリームランドを出現させておしまいという簡単な課題ではない。現実のミュージアムは公益性を有し、活動の成果を入場者数や収益のみで判断してはならない一方、その経営を担うには経営資源を最大限に活かし、透明性を保つことも求められる。毎度のことであるが、制作にあたり、実際のミュージアムでも現実に存在する葛藤をも十分視野に入れてもらうことについている。

博物館に携わる者は、教育・研修等を通じて、専門的な知識や能力、技術の向上に努め、業務の遂行において最善を尽くす。また、自らの知識や経験、培った技能を関係者と共有し、相互に評価して博物館活動を高めて行く。

これは平成 22 年度の文部科学省の委託を受けて、財団法人日本博物館協会がまとめた『博物館倫理規定に関する調査研究報告書』の行動規範 8.「研鑽」にある一項である。ミュージアムは、学芸員をはじめ各部門に専門的な知識やスキルを有するプロフェッショナルが業務の遂行に最善を尽くすことによってこそ、その真価を発揮することができる。専門分野に関する知識はもちろんのこと、専門性からはずれた知識をも、ミュージアムが置かれている現在の社会・自然環境という広い文脈から、体系的に継続的に更新する不断の努力が求められる。また、自らの研鑽の結果を、利害関係者（ステークホルダー）と共有して、相互に成長しようとする姿勢も、ミュージアムのような多様な人々が参画する場には欠かせない。

さて、経営資源の 5 大要素は、ヒト、モノ、カネ、情報、時間とされる。優れた企業ではさらに、数値化できない価値観のような要素をも重視する。マッキンゼー＆カンパニー社が提唱するソフトの 4S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの 3S（戦略、組織、システム）は相互に補い合って組織の価値を高める。ソフト要素は人の価値観や感情がかかわり、変更が容易ではなく、一方のハード要素は経営者の意思や企業努力で再構築がしやすい。マ社では「共有された価値観」を、重要な「S」に据えている。「共有された価値観」は、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考え方であり、「ビジョン」と「基本理念」から構成される。

ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を重視している。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望とした。この 2 つが複合・融合して「展示趣旨」（共有された価値観）になるというフローを認識して

もらうように心がけた。さらに「現状分析」することで、出発点と立ち位置の明確化を促し、現時点での課題とその解決を意識させた。国内外の SDGs（持続可能な開発目標）の 17 目標と 169 ターゲットにかかわるような喫緊の社会問題（例えば環境問題）にとらわれ過ぎることを覚悟したが、自由に夢を膨らませ、楽しみながら展示制作物（ミニチュア模型、ポスター、図録）の完成に到達した学生が少なくなかったを感じている。

ここでは、紙数の関係から、佳作 1 点の紹介にとどめたい。資料そのものへの愛情とヨーロピアンティストが溢れる蟬塚咲衣さんの作品「バレエの歴史展—日本のバレエを見つめて—」である。ポスターに記された「きっと、バレエが観たくなる」はキャッチコピーとしても秀逸である。ミュージアムでは、自らの知識や経験、培った技能をベースに展示を組み立てることも重要である。一方で、来館者を知り、展示資料を理解し、来館者と資料を適切に結びつける仲介者としての役割を忘ることはできない。デザイン性や図録も展示の世界観と密接に結びつくためにおろそかにはできない。また、忘れられがちだが、ポスターは展示室の雰囲気ともマッチするものでなければならない。

蟬塚さんは、学事報告書 29 号の博物館資料ドキュメントでも自らがバレエ教室で愛用していた「トウシューズ」を扱っており、バレエ経験者であるとともに愛好者でもある。この作品はそうした物づくりの基本と楽しさを思い起こさせてくれる。まさしく「好きこそものの上手なれ」の典型的見本である。後輩のために制作時の苦労も記述してもらったので、これからミニミュージアムを手がけることになる人はぜひ制作時の参考にしてもらいたい。

## 博物館経営論「ミニミュージアム制作」を終えて

人文学部日本文化学科3年 蟬塚 咲衣

### はじめに

学芸員課程の「最後の砦」と密かに囁かれている博物館経営論の最終課題は、自分一人で構想した展示を発泡スチロールの箱の中に立体的に表現し、さらに図録とポスターを制作するというものだった。博物館実習Ⅲの授業のように数人のグループで一つの展示を作り上げるのではなく、一人で全てを作り上げるため、まさに学芸員課程の集大成と言えるような課題であった。

制作期間を思い返すと、非常に慌ただしかったと記憶している。私がこの授業を受講する一年前に、前年度にこの授業を受講していた先輩方から「実際に作るのは一年後でも、テーマと展示資料なら今からでも決められるから考えておいた方が良いよ！」とアドバイスをいただいたことが、今でも忘れられない。私はそれらのアドバイスを活かしきれず、締め切り直前に苦しむ結果になってしまった。そのため、展示自体を考える力に加えて、他の授業のテストやレポートと平行させながら、いかに計画性を持って取り組むことができるかを試された課題でもあったように思える。

今回のレポートでは、ミニミュージアムの制作を振り返って意識した点や工夫した点を述べると共に、この課題を通じて学んだことについて記していきたい。

### 1. ミニミュージアムの構想

博物館経営論の授業が始まって間もなく、計画書の提出が求められた。扱うテーマや大まかな構想を決め、5月にはその時点でのミニミュージアムの構想について、授業を担当されている手塚薰先生と一人ずつ面談が行われた。

私はクラシックバレエの経験者であり、舞台が好きなため、このミニミュージアムという課題の存在を知った時からずっとバレエをテーマにしたいと思っていた。テーマを設定する際に、授業の中で例として挙げられていたのは自然環境の問題と食生活の問題であった。その時には、命に関わるような社会問題を取り上げなくてはならないのかと思ったが、私はどうしてもバレエをテーマにしたかったため、自分が好きなテーマを貫くことにした。そうすることで自分自身の制作に対するモチベーションを高めることができ、さらにバレエのような全ての人が日常的に接するものではないテーマだからこそ、展示として取り上げることで、現状やメッセージを伝える意義があるのでないかと考えた。その結果、締め切りに追われながらも、資料を調べたり展示パネルの文章を考えたりする作業の中に楽しさを見出すことができたため、このテーマを選択して良かったと思っている。

テーマが決まり、いざ展示の中身に取りかかろうと思っても、どのような資料を展示するべきかなかなかイメージが湧かなかった。したがって、展示の目的や理念をしっかりと固めるために最初は図録作りに専念した。展示の意義を明確にすることで、必要な展示資料やデータなどについて見通しを立てることができた。

## 2. 現状分析、ビジョン、コンセプトの設定

それでは、私が実際に設定した現状分析、ビジョン、コンセプトについて述べていきたい。

### 現状分析

あなたは、バレエダンサーという職業にどのような印象を持っているだろうか。お金持ちがしていそう、格式が高そう、などの様々な印象があるように思われる。しかし、そのような印象がなぜ持たれているのか、バレエの歴史に目を向ける機会はなかなか無いのではないだろうかと考えた。

現在、日本でバレエは「習い事」の一つとして定着している。バレエを習ったことがあるという方や、そういえば学校の同級生で習っている子がいたなと思う方もいるのではないだろうか。日本では、バレエが老若男女幅広く親しまれている。

そんな中、近年で日本のバレエのレベルは着実に上がっており、国際的なコンクールにおける受賞のニュースを耳にすることがある。しかし、世界に羽ばたくダンサーが増えてきた一方で、日本ではバレエダンサーが職業として確立されていないという問題がある。日本でバレエダンサーとして食べていくことが難しいという現状は、プロを志すバレエダンサーは必ず直面する課題だろう。さらに、外国で活動をした方が職業としてやっていけるという理由から、外国への人材流出も問題となっている。日本で育ったバレエダンサーを日本人が日本で観ることができないというもどかしさがあるが、それには観劇という文化が根付いていないという現状がある。それに加えて、劇場では集客が課題となっている。バレエ経験者や既にファンの方だけでなく、新たな層を取り込む必要がある。

バレエがどのように生まれ、日本に伝わり今に至るのかを見つめ直すことで、このような日本のバレエの現状をより深く知ることが出来るのではないだろうか。

現状分析では、バレエが習い事として親しまれていること、そしてニュースや新聞などでも取り上げられるコンクールについて述べ、バレエ経験者ではない方でも身近に感じられるような話題を挙げた。そして、このような華やかな話題の影には、職業としてのバレエや観劇という文化に関する課題が隠れているということを、展示を通して知って欲しいという思いを込めた。

### ビジョン（短期目標）

- ・バレエがどのように生まれたのかを知る。
- ・日本のバレエが直面している問題を知る。
- ・現在の日本のバレエ団の取り組みを知る。
- ・バレエ作品を見比べる楽しさに気付く。

短期目標であるビジョンは、展示から来館者の方々に伝えたいことを四点にまとめ、これらの点を意識して、展示における各章のタイトルや全体の構成を考えた。

日本のバレエの現状を知って欲しいことが第一目的であるが、そもそもバレエとは何なのかを明らかにすることで理解が深まるのではないかと思い、バレエの発祥から歴史を追っていくことにした。そして日本のバレエ団の取り組みに関しては、三つのバレエ団に協力していただく形で展示を実現させることにした。当初は、同じ作品でもバレエ団によって演出や衣装が異なるため、それを見比べる楽しさを伝えるための「シアタールーム」（画像資料1）を予定していたが、「シアタールーム」で上映する作品は、年齢層が幅広くなることが予想される来館者の関心に対応できるようにレパートリーの多様性を重視するべきなのではないかと考え、見比べる役割は「パンフレットコーナー」が果たすように変更した。



【画像資料1】

#### コンセプト（長期目標）

- ・バレエに親しみを持ってもらえるようにする。
- ・新たな層を獲得する。
- ・地域に劇場文化を根付かせる。

長期目標であるコンセプトは、現状分析で述べた課題と関連させ、それを解消に導くためにはどうするべきなのかを考え、このような三点にまとめた。ビジョンは展示の中で章のタイトルとして取り扱えるような具体的なものにしたが、コンセプトに関しては展示の中で明確に主張させるのではなく、来館者の方々が自然にそう感じていただけたらと思ったことを設定した。

これらを設定することで「展示で何を伝えたいのか」という理念を明確化させることができ、目標を達成するために展示の順番をどうすればいいのか、どのような資料が望ましいのかという具体的なイメージに繋がるため、なるべく早い段階でぶれない目標をしっかりと立てることが重要だと思う。

### 3. 図録とポスター

展示の理念がおおよそ固まったところで、図録の作成に取りかかった。本に書かれたバレエの歴史を展示パネル用に短く要約し（画像資料2）、展示したい資料が外国にある場合は英語やフランス語で書かれたホームページと格闘するなどしていると、模型本体の制作時間と比べて何倍もの時間がかかった。図録は7月に入ってから作り始め、ミニミュージアムの提出日まで訂正を重ねながらコツコツと作り上げていった。図録の見出しなどの色は全体で統一させ、バレエの衣装についている飾りをイメージして飾り枠を付けることで、図録においても展示の世界観を表現で

きるよう心がけた。

図録には展示室の図面を掲載したが（画像資料3）、資料や展示パネルの位置を章ごとに色分けして示したこと、どの章の資料やパネルがどこに配置されているのかをわかりやすくした。それによって、展示の流れを視覚化することができたのではないかと思う。「第2章」と「第3章」の配置については、順番に鑑賞しようとすると「第2章」を観た後に少し戻らなくてはならなくなってしまったところが、図面に関して心残りな点である。

図録には、「バレエ作品上演年表」を掲載した（画像資料4）。これは展示室内にパネルとしても展示しているが、この展示はバレエ経験者やファンの視点に立って考えたもので、その方々が知っているであろうと思われる作品を取り上げることで、「踊ったことがある」「聞いたことがある」など展示に親しみやすさを感じてもらうという狙いがある。今振り返ってみると、バレエ作品だけでなく世界史や日本史の出来事も並列させて掲載した方が、時代の流れをより掴みやすくなつたのではないかと思う。

ポスターは、図録の制作中に頭の中で大まかにイメージしていたものを、ワードを用いて短時間で作り上げた（画像資料5）。今回の展示は幅広い世代がターゲットであるため、子どもには文字を読まなくても興味を持ってもらえるように目を引く衣装の写真を用い、なおかつ子どもっぽくなりすぎないことを意識した。展示資料を全てポスターで見せてしまうのではなく、ミステリアスな雰囲気に仕上げたところがこだわりである。ポスターの色は劇場をイメージさせる渋めの赤に金色の飾り枠を用いることで、落ち着いた中にも気品のある印象を与えることを目的とした。この配色には、展示室内の床の色である渋めの赤や天井付近の金色の飾りと、ポスターの色を統一させることで、ポスターと展示室内の印象に繋がりを持たせる狙いもある。

### 1-3 ロマンティックバレエ

ロマンティックバレエは、“ロマン主義的な”バレエであり、未知と変化への憧れがありました。

18世紀末にワイヤーを使った宙乗りが導入され、宙吊りからの着地や回転する際のつま先立ちが進化し、ポイント技法に繋がりました。かかとの高い靴からサンダルに、そしてトウシューズへと変化しましたが、当時のトウシューズは綿のシューズを詰め物と刺し子で補強ただけの、普通のサテンのバレエシューズとほとんど変わらない薄さだったそうです。

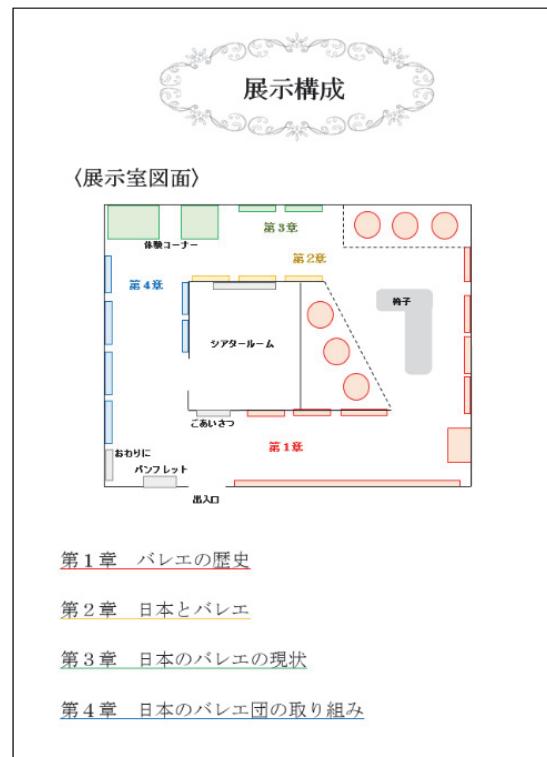
くるぶし丈のチュチュが印象的な『ラ・シルフィード』や『ジゼル』など、妖精や幽霊が登場する幻想的な作品が上演され、かつてバレエの中心だった男性舞踊家に代わって女性舞踊家に注目が集まりました。



エドガー・ドガ 『ダンス教室』(左)  
『踊りの稽古場にて』(右)

18

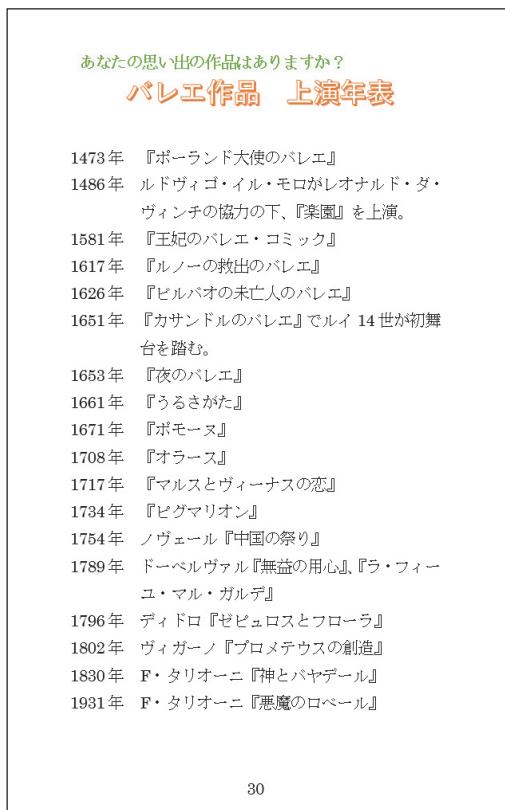
### 【画像資料2】



### 【画像資料3】

ポスターの中で一番悩んだのはキャッチフレーズだった。展示タイトルは「バレエの歴史展 ー日本のバレエを見つめてー」であるが、それよりもインパクトがある目に止まるものが欲しいと思い、「きっと、バレエが観たくなる」というキャッチフレーズを考え、際立つように白色で配置した。

博物館の名前に関しては、私自身がこんな博物館があれば勤めたいという理想から生まれた、完全に架空のものにした。展示期間を2018年9月1日から11月30日にしたのは、「札幌文化芸術劇場 hitaru」において、新国立劇場バレエ団の「白鳥の湖」の公演が行われるタイミングで展示ができるようにしたためである。



30

【画像資料4】



【画像資料5】

#### 4. 制作

図録がほぼ完成したところで、模型の制作に取りかかった。私は締め切りの二日前まで箱が真っ白な状態だったため、スケジュールの計画性に関しては決して参考にしないでほしい。

私は心配性なため、ミリ単位まで計算した設計図を書いてから作り始めたが、展示パネルはどれだけ配置できそうか、3Dの資料と2Dの資料を置くスペースや壁の面積は確保できるか、壁を設置すると通路は狭すぎないかなど、想定しなくてはならないポイントは数多く存在する。設計図を書いたことでそれらの問題が明らかになることも多かったため、事前に計算したことで作り始めてからのミスを予防しつつ、無事に完成させることができた（画像資料6、7）。



【画像資料6】



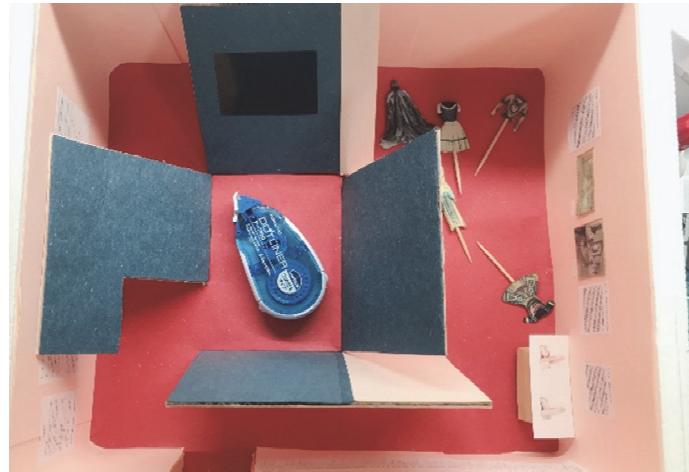
【画像資料7】

展示室の内装は、劇場内をイメージした赤色の床、そして冷たく堅い印象にならないように暖かみのある壁の色を選択したが、壁紙の影響か想像していた以上に可愛らしくなってしまった。

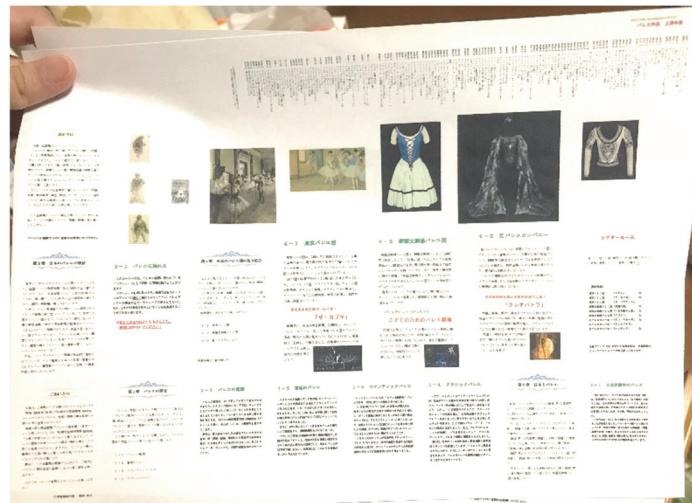
しかし、ポスターの印象を損なわないような華やかな展示室になったのではないかと思う。室内の壁は、床に切り込みを入れて薄い段ボールを差し込むことで作成し（画像資料8）、壁の内部は「シアタールーム」にするため、映画館のような暗い色の壁で映像が映える空間にすることを意識した。

全部で十八枚ある展示パネルや資料は、図録の内容をワードに貼り付けて印刷した（画像資料9）。

展示の構成は、「第1章 バレエの歴史」「第2章 日本とバレエ」「第3章 日本のバレエの現状」「第4章 日本のバレエ団の取り組み」という大きな四つの章に区分し、さらに「第1章」は四つ、「第4章」は三つに細分化した。ポスターに掲載した資料が展示されている「第2章」には絵画を展示するためゆっくりと鑑賞していただけたらと、三方向の資料に対応できる位置に椅子を設置した（画像資料10）。



【画像資料8】



【画像資料9】



【画像資料10】

また、出口付近にある各バレエ団の公演情報やバレエ教室情報などを扱っているパンフレットコーナーは、バレエに関心を持ってくださった来館者の方々に、展示室を出た後にもバレエに触れられる機会があることを知っていただきたいという思いを込めて設置した。私が設定したコンセプトを達成するためには、展示室内だけで完結させるのではなく、展示室を出た後に来館者がバレエや舞台とどのように関わるかに委ねられるため、バレエや劇場に関する情報を提供できる場を設けたいと考えた。

そして、資料に触れることができるハンズ・オン展示のコーナーも設けた（画像資料1-1）。クラシックバレエ経験者の目線で考えてしまうと衣装やトウシューズはそれほど珍しいものではないが、バレエについてあまり知らない方々も訪れる博物館だからこそ、このような展示があることでバレエに対して新たな気付きを得るきっかけになるのではないかと考えた。私自身が幼かった頃の衣装への憧れや、初めてトウシューズに触れたときの衝撃など、過去の実体験が発想の元になった。この展示を行うに当たり特に注意したのは、展示室内の「触れてよい資料」と「触れてはいけない資料」の区別をはっきりさせることである。「触れてはいけない資料」の前には爪楊枝と刺繡糸で作ったロープを張り、ポスターや絵画にはレース状のテープを貼り合わせることで額縁を表現し、プラ板を用いて展示ケースを作った（画像資料1-2）。このような一手間を加えるだけでも、模型を見たときの展示室らしさがより高まったように感じられた。この展示について振り返ってみると、トウシューズの方は履くと怪我をする恐れがあることから展示パネルで注意喚起を行い、展示台と鎖で繋げて履けないようにすることまで考えたが、衣装に関しても子どもの目に刺さると危ないため、もう少し安全面を工夫できればよかったと感じた。そして、スペースの問題もあったが、女性が使用するアイテムに偏ってしまったところにも改善の余地があると思われる。



【画像資料1-1】



【画像資料1-2】

## おわりに

今回、ミニミュージアムの制作を終えて痛感したのは、展示の理念や目的の重要性であった。現状分析、ビジョン、コンセプトがはっきりと設定されていなければ、ただただ資料を並べているだけになってしまふ。理念や目的が根底にあるからこそ、博物館で行われる展示が意義のあるものになるのだと感じた。作業中は、制作者側が伝えたいことをどのように展示すれば来館者に感じていただけるのか、自問自答の繰り返しであった。そして、制作をしていると制作者側の伝えたいことは展示パネルに書いておけば伝わるだろうとつい考えてしまいがちだった。実際は、来館者は必ずしも制作者側が意図した順番で展示室を巡るとは限らず、展示パネルの内容も全て読むとは限らない。それらを考慮しながら、たとえ資料を少し眺めるだけであっても、来館者にとって展示テーマと接する一つのきっかけとなり、記憶に残ってくれたらという願いを込めて資料の選択を行った。展示の構想を練るに当たり、博物館に来館される方々には十人いれば十通りの鑑賞の仕方があることを念頭に置いたことで、自分の中で資料や展示方法に関する考え方方が変化したように感じられた。

他の授業のレポートやテストに追われながらの制作は、想像以上に苦しいものであった。しかし、自分の好きなテーマで展示を構想できたことはとても楽しく、さらに模型として立体で表現することで、紙の上で計画するだけでは得ることができないような達成感を得ることができた。もし、これからミニミュージアムを制作する方へアドバイスをするならば、是非自分が好きなテーマで制作することをお勧めしたい。制作意欲が向上するだけでなく、既にある程度の知識を持っていることによって、理念の設定や展示構成を考える際に有利に働くと感じたからである。そして、これまで先輩方が訴え続けているように、時間がないことは残念ながら事実なので、提出日から逆算してゆとりを持った計画を立てることが肝心である。

ミニミュージアムを完成させてから半年以上が経過したが、改めて振り返ってみると今だからこそ気付く改善点を発見することができた。制作時は完成させることに必死で振り返る余裕がほとんどなかったため、レポートの執筆のために再度この展示と向き合えたことは非常に良い機会となった。ミニミュージアムの制作を通して学んだ「理念や目的に基づいてストーリーを組み立てていくこと」は、論文を執筆する際に初めに筋道を立てることで考察の軸をぶれないようにすることにも繋がるのではないだろうか。このように、この課題に取り組んだことで得た経験を博物館の展示のみに限定せず、様々な場面で活かしていくと考えている。

## 2018年度 博物館資料論 学生レポートの目的と講評 ～オブジェクト・ディスクリプション・レポートについて～

北海学園大学講師 水崎 穎

博物館資料論の最後は学期末レポートの提出で締めくくっている。これには博物館資料論の講義を通じて学んだことを応用して各学生のレポートへ反映してもらう狙いがある。この博物館資料論の講義を通じて学んでもらいことについては、『博物館資料論シラバス』内の「授業のねらい」の項目内において〔授業のテーマ〕、および〔学習目標〕として記載されているので、ここに抜粋して以下に載せる。

### 授業のねらい

#### —授業のテーマ—

同じ「モノ」でも、その捉え方、および扱い方によって単なる「モノ」のままであるか、貴重な資料となるかが分かれています。また、ある種の博物館では資料としての価値を見出せないモノでも、他の博物館では貴重な資料となり得ることがあります。そして、資料の扱い方についても、資料の種類により、それぞれ異なります。モノを資料として効果的に活用するには、その資料の性質と、博物館の役割を適確に理解しなければなりません。そのためには「博物館としての調査研究」についての理解に基づいた活動も欠かせません。この授業では、博物館のコアである資料の種類と、その扱い方の基本的心得、および調査研究との関わりについて講義いたします。

博物館には様々な種類、および形態があり、資料についても同様です。各学生の専門分野についても、それぞれ異なる背景があります。自分のバックグラウンドとは、一見、関連がないと思われる資料についても、「博物館の役割」を意識し、自身の専門分野に応用する方法を模索していただきたい。

#### —学習目標—

##### 【1. 博物館資料を扱う者としての心構え、及び倫理の理解】

博物館資料の取り扱いは、日用品の扱いとは大きく異なります。フィジカル、インテレクチュアルの両面について考慮して取り扱わなければ、資料としての価値を損ねてしまいかねません。実習、あるいは実務で博物館資料と関わる際に、その重要さをしっかりと念頭に置いて行動できるようになっていただきたい。

##### 【2. 博物館の使命、および収集方針に基づき、適切に資料としての可能性を見出す力】

博物館は、そのミッション（使命）に則り存在します。よって、それを満たすため、博物館資料の収集方針があります。同じモノでも博物館によって、その価値は異なります。また、資料を異なる側面からインタープリットすることにより、新たな価値を見出すことができます。このような見識を資料の収集・展示に反映できるようになっていただきたい。

##### 【3. 適切な妥協点を見出す力】

ここで言う「妥協」とは、決して「手を抜く」という意味ではありません。学芸員は、博物館資料の「保存・保護」 v s 「研究・教育・展示への活用」という矛盾する博物館の使命に対応しなければなりません。その際の判断基準は状況により、常に異なります。様々な要素・要因について考慮し、資料を劣化させないよう、また、資料の質を下げないよう、矛盾する使命に「適切に譲歩するポイント」を判断できる力を養う姿勢を持ち続けていただきたい。

北海学園大学 学芸員課程 『博物館資料論 講義概要（シラバス）』より抜粋

〔授業のテーマ〕では「ある種の博物館では資料としての価値を見出せないモノでも、他の博物館では貴重な資料となり得ることがあります。」、〔学習目標〕では「同じモノでも博物館によって、その価値は異なります。また、資料を異なる側面からインターパリットすることにより、新たな価値を見出すことができます。」との一文がある。モノ（モノ・イキモノ・コト）から読み取る情報が多いほど、資料としての価値が高まり、活用の幅も広がるということである。

期末レポートでは、8種類のレポートを課してそれらをひとまとめにして提出してもらっている。この8種類のレポートのうちの2つが「オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1」〔以下「ODR-1」と記述〕と、「オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2」〔以下「ODR-2」と記述〕である。ODR-1は「資料がどういうものかについての記述（それが何であるのかということについて、その特徴等についての物理的事実についての情報）」であり、ODR-2は「その資料に関する関連情報（入手経路、それにまつわるエピソード、他の補足事項等）」である。つまり、ODR-1とODR-2には各学生がモノから読み取った情報が記述されている。

2つのODRのうち、ODR-2での情報量の充実が、資料としての活用の幅に関わってくると言える。資料の入手経路や、その資料についてのエピソードには、その資料の所有者のみが知る情報が多く含まれる。これらの情報は、第3者による後の研究ではわからない事実も多く存在する。各学生は自身の所有物を資料と見立てて、そこから資料の背景をデータ（情報）として読み取りODR-2として記録する。そこには資料の現所有者である各学生のみが知りえる事実があり、そこで記録されなければ、その事実は永遠に知られることになくなってしまうかもしれない。学生にはこのような情報を資料（モノ）から引き出して記録する能力を身に付けてもらいとの思いで、レポートにはこの項目を含んだ。実際、非常に興味深い内容も多い。同じタイプのモノ（物、商品、製品、etc.）でも、所有者が異なればその扱われ方、言い換えればそのモノが歩んできた歴史は異なる。

我国、日本では博物館資料をなにかについて「一次資料」、「二次資料」と分類して語る慣行があるように見受けれる。一般的には「一次資料は実物資料であり、二次資料は実物資料である一次資料についてのデータや文献史料」というのが大筋の考え方である。しかし、何が一次資料で、何が二次資料なのかという基準は曖昧で、扱う資料の学術的分野の違いによりその解釈は異なる。また、ある分野や設定においては二次資料とされる資料も、分野や設定が変われば一次資料ともなる。

大切なのは、一次資料であっても二次資料であっても、如何に資料を効果的に活用し、そして資料の特性に応じて保存していくかである。そこで、講義では資料管理についてのアメリカ的な捉え方であるフィジカルとインテレクチュアルについて説明している。以下は講義での配布資料である。

コレクションズ・マネージメント（資料管理）について	
Collections Management	
●Physical	
●Intellectual	
★フィジカル：物質としてのコレクションそのものの状態の管理	
▶ミュージアム内で実施できる資料の保存環境設定や、基本的処置	
▶特殊技能を要する処置を施したり、修復したりするのは、その専門家（object conservator, etc.）に依頼すべきなので、学芸員として求められるのは資料の基本的な取り扱いと、専門家に依頼するかどうかを適切に判断する能力です	
▶この、資料の基本的な取り扱いについては、徹底したものでなければならない	
★インテレクチュアル：コレクションに関するデータと、それらを記録するシステムの管理	
☆アメリカでは、コレクションズ・マネージメントのインテレクチュアルな部分を専門に担う「レジスター」（registrar）という役職が認知されている程、重要な任務です	

博物館資料論 配布資料より

「フィジカル（物的）資料」と「インテレクチュアル（情報/データ・知的）資料」という捉え方を意識し、どちらも優劣つけられない重要な要素であり、これら2つが備わってこそ一人前の資料となり得ることをしっかりと学生に伝えたい。

2012年度（平成24年度）から新たに学芸員課程省令科目に加えられた「博物館情報・メディア論」は、インテレクチュアル資料の意識の助長のカギとなる。他大学の学芸員課程ではこの博物館情報・メディア論を担当させていただいているが、そこでの博物館情報というものについても意識し、博物館資料論の講義で反映している。

学生の期末レポートに話を戻すと、ODR-2は、学生がフィジカル（物的）資料からインテレクチュアル（情報/データ・知的）資料を掘り起こして獲得し、資料の解釈の幅を広げ、資料の可能性を高めることへの経験でもある。次頁より、学生のレポートを掲載してあるが、各学生の資料についての捉え方の違いが見て取れる。今回の講評ではオブジェクト・ディスクリプションについて述べたが、もちろんレポートの他の項目にも各学生が自身で考えてレポート作成に取り組んだ姿勢がみてとれる。

学生には、博物館資料論で学んだことをしっかりと意識して、今後の学芸員課程の科目に取り組んでもらいたい。

# 博物館資料ドキュメント 『ヘアピン（スリーピン）』

人文学部日本文化学科1年 酒井 葵

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

当資料はヘアピンの一種であり、特にスリーピンといわれるものである。当資料は金色を主体とした蝶をモチーフとした飾りがついたスリーピンで、金属でできている。2019年に購入した福袋の中身の一つである。(詳しくは後述)

製作場所は、このヘアピンが包装されていた小さな袋に貼られた MADE IN CHINA というシールから中国だということが分かる。制作年については不明だが、2019年の福袋の中身であったということ、また経年劣化がそれほど見られないことから、2018年あたりに製作されたのではないかと考察される。

所有者は酒井葵であり、詳しくは後述するが、彼女のいとこから譲り受けたものである。

先程、当資料はヘアピンの一種だと紹介したが、そもそもヘアピンとは髪をまとめるために用いられる道具で、そのデザインや種類は多岐にわたる。単純に髪を留めるためだけに使用されるシンプルなデザインのものもあれば、飾りがついた装飾品としてのヘアピンも存在する。

ヘアピンの歴史は古く、古代エジプト時代にまでさかのぼる。当時は食事の際に髪が落ちてくるのを防ぐために使われていたそうだ。直線的な形で、髪に刺すように使用されていた。今現在私たちが利用している髪をはさむタイプのヘアピンは、エリザベス1世の時代(1558-1603)に開発されたといわれている。この頃から、金属が使用されたピンの記録が残るようになった。なお、日本ではかんざしがヘアピンの前身である。

以下、ヘアピンの種類をいくつか紹介する。

### I. アメリカン

一番一般的であるピン。アメリカピンの略であり、アメリカで広く使われていたピンである。デザインも多岐にわたり、波打っているものや平らなもの、色付きのもの、飾りがついたものなどさまざまである。



### II. バレッタ

主に大きめの飾りがついた表側と髪をはさんで固定するための裏側にわかかれている。他のピンに比べて、髪を留める力が強いのが特徴である。また、他のピンに比べて装飾品としての役割が大きく、かわいらしいデザインのものが多い。



### III. スリーピン

今回の資料は、このスリーピンに属するものである。スリーピンとは、三角形やひし形をした主に金属の板を加工して作ったものである。スリーピンの由来は sleep pin であり、髪を落ち着かせるという意味だ。他のピンに比べて、髪を留めやすいという

利点がある。髪を固定する際に音が鳴ることから、パッチン留めとも呼ばれている。もしかしたらこちらの方がなじみ深い名称かもしれない。こちらもバレッタ程ではないが、見せるためのヘアピンとしての役割が大きいため、凝ったデザインのものが多くみられる。また、サイズに関しても大きめのものから小さめのものまであるので、どのくらいの量の髪をまとめたいかによって、適切な大きさのスリーピンを探し出すことができる。

基本的にどのピンも髪を留めるという共通の用途があるが、使用する場面や使用に適した髪の量などに差があるといえる。どのピンを使うか、きちんと考察してから選ぶことが必要であるということだ。



## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

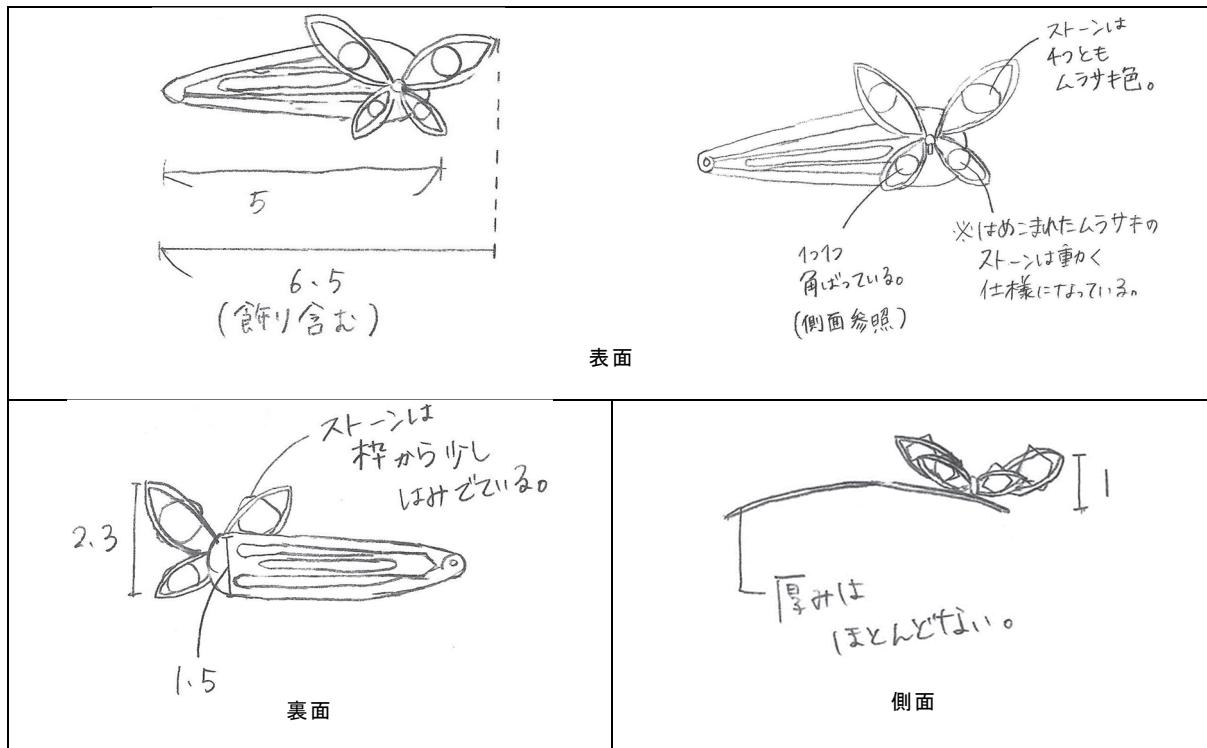
当資料は 2019 年 1 月 2 日、大通駅の地下オーロラタウンにある STONEMARKET にて購入した福袋に入っていたものである。福袋は 1,000 円で売られていたものである。10,000 円相当のヘアアクセサリーが入っているという福袋であった。なお、この福袋を購入したのは酒井氏ではなく彼女のいとこであり、正確に言えばいとこからその福袋の中に入っていた一部のものを譲り受け、その中の一つがこの資料であったということを述べておく。

譲り受けた理由としては、いとこが普段使いするようなデザインではなかったというのと、そのとき酒井氏がヘアピンを特に欲していたためである。特にスリーピンは先述した通り、他の種類のヘアピンに比べて髪を簡単に留めることができ、家で前髪を留めた状態で過ごすことの多い酒井氏にとって、ほぼ必需品といっていいものである。また、デザインが酒井氏の好みであったという理由もあげられる。

ただ、ヘアピンを意気揚々と受け取った酒井氏は、家に帰ってさっそくヘアピンで髪を留めようとして悲しい事実に気づいてしまった。スリーピンは基本的には見せるためのヘアピンであり、今回譲り受けたものも、蝶をモチーフにしたデザインのものである。詳しくはイラストレーションの項目を参照してもらいたいが、このヘアピンには上下がある。つまり、当資料はデザインから見ても分かる通り、モチーフが左にくるようにしか髪を留められないである。モチーフが右になるように髪を留めると、モチーフがさかさまになってしまふ。右側の髪を留めることはできるが、左側の髪を留めることは出来ない。なぜなら、モチーフの向きが逆になってしまい、よくわからないデザインになってしまふからである。酒井氏は普段、前髪を左側に流して髪を留めていたので、このピンのデザインをそのままに利用することができないのである(モチーフが逆になってしまふ)。好みのデザインのピンだったので、できればデザインを損なわずに使用したかったものである。

また、こちらもイラストレーションの項目を参照してもらいたいのだが、蝶のモチーフにはめ込まれている紫のストーンは完全に固定されておらず、ヘアピンを動かすとストーンもあくまでほんの少しだが動くようになっている。また、非常に小さな音ではあるがそのストーンが動くことによって、小さな音も鳴るようになっている。

## イラストレーション (Illustration)



サイズ [単位 : cm]

横 : ピン部分 ⇒ 1.5cm (飾り部分含む ⇒ 6.5cm)

縦 : ピン部分 ⇒ 1.5cm (飾り部分含む ⇒ 2.3cm)

厚さ : ピン部分 ⇒ 0.1cm 未満 (飾り部分 ⇒ 1.0cm)

全体的に金色で、強めの金属のにおいがある

## コンディション・レポート (Condition Report)

当資料を入手したのは先述した通り 2019 年の 1 月 2 日であり、かなり新しい。そのため、経年劣化は見られない。当資料は主に金属で構成されていることから、経年劣化は時間が経つにつれて深刻な問題となることが予想される。

傷も特には見受けられない。ただ、指紋が目立っていることが気になる点としてあげられる。この点については、後のハンドリング・インストラクションズにて詳しく述べたい。

また、オブジェクト・ディスクリプション・レポート②において、モチーフにはめこまれているストーンが動くという点を述べたが、この頁においてもその点に触れておく。埋め込まれた(わずかながらに動くということを考慮すると、正しくは金属部分の枠に挟まれたという表現の方が正しいかもしない)ストーンは故障ではなく、そのような仕様であると考察する。理由は 2 つある。1 つ目の理由として、手に入れてからほとんど資料に触れていないということがあげられる。つまり、壊してしまうような機会がほとんどなか

つたのである。2つ目に、このピンが入っていた福袋の中には、いうまでもなくこの資料以外にも何点かヘアアクセサリーが入っていた。その中に、このピンと同じように、はめ込まれたストーンが動くような仕様になっているヘアクリップが入っていたのである（余談だが、酒井氏はこちらもいとこから譲り受けている）。この点から、この商品を買ったお店は、一種のデザインとしてこのようにストーンが動く形式のアクセサリーを何種類か作っているのだと私は考えた。よって、このストーンが動くという点は、仕様だと考察する。

#### リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

当資料は、主に金属でできている。よって、当資料を保存するにあたっては金属に適した環境設定をする必要がある。

金属は人体の皮脂や、空気中に微量に含まれる硫化水素が原因で傷んでしまうことが多い。金属の成分と反応した硫化水素が黒ずんだ薄い膜となって、表面を覆ってしまうことを硫化という。また、金メッキのアクセサリーの場合メッキがはがれてしまうという可能性もある。硫化は落とすことのできる汚れであるが、メッキがはがれてしまった場合は二度と元の状態に戻すことは不可能であることに注意したい。

これらの劣化を防ぐためには、いくつか方法がある。一つ目の方法として空気にあまり長い時間触れさせないというものがある。空気中に微量に含まれている硫化水素に触れないようにする、ということである。もう一つの方法として、保管する際は出来るだけ密閉性の高い容器に入れるということがあげられる。また、一つの大きな密閉された容器に入れるのではなく、一つ一つの資料を仕切って保存した方が良い状態をより長く維持できる。

金属は低温度低湿度(45 パーセント)で保存するのが適しているため、保存する部屋の湿度や温度に気をつけたい。

#### ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

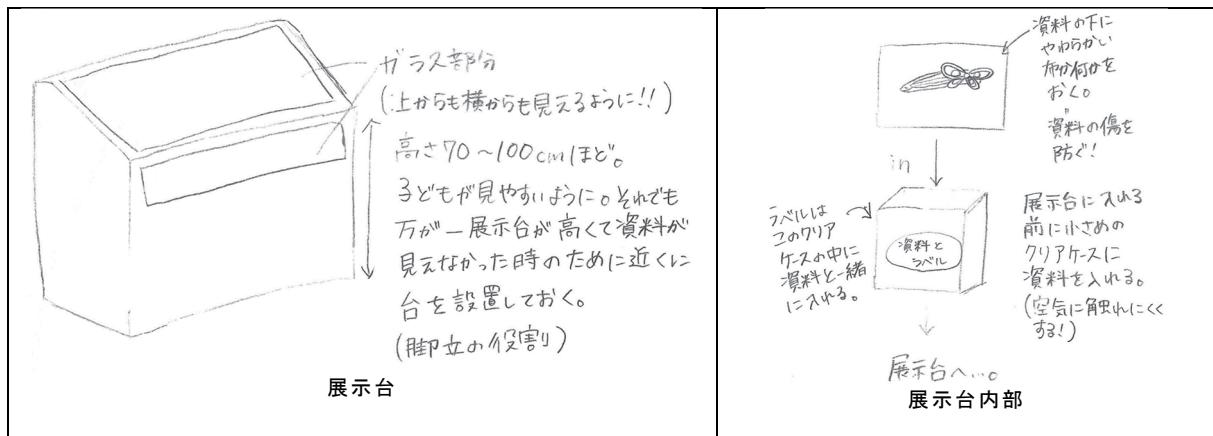
コンディション・レポートにおいて、当資料は指紋が目立つということを述べた。この点を改善するために当資料を扱う際は手袋を着用することを義務付けたい。また、金属は皮脂にも弱いため、手袋を着用することで指紋だけでなく皮脂からも資料を守ってくれるであろう。

また、持ち運ぶ際は他の資料と接触させないように注意する必要がある。資料どうしの接触によって資料に傷がついてしまう恐れがあるためだ。あまり強い力で資料に触れることも避けたい。

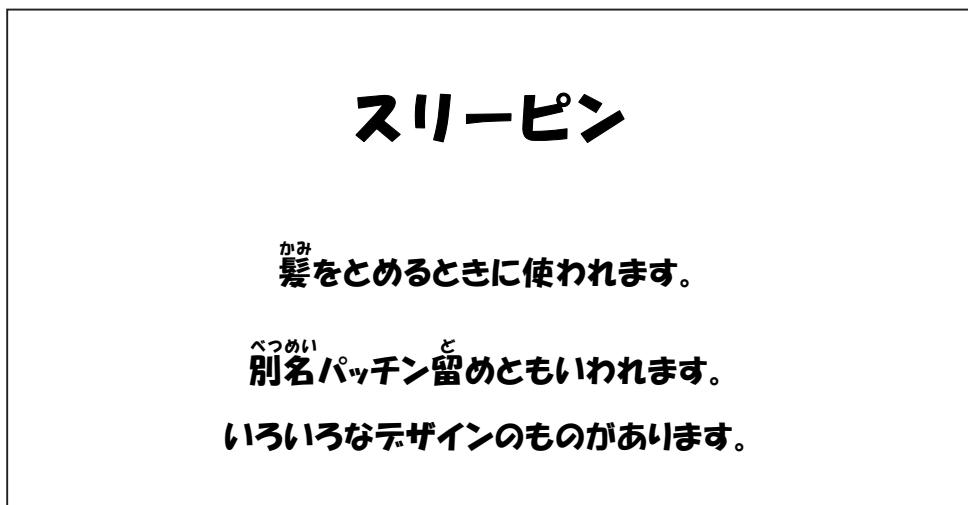
なお、当資料は非常に強い金属のにおいを発しているが香水などでそのにおいを取り除こうとするのは厳禁である。金属にとって、香水はいい成分のものだとはいえないからだ。基本的に資料の修復や修理に関しては、博物館職員の一存で進めるのではなく、専門の機関と協力することが重要であるといえる。

## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

展示資料であるヘアピンは触れることができないようにしている。理由は以下の通りである。まず、ヘアピンは日常生活でも簡単に触れることが出来るモノであるからである。また、触ることにより金属の匂いが手に付くのを防ぐ目的もある。資料保存の見地からは、指紋の付着を防ぎ、良い状態で長く保存し続けることが求められる。



レーベル (Label)



子供にも内容を理解してもらえるよう、簡単な日本語を使い、漢字には読み仮名をふった。また、タイトルを大きめにするのはもちろん、説明文も資料のレーベルとしてはやや大きめに設定した。文字も、堅苦しい印象を与える字体は避け、柔らかい印象があり、かつ読みやすい字体を選択した。小さな子供にも楽しんでもらえる博物館資料としたいからである。

# 博物館資料ドキュメント 『STAR WARS R2-D2 万年カレンダー』

法学部1年 城野 ひかる

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

名称 : STAR WARS R2-D2 Perpetual Calendar

所有者 : 城野清美

材質 : 樹脂製 (恐らく木製の型に樹脂でコーティングしたものと思われる)

製作国 : アメリカ合衆国

製作者 : Hallmark ©<sup>TM</sup>Lucasfilm Ltd.

製作年 : 不明 (2012年以前)

サイズ : 高さ×幅×奥行

本体 ⇒ 105×88×63 [mm]

付属品 1 (3個) ⇒ 7×34×7 [mm]

付属品 2 (2個) ⇒ 17×17×17 [mm]

重さ : 約 275 g

映画「スターウォーズ」のキャラクター、R2-D2 のフォルムを模した万年カレンダー。Hallmark というアメリカのグリーティングカード製作会社によって製作されたものであり、海外雑貨の中のスターウォーズ雑貨の1つである。他にもダース・ベイダーというキャラクターのフォルムをした万年カレンダーがある。

万年カレンダーとは、万年、つまり長い年月繰り返し使うことのできるカレンダーである。万年カレンダーには2つの種類があり、毎日その日だけの日付を表示するものと、毎月1ヶ月分の日付を表示するものがある。この資料は前者であり、使用するためには1日ごとに月/日を合わせる必要がある。その他、機械的な文字盤の操作により月/日が表示されるものや、電子的に表示するものがある。最近では、コンピュータで自動計算して表示するものもこのように呼ばれることが多い。

カレンダーとは暦であり、1年間を月や週に従って記載しているものの総称である。休日や年中行事を知らせるものとして日常生活の必需品となっている。現在使用されている世界共通のカレンダーは一般にグレゴリオ暦と呼ばれるもので、日本では明治初頭に施行された。

この資料は全部で6つのページに分かれている。R2-D2 のフォルムをした本体が1つ、1月から4月、5月から8月、9月から12月がそれぞれ英語で書かれた付属品が3つ、日を表す数字が書かれた付属品が2つである。1つは0、1、2、3、4、5が書かれていて、もう1つは0、1、2、7、8、9(6と9は併用)が書かれている。この合わせて12の数字を組み合わせることにより、1日から31日までの日付を表すことができる。

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

所有者は映画「スターウォーズ」の熱狂的なファンで、2015年、札幌の海外雑貨を取り扱う雑貨屋「プラザ」で購入した。この資料を購入する3年前、所有者は新居に移り、玄関に置くためのカレンダーを探していた。その年には「スターウォーズ」の新しい映画が公開され、この資料を購入した当時、スターウォーズ関連の商品が多く店頭に並んでいた時期であった。他にもダース・ベイダーというキャラクターのフォルムをした商品があるが、所有者はこのR2-D2というキャラクターが好きだったことが購入の決め手となった。購入してから現在まで、この資料は所有者の居住している住宅の玄関に置かれており、所有者の次女が毎朝、家を出るときに月/日を合わせている。同居している所有者の家族に聞いたところ、家族全員が外に出るときに必ず見て日付を確認している。これからも万年カレンダーという名が指すように、長く使い続けるつもりだ、と所有者は述べている。

R2-D2は映画「スターウォーズ」シリーズに登場するキャラクターである。映画「スターウォーズ」は、ルーカスフィルムが製作するアメリカ合衆国のSF映画で、映画の他にもアニメーション、小説、コミックなどの複数の媒体で展開されている。興行収入は世界歴代2位を記録し、そのうちR2-D2は「スターウォーズ」シリーズで関連商品が最も多く販売されたキャラクターである。映画本編は3作品ごとにまとまって製作され、それぞれ10年ほどの期間を経てから次の映画が公開されている。この映画全てに登場するキャラクターがR2-D2とC-3POというドロイドである。R2-D2は高度の電子頭脳を持ち、宇宙船や電子機器の修理などを得意とするドロイドで、言語は操れないが機械音で会話する。

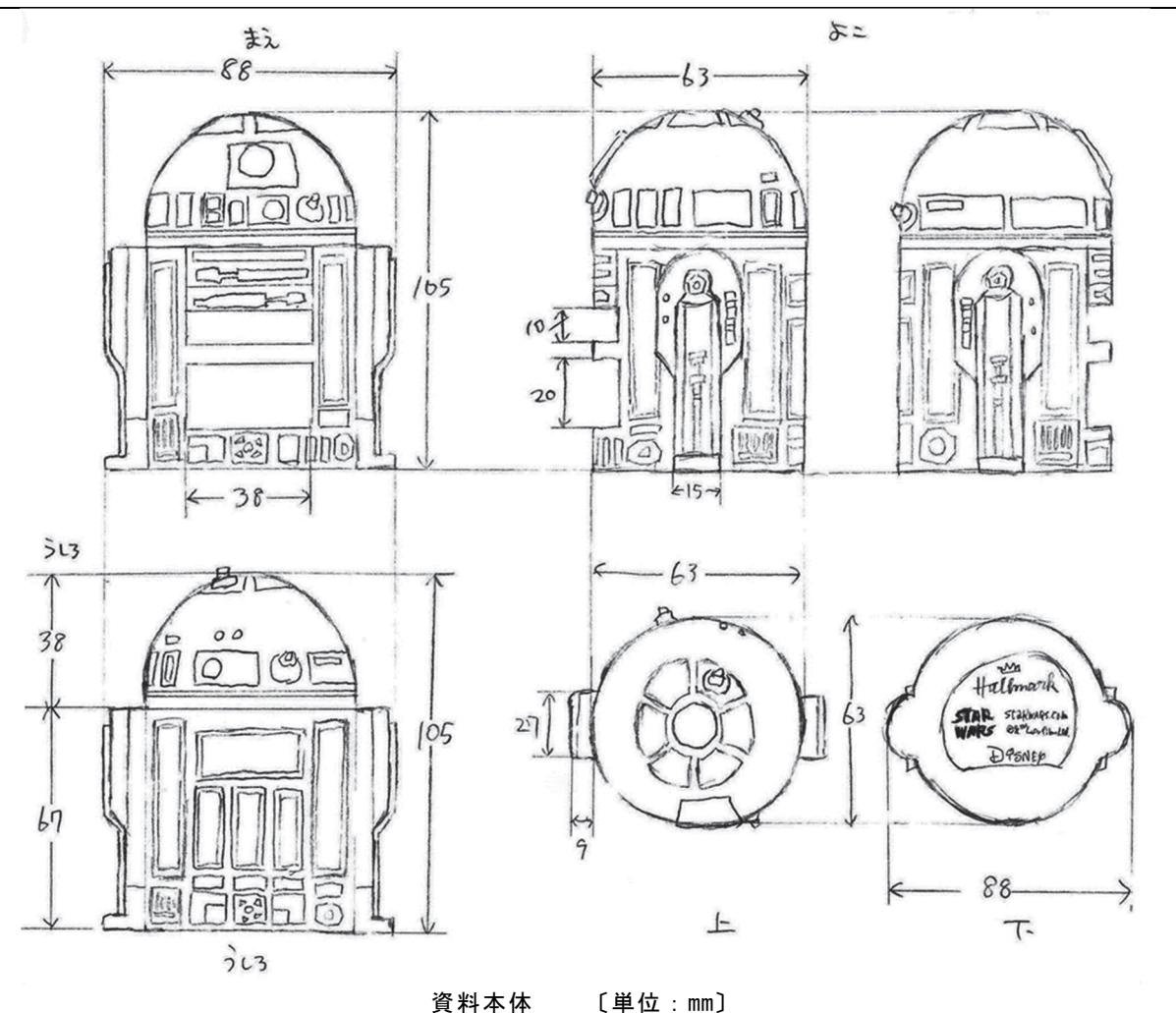
映画「スターウォーズ」シリーズの全9作品のうち6作品はルーカスフィルムが製作したが、2012年にディズニーによって買収された。そのためスターウォーズ関連の商品は商標をルーカスフィルムからディズニーに変えなければならない事態となった。この資料も例外ではなく、底面に直接ホールマークとルーカスフィルムの商標が印字されているようだが、上からディズニーの商標が印字されたシールが貼られている。このことからこの資料が製作されたのは2012年以前だと考える。

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

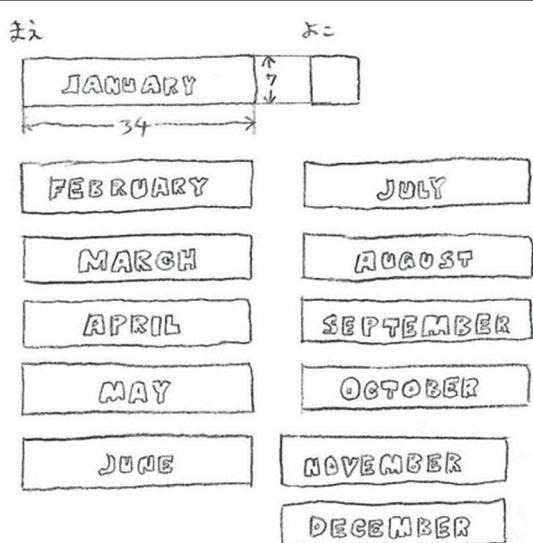
表面は樹脂のコーティングで、強い照明、特に直射日光などの紫外線は塗装面の退色や変色をさせる恐れがあるため避けなければならない。弱い照明や紫外線を発しない照明でも、微量の色の変化を防ぐことはできないため、光の当たらないところに保管するべきである。また、極端な低温への変化は樹脂のコーティングに影響を与える恐れがあり、内部の木製の部分もあるので、温度と湿度が高いと内部で腐食が進む恐れがある。さらに底面には紙でできたシールが貼られているためカビが発生する可能性がある。そのため温度は22°C～25°C、湿度は40%～50%が適切であると思われる。

底面には紙でできたシールが貼られてある。念のためアシッド・フリーの容器に入れて保管することが望ましい。

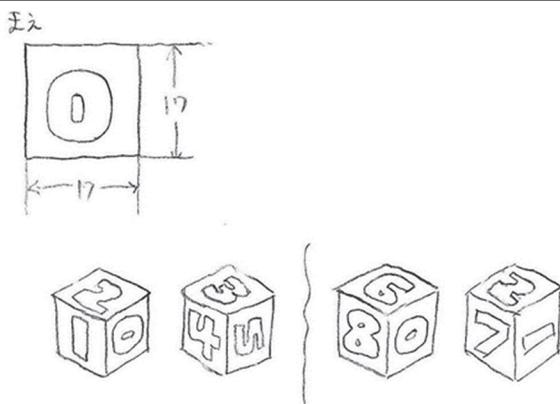
イラストレーション (Illustration)



資料本体 [単位 : mm]



付属パーツ 1 (3 個) [単位 : mm]



付属パーツ 2 (2 個) [単位 : mm]

## コンディション・レポート (Condition Report)

資料は所有から四年もの期間、毎日のように月/日を表示した付属パーツを出し入れしていたにもかかわらず、状態は良好である。資料をよく見ると木目が見えるため、木製の型に樹脂製の塗料でコーティングしたものと思われる。資料本体は強度があるため、欠ける可能性は低く、引っ搔き傷などもつきにくいのか、資料には大きな傷は見当たらない。2回ほど 1mくらいの高さから床に落としたことがあるらしいが、それによる凹みなども見当たらない。

月/日の付属パーツは頻繁に出し入れするため、本体の青色の塗料が薄く付着している部分がある。底面の淵は白い塗料が剥がれ、黒っぽい茶色の地が点のように見えている部分がある。本体裏面から見て右側上部に、長さ約 4 mm の線のような凹みがある。先に述べたように資料に引っ搔き傷などはつきにくいため、製作段階でついた傷と思われる。

## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

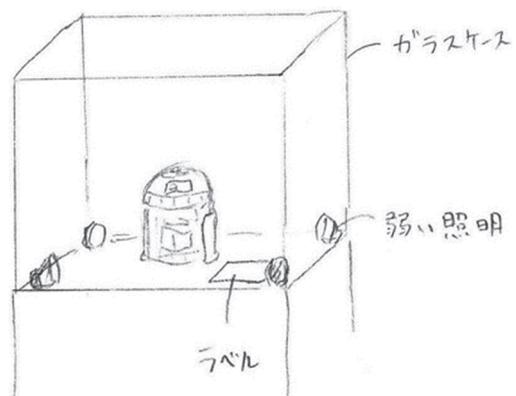
コンディション・レポートで述べたように、この資料は強度が強いため、少しの衝撃で傷や凹みは出来にくい。しかし、余りに高い地点から落としたり強い衝撃を与えると、塗料が剥がれたり凹みが出来てしまう可能性がある。強度が十分だからと油断せず、あくまで扱いは慎重でなければならない。また、資料は指紋が付きにくい素材である。そのためよく洗った手で扱うことも可能である。万が一のことを想定して手袋を使用する場合は、綿などの布製の手袋だと滑って落とす恐れがあるため、ゴム製の手袋を使用するとよい。

資料は本体と 5 つの付属品、合わせて 6 つある。本体に月/日の付属品を収納したまま保管してしまうと、移動させた時などに本体と付属パーツが擦れて、塗料が剥がれたり色移りしたり、資料が欠けてしまう恐れがある。そのため付属パーツは 1 つずつ梱包材シートなどでくるみ、それぞれが触れ合わないようにして保管する。

## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

R2-D2 は「スター・ウォーズ」シリーズで関連商品が最も多く販売されたキャラクターであるから、R2-D2 の関連商品を展示している博物館での展示を想定する。そのため展示品が多いことを予想し、シンプルかつコンパクトな展示方法を取る。

リクワイアド・エンバイロメントでも述べたように、資料は直射日光など紫外線や強い照明を当てるとき、塗装面の退色や変色を招く恐れがあるため、紫外線の発しない弱い照明で展示する。



資料は底面を下にして直立した状態で、360 度のどの角度からも見ることが出来るよう展示する。この資料は倒れにくいが、念のため資料の下に滑り止めの素材を用いるなどの対策をしても構わない。また、月/日の付属品は収納したまま展示することとし、万が一倒れたときにパーツが散らばって破損することを防ぐため、テグスを取り付け飛び出さないようにする。

#### レーベル (Label)

R2-D2 は「スター・ウォーズ」シリーズで関連商品が最も多く販売されたキャラクターであるから、R2-D2 の関連商品を展示している博物館を想定してこのラベルを作成した。「スター・ウォーズ」は全世界で有名な作品なため外国人も博物館に訪れる可能性がある。そのため日本語だけでなく英語でも同じように表記をした。この博物館では、資料そのものが何かということは重要ではなく、R2-D2 の関連商品が多く販売されているという実質的な量を展示する。そのため内容については、使用方法や所有者などの詳しい説明は必要ではないと判断し、出来るだけ簡単に済ませた。また、「スター・ウォーズ」シリーズのファンの年齢層は高いため、子どもが訪れるることは少ないだろうと判断し、特に読み仮名は振らないこととする。

シンプルで読みやすいよう意識した。暗い照明の中でもよく見えるように、過激な色は使わず白地に黒字とした。また読みやすいように、日本語は日本人がよく見慣れた「MS 明朝」というフォントを使い、英語は「Times New Roman」というフォントを使用した。文字の大きさは、資料名は太字にしてやや大きめの 16 ポイント、他の説明は「12」ポイントとした。

### スター・ウォーズ R2-D2 パーペチュアルカレンダー

R2-D2 のフォルムをした万年カレンダー。

製作：ホールマーク、ルーカスフィルム（アメリカ合衆国）

材質：樹脂製

### **STAR WARS R2D2 Perpetual Calendar**

Production : by Hallmark and ©<sup>TM</sup>Lucasfilm Ltd. (USA)

Material : Resin

# 博物館資料ドキュメント 『十二支の鈴根付ストラップ（辰の絵柄）』

経済学部1年 米田 梨華

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

- ・名称 十二支の鈴根付ストラップ（辰の絵柄）
- ・サイズ 10.4cm [鈴部分 2.4cm (直径 2.0cm)、根付部分 7.7cm]
- ・材質 鈴部分・鈴と根付をつなぐ部分 金属、ストラップ部分 糸  
(説明書やパッケージがないので詳細は不明)
- ・所有者 米田梨華

十二支とは、子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の総称であり、このストラップには辰が描かれている。鈴は、金属等でできた中空の外身の中に小さな玉が入っており、全体を振り動かすことで音を出すものである。ストラップは紐そのもののことであり、根付は紐に付けるアクセサリーのことなのでこの場合は鈴が根付である。また、このストラップは複数の糸を編んで作る根付紐と呼ばれるものである。

鈴の色はピンク色である。鈴の部分に十二支の「辰」の文字とその絵がデザインされている。絵や文字のデザインは、鈴の表面に何らかの物質を貼り付けているので、その部分を触ると凹凸がある。ストラップの部分は赤、白、黄色、黄緑、紫の5色の糸を編んで作られている。

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

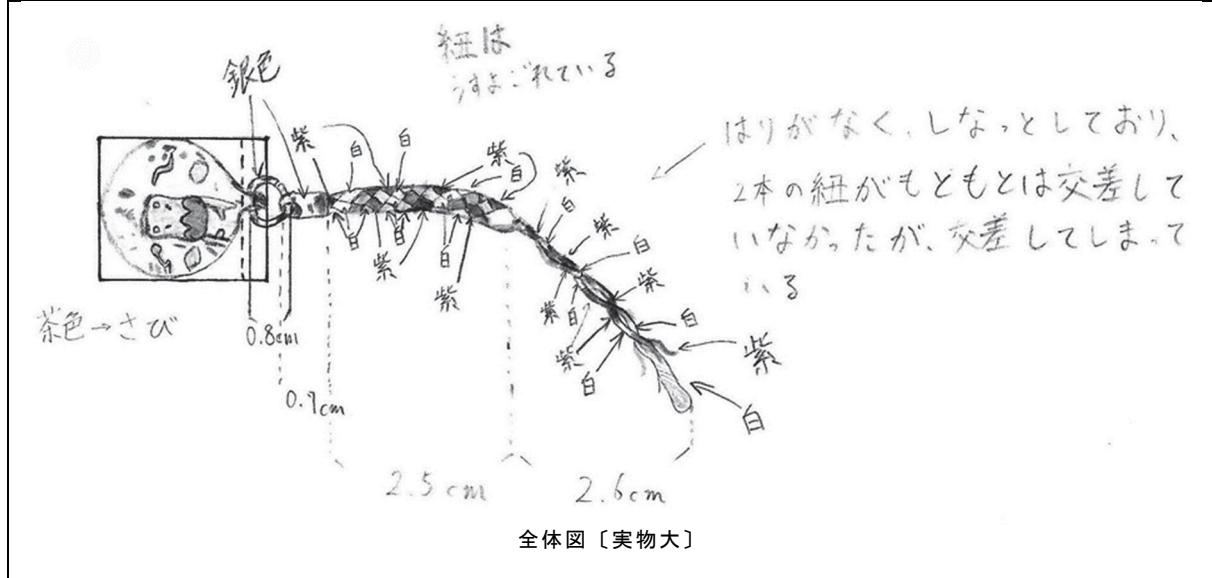
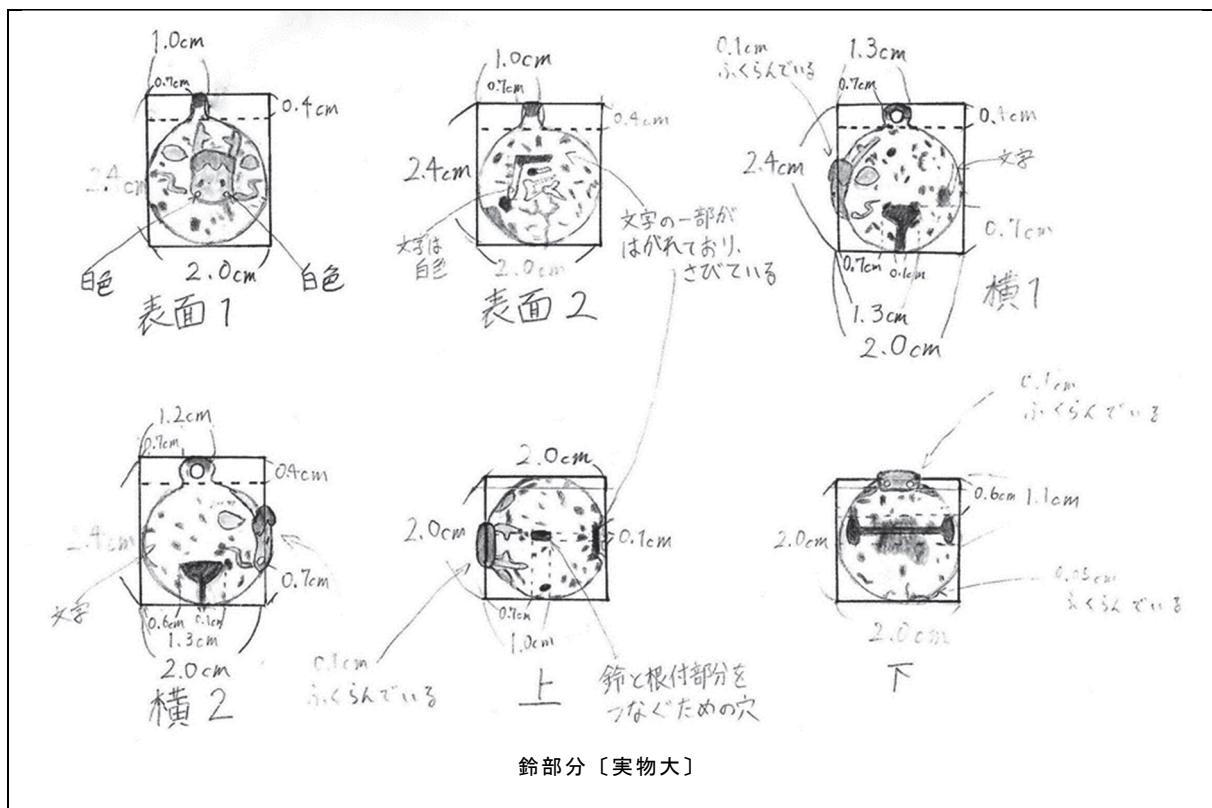
2005年ごろ、北海道神恵内村の厳島神社で販売されていたものであり、所有者の祖父に購入してもらったものである。現在も販売されているかは不明である。所有者が辰年であるため、辰の絵が描かれているものを購入してもらった。祖父は神恵内村に住んでいて、所有者が幼いころ、祖父と2人で祖父の家の周辺をよく散歩していた。神社も家の近くにあり、このストラップを購入してもらったときも2人で散歩をしていたときだった。所有者の祖父は2007年に他界しており、このストラップは所有者が祖父に購入してもらった数少ないもののうちの1つである。

このストラップは2006年、所有者が小学生になってから自宅の鍵につけていた。だが、扱いが雑だったので、ストラップ部分がちぎれる寸前になったため、2012年、所有者が中学生になってからはストラップとしては使用せずに自宅の勉強机の中にしまっている。大事な試験や部活動の試合の時は、お守りとしてこのストラップをかばんの中に入れている。

先ほども記したが、勉強机の中にしまって保存している。なにか特別な入れ物等に入れているわけではなく、そのままの状態でしまっている。ゆえに、机の中にある、他のスト

ラップやメモ帳などと一緒にしまっているので、キズがついている可能性が高い。また、ストラップとして使用しているときもだが、かばんに入れているときも入れ物に入れているわけではないので、キズがついている可能性が高いし、汚れてしまっていると思われる。

### イラストレーション (Illustration)



## コンディション・レポート (Condition Report)

鈴の表面の絵は少しキズがついているだけで何らかの物質ははがれておらず、消えてはないが、文字は一部が何らかの物質がはがれしており、消えている。また、鈴は全体的にさびている。鈴とストラップをつなぐ部分も全体的にさびている。

ストラップの部分は、紐が薄汚れており、年季が入っている。上方の、物に結びつける紐も薄汚れており、5色で編まれていた糸が上方にいくにつれてちぎれていって、最終的に白い糸6本になってしまっている。

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

保存の際は、これ以上さびないように、空気にできるだけ触れないようにする、温度ができるだけ低く保つようにするなど、酸化を防ぐようにする。また、鈴の表面の絵や文字が取れないように、キズがつかないように、強い衝撃を与えないよう気を付ける。

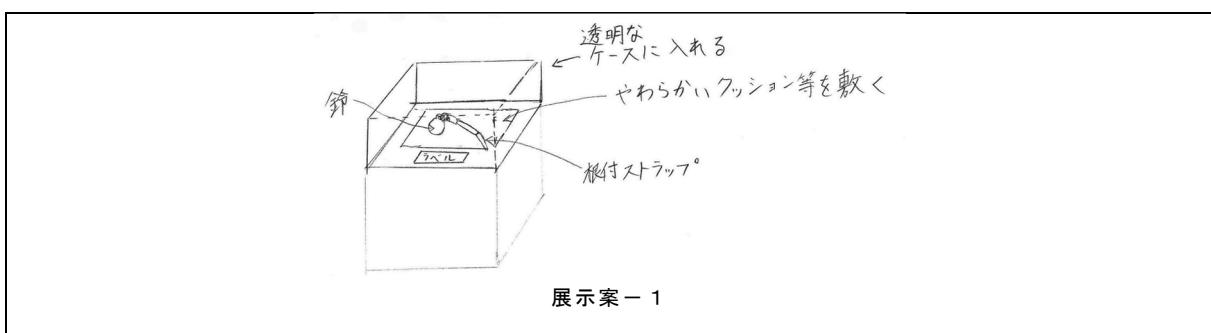
ストラップの部分は、これ以上汚れないようにするために、色移りがしそうな場所に置かない。さらに、紐がかなり損傷しているので、紐がちぎれる危険がある場所に置かないようにする。また、紐の部分を使って吊るすような展示は紐が完全にちぎれる危険があるので、行わない方がよい。

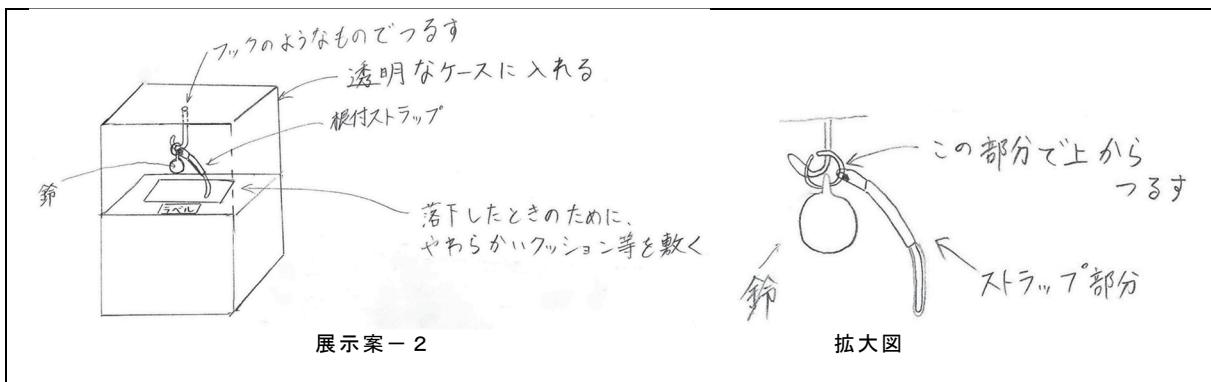
## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

鈴は手が濡れているときは触らないようにし、できるだけ水に触れないようにする。また、指紋がつかないように手袋を装着するなど直接触れないようする。鈴の表面の絵や文字が取れないように、キズがつかないように、強い衝撃を与えないよう気を付ける。

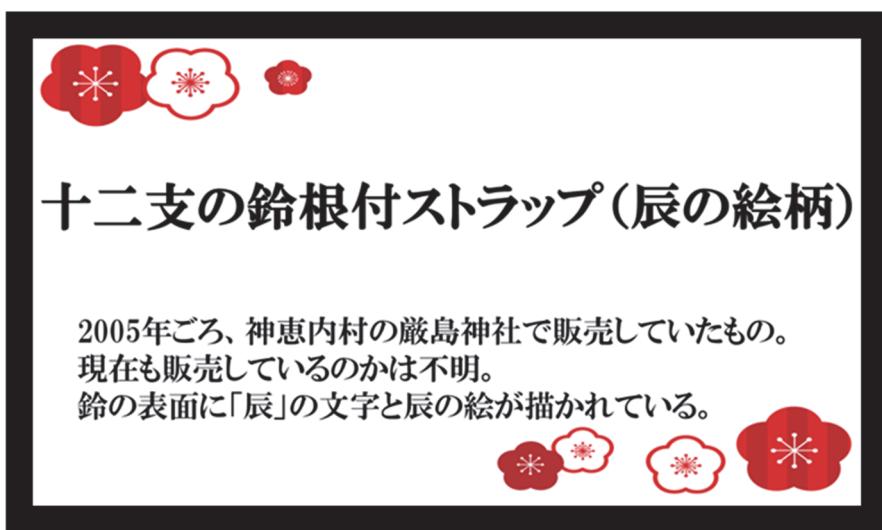
ストラップの部分は、下の方はまだちぎれている部分はないので触っても大丈夫そうだが、上の物に結びつける部分はちぎれている糸がほどけかかっているので、なるべく触らないようにして慎重に扱う。

## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)





レーベル (Label)



# 博物館資料ドキュメント 『本（上橋菜穂子著・精霊の木）』

人文学部日本文化学科1年 本間 藍花

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

資料は、上橋菜穂子著の、『精霊の木』という本である。ファンタジー作家の上橋菜穂子のデビュー作の新装改訂版となっており、1989年に刊行された作品を改めたものである。第1刷は、2004年6月に刊行され、この本は2010年9月に刊行された第6刷となっている。値段は1260円（購入当時の5%税込）で、B6判のハードカバー仕様となっており、偕成社発行である。作者は、上橋菜穂子、画家は二木真希子、発行者は今村正樹である。全国学校図書館協議会・選定図書（2004）、日本図書館協会選定図書（2004）などに選ばれており、デビュー作ながらも高い評価を得ている作品である。1989年の初版のものは、現在は絶版となっていて、入手することが出来ない。初版の絵は、金成泰三が担当していた。この資料は、2004年に改訂版として変更が加えられたうえで出されている。初版発行の1989年から改訂版が出る2004年までの間に、著者である上橋菜穂子は、『守り人シリーズ』や『狐笛のかなた』、『月の森に、カミよ眠れ』など数々の作品を出しておらず、作風も安定してきている。そのため、改訂をする際現在の自分の考えに合わせて書き直すべきではないかと悩んだと著者は改訂版のあとがきにおいて述べている。だが、直すべきと思っていても、一度書いた物語の姿を歪めることは難しいことに加え、考え方や表現が変わっていても、著者らしい物語の核がある作品となっていることから、どうしても気にかかった用語の改変などのごくわずかな改訂をすることに落ち着いたそうである。この資料は単行本であり、ハードカバーの仕様となっていて、文庫版での発売はしていない。だが、電子書籍版での取り扱いはある。

参考：本のサイズ



本と印刷物の体裁/新星出版株式会社  
<http://www.s-syuppan.com/booksize.html>

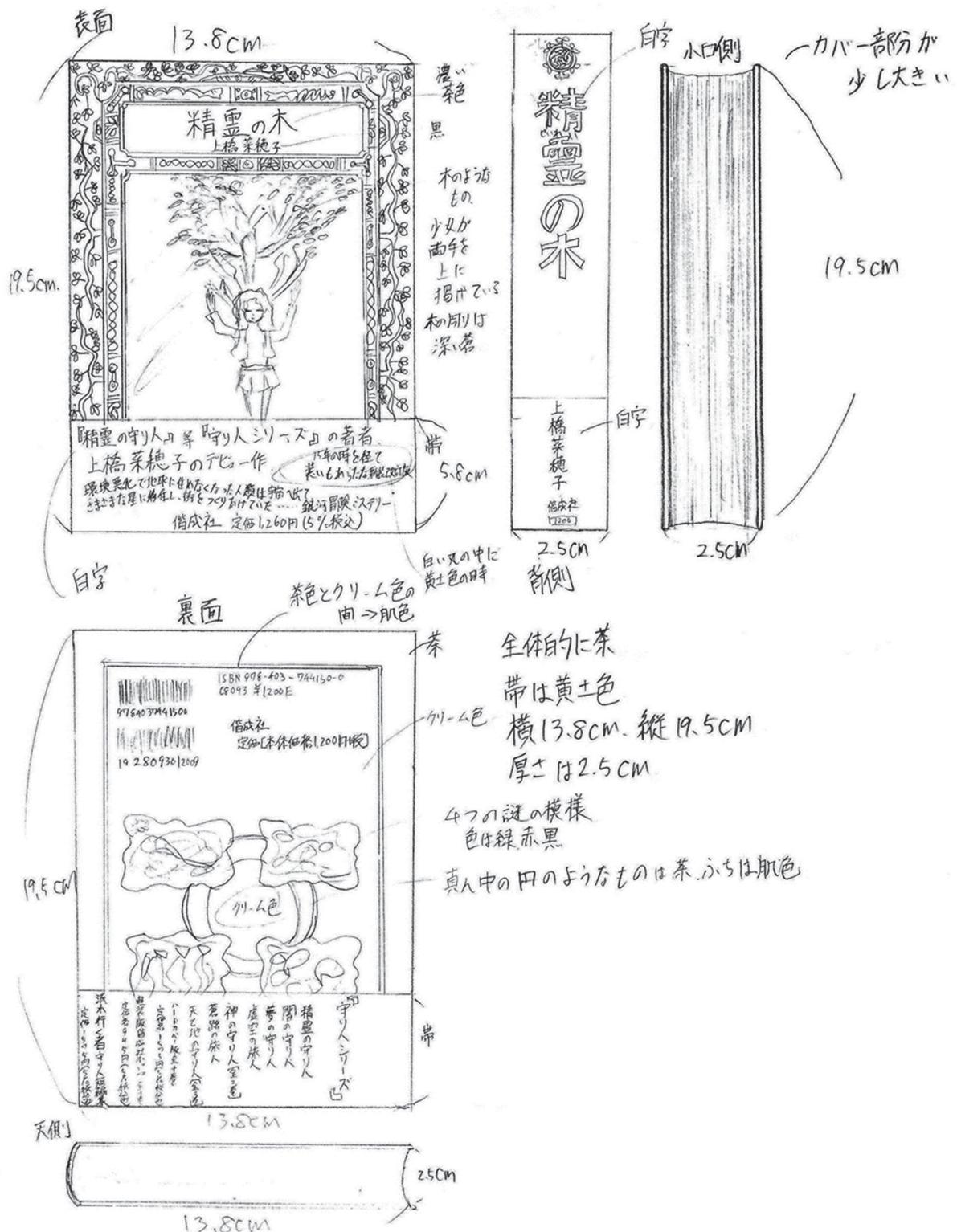
## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

持ち主は本間藍花となっている。持ち主はこの本を平成 22 年（2010 年）頃購入したとしており、現在まで所有している。持ち主はこの本を買った頃のことをあまり覚えていないようだが、この本の作者、上橋菜穂子の『獣の奏者』という本に 2009 年に出会い、作者のファンになったことから、作者の他の本を買い始めた。このことから、2010 年頃の購入と考えられる。購入場所は、詳しくは覚えていないとの事であるが、地元の近くの街である稚内市内の本屋であると考えられている。持ち主は好きな作家の本はハードカバーで集めたい、というこだわりから、ハードカバー版の購入をしたとされている。内容が地球に住めなくなった人々が移住した先の星で、滅びたとされている先住民の謎に迫る、といったもので、SF とファンタジーの要素をどちらも併せ持った作品になっているのだが、持ち主は SF に対して何となく苦手意識を持っていたため、読むかどうかを最初は迷っていたというエピソードがある。だが、やはり好きな作家の処女作は読みたい、ということで購入し、読了することを決断したそうである。やはり処女作、ということもあり、同作者の他作品とは違った初々しさというものが感じられるような気がするものとなっている。だが、作者の才能や、新装改訂版ということもあって世界観に入り込み、どんどん読み進められるような魅力的な作品になっている。

### リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

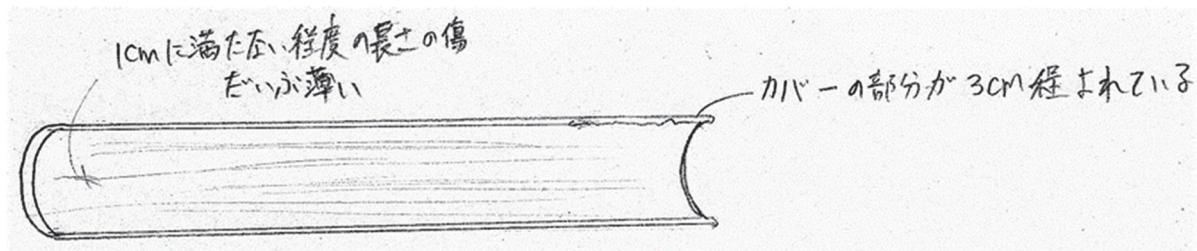
保存の際に気を付けることだが、ハードカバーのため、耐久性は高いが、紙のため、温度や湿度に影響を受けやすい。よって湿度が高すぎると、カビが発生してしまう危険性などがあるため、室温 16~22 度、湿度 40%~60% が望ましい環境となる。また、日焼けによる色落ちに関しても気を付ける必要がある。日光もそうであるが、照明等の焼けによる色落ちが考えられるため、照明管理も重要である。紫外線の影響によって焼けが起こるため、窓の近くに保存する場合には、紫外線防止フィルムを窓に貼るとよいと考えられる。照明も、紫外線防止型のものがあるため、そういう照明にするとよい。汚い場所に保管していると、ほこりが溜まることによって害虫やカビの危険性が出てくる。そのため、常に部屋を清潔にしておくこと、さらに IPM などの方法をとるとよい。こういった保管方法の他に、本そのものに対する保管の際にした方がいいことであるが、劣化を防ぐため、劣化前にカバーを使って保護することも可能である。また、本を積み上げると本同士の重さで圧力がかかり、変形してしまう可能性や、くつついてしまう可能性がある。そのため、本はきちんと立てて保管していくことが好ましい。そして、立てても、ぎっしりと本棚に詰めては、その場合も圧力がかかることに加え、本を取り出す際にも破ってしまう可能性もある。なので、適度に隙間のある状態で保存をするべきと考える。

イラストレーション (Illustration)



## コンディション・レポート (Condition Report)

購入から 10 年近くたっているが、作者のことが好きな持ち主が丁寧に保管していたため、傷はあまり見られない。だが、背側が、電気や日光の影響で若干色落ちしている様子が見受けられる。ごくわずかな違いのようにも見えるが、やはり色落ちが感じられるため、持ち主はあまり光が浴びないように保管しているとされている。また、書店で購入する際はなるべく見た目がきれいで傷がないものを選ぶようにしているらしいが、天側の花布に近い部分に若干爪によるひっかき傷のようなものが見える。また、表紙側の見返し部分のカバーの右上が若干よれている。

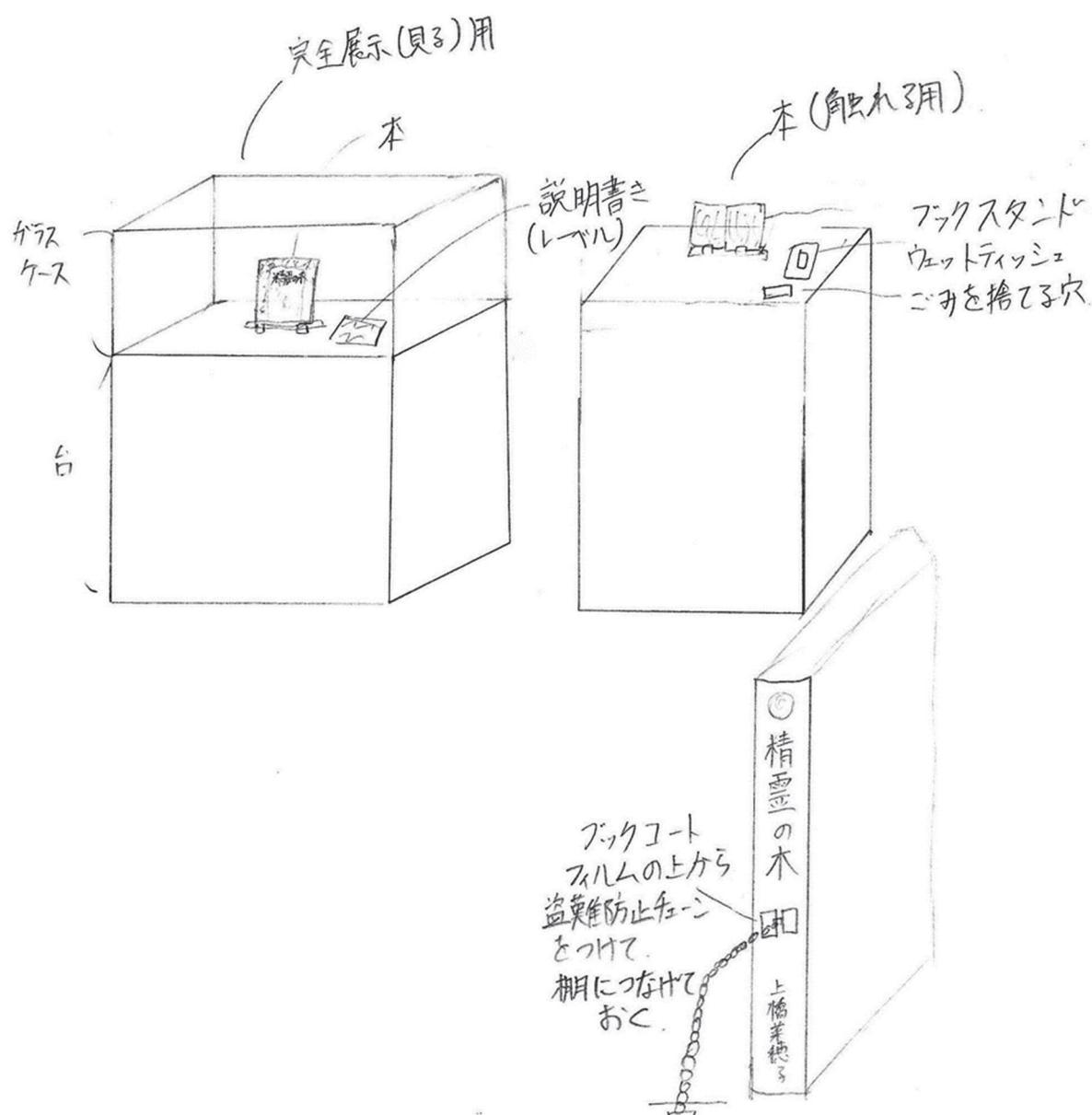


## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

取り扱いの際の注意点だが、気にしなければならないのは、紙という点である。破らないように丁寧に扱うことが何よりも重要である。本を開く際には、強く開くと背貼りが弱り、かがり糸が緩んでしまい、折り丁がずり出て壊れてしまうので、丁寧な扱いが必要である。読む際は無理に開かず、180 度以下に收めることが望ましい。また、読みかけで開いた面を下に置いておく、といったことをせずに、しっかりとしおりなどを挟めておくことが必要である。本棚に並べる際は、斜めに置いたり、横にしたりという置き方は本に負担がかかり、損傷の原因になる。詰め過ぎず、倒れるほど緩すぎないほどの量を本棚に入れることが望ましい。また、ブックエンドなどを使うことも有効的である。また、本棚から取り出す際、背表紙上部に指をかけて引き出すと、負荷がかかるので避けるべきである。そのため、背表紙上部を一度奥に押して、飛び出た下部を掴んで取るか、背の中をしっかりと掴んで取り出せるように本棚に隙間があることが望ましい。また、最初に開くときには、背表紙を下にし、ゆっくりと開いていくことで、固い背表紙を痛めることなく開ける。紙に汚れが付くことも好ましくないため、本に触れる際は、油や汗、食べ物のかすなどが付いた状態では決して触れずに、清潔な状態で触るべきである。紙であるため、折ったり、破ったりすることの無いよう、力任せに扱わず、丁寧に繊細に扱うことが原則である。

## エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

展示の仕方としては、傷つけないようにするために、触れられないようにすることが望ましいが、本という資料は実際に触れて、中を見ることが出来ることも重要だと考えるため、同じものが二冊あることが望ましい。一冊は表紙を見せた状態で、触れられないようにケースに入れ、説明書きを傍に置き、もう一冊はブックスタンドに立てた状態で、誰でも触れ、ページをめくれる状態にしておく。また、この触れられる資料にはしっかりとブックコートフィルムをかけておく。そして傍には汚れた手で触らないように、ウェットティッシュなど、手をきれいにできるものを置いておく。そして本がその場から持ち運ばれることのない様に、本やスタンドに盗難防止のチェーンなどをかけておくことが望ましい。



## レーベル (Label)

サイズは縦 10.5 cm × 横 16.2 cm。書体はタイトル、説明文全て「MS ゴシック体」となっている。文字サイズはタイトル 24pt、説明文 10.5pt。本と比べて大きすぎず小さすぎず、本も説明も目に付くことを意識したサイズとなっている。

### 『精霊の木』

上橋菜穂子のデビュー作である。地球が滅亡し、他の星へ移り住んでいた人々の子孫が、その星の滅びたとされる先住民の謎に迫る、銀河冒険ファンタジーである。上橋菜穂子作品の原点であるこの作品は、初々しさを感じさせながらも、他の作品の萌芽がしっかりと含まれていることを感じさせてくれるものとなっている。

著者：上橋菜穂子	サイズ：20 cm × 14 cm
画家：二木真紀子	ページ数：294
発行所：株式会社偕成社	発行：2010年9月6刷
発行者：今村正樹	価格：1200+税(購入時は税込みで 1260 円)
対象年齢：小学校高学年から	ジャンル：ファンタジー小説
本の種類：ハードカバー	言語：日本語
持ち主：本間藍花	

# 博物館資料ドキュメント 『汽笛ぶえ』

工学部建築学科1年 高橋 奈緒

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

資料名：汽笛ぶえ（玩具・雑貨）

所有者：高橋奈緒氏

材質：木製、一部表面塗装、下面を除く三方表面ニス加工仕上げ（下記に更に詳しく記載）

質量：42.5g

寸法：96.0×34.0×53.0 (mm) （すべて最大寸法）

製造国：不明

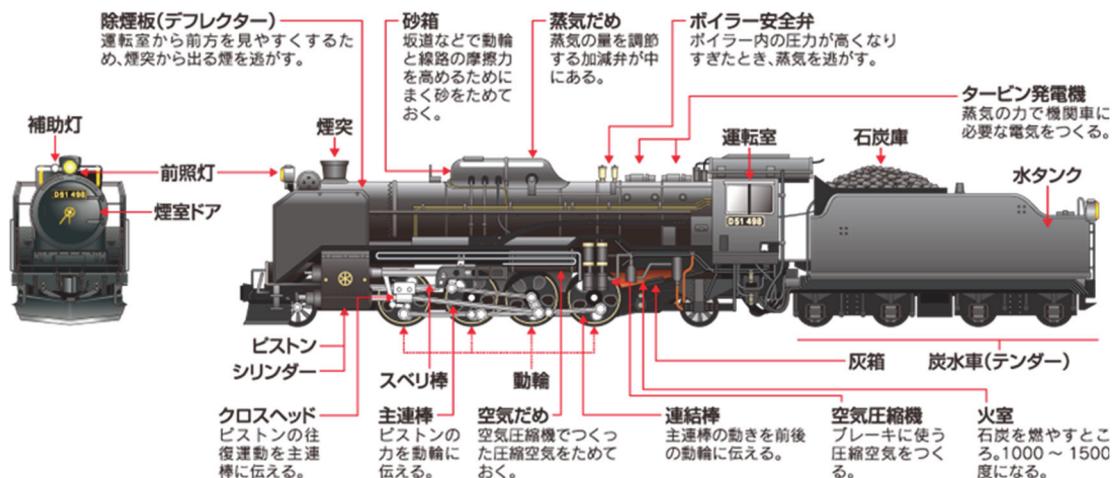
製造元：不明

製造日：不明

入手日：2001年12月13日？

価格：不明

以下、資料の煙突が付いている側を上、笛の反対側（機関車におけるスノープラウ〔雪避け〕側）を正面（前）と定め、上面が上になるように置き、正面から資料を見ているものとして記述する。蒸気機関車の各部名称が記述の中に幾度か登場するが、その際は、下に提示する図を参照してほしい。



JR 東日本高崎支社 HP [<https://www.jreast.co.jp/takasaki/sl/>] 掲載の画像を一部改変して掲載

本資料は、「汽笛ぶえ」と呼ばれる玩具・雑貨である。「汽笛ぶえ＝笛」と言うと、「馬から落馬する」のように、同じことを繰り返して述べているように思うかもしれない。

汽笛ぶえとは、トレインホイッスルとも呼ばれる、擬音笛（ぎおんぶえ）の一種である。

擬音笛とは、鳥の鳴き声や日常的に聞く音に近い音色を奏でられる笛で、主に、楽曲や演劇の効果音などに使われるものである。

その擬音笛の一種である汽笛ぶえは、汽車（殆どすべての場合は蒸気機関車）の形を模した笛で、更にその音色は汽笛を連想させるものである。従って、「汽笛の音色を模した笛」の意味を込めて、「汽笛ぶえ」と称されるのである。

現在、市場に出回っている汽笛ぶえは、本資料同様に木製のもの、そして、アニメーション作品『きかんしゃトーマス』のキャラクターの姿を模したものなどのプラスチック製のものが多いようだ。また、音色は汽笛のようであるが、一見して通常のホイッスルのような、汽車の姿を模していない汽笛ぶえも存在する。 (以下の写真は汽笛ぶえの一例)



本資料の事項について、話を戻そう。

上記にあるように、本資料は木製で、蒸気機関車の車両を模した形状をしている。質量は 42.5g であり、体積が約 108 cm<sup>3</sup>である。よって、密度は 0.39 となり、従って使用木材は、木目の幅なども鑑みて、オベチェやレッドシダーが考えられる。機関車の煙突・煙室と運転席部分はそれぞれ黒色・橙色、深い青色（コバルト）に塗装されている。機関車のスノープラウ部分（資料における下部分）は、木目が露わになっているので、絵の具等によるカラー塗装は考えられない。資料下面と笛を吹く際に口をつける部分を除いて、半透明のニスで表面が仕上げられている。笛は、資料背面に横並びに二つ付いており、音程が異なっている。（C♯とオクターヴが一つ高い A と思われる）

## オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料は、2001年12月、ハワイ諸島のオアフ島に存在するハワイ最大級の屋内型ショッピングセンター「パールリッジ・センター」にて開催されていた、子供たちがサンタクロースと写真を撮り、記念のおもちゃを貰うイベントにて、所有者が記念品のおもちゃとして入手した。イベントの参加費用は 25 \$ で、当時のレート（2001年12月12日のレート）を確認する 1 \$ = 約 159 円 45 銭であるので、日本円にしておよそ、3986 円である。

詳しい入手日を、所有者の父である高橋譲氏に確認したが、ハワイ時間 2001 年の 12 月 9 日か 10 日のどちらかで、本当に詳しい日時は不明とのことであった。そこで、更に所有者の母である高橋美緒氏に確認し、パスポートを参照したところ、日本出国日が、2001 年 12 月 12 日であるため、本資料の入手日は、ハワイ時間 2001 年の 12 月 13 日ではないかとの結論に至った。

当時のレートは現在のものと比較して、高値のように思われ、2001年にドル圏に旅行したことを、報告者である私は不思議に思った。所有者の母である高橋美緒氏に確認したところ、2001年はまさしく同時多発テロ事件が発生した年であり、航空機のチケットが非常に安価で購入できること、ドル圏の観光地のホテル代金も安価で推移していたことが旅行の決め手となったそうだ。

本資料を入手したころに、所有者が本資料同様に入手した玩具は幾つもあると考えられるが、現存して所有者が持ち続けているものはあまり無く、特にチープなものに関しては現存するものは数少ない。このことから、所有者は本資料に特段の思い入れがあるようには、今回の調査まで意識したことがなかったそうだが、深層心理的に本資料を気に入っていた可能性がある。

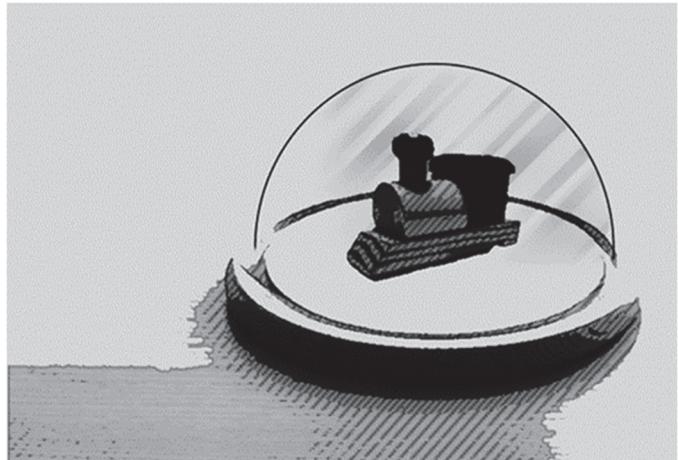
近年において、本資料は所有者の学習机にインテリア雑貨として配置されている。理由は次の通りである。本資料の黄色と深い青のカラーリングが、所有者の2018年4月の建築学科入学により一式を揃えることになった製図用具と模型製作用の工具のカラーリングと類似しており、所有者の机の印象を整えるためのインテリア雑貨として利用している。

#### エクジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

本資料の特徴である、「汽笛のような音色」を来館者に体感してもらいたいが、資料保存の観点から考えて、来館者が直接に本資料を触るような展示は避けたい。従って、本資料をもとに作成したレプリカを並行して展示し、レプリカは学芸員の管理のもと、来館者が自由に演奏できるようにする。

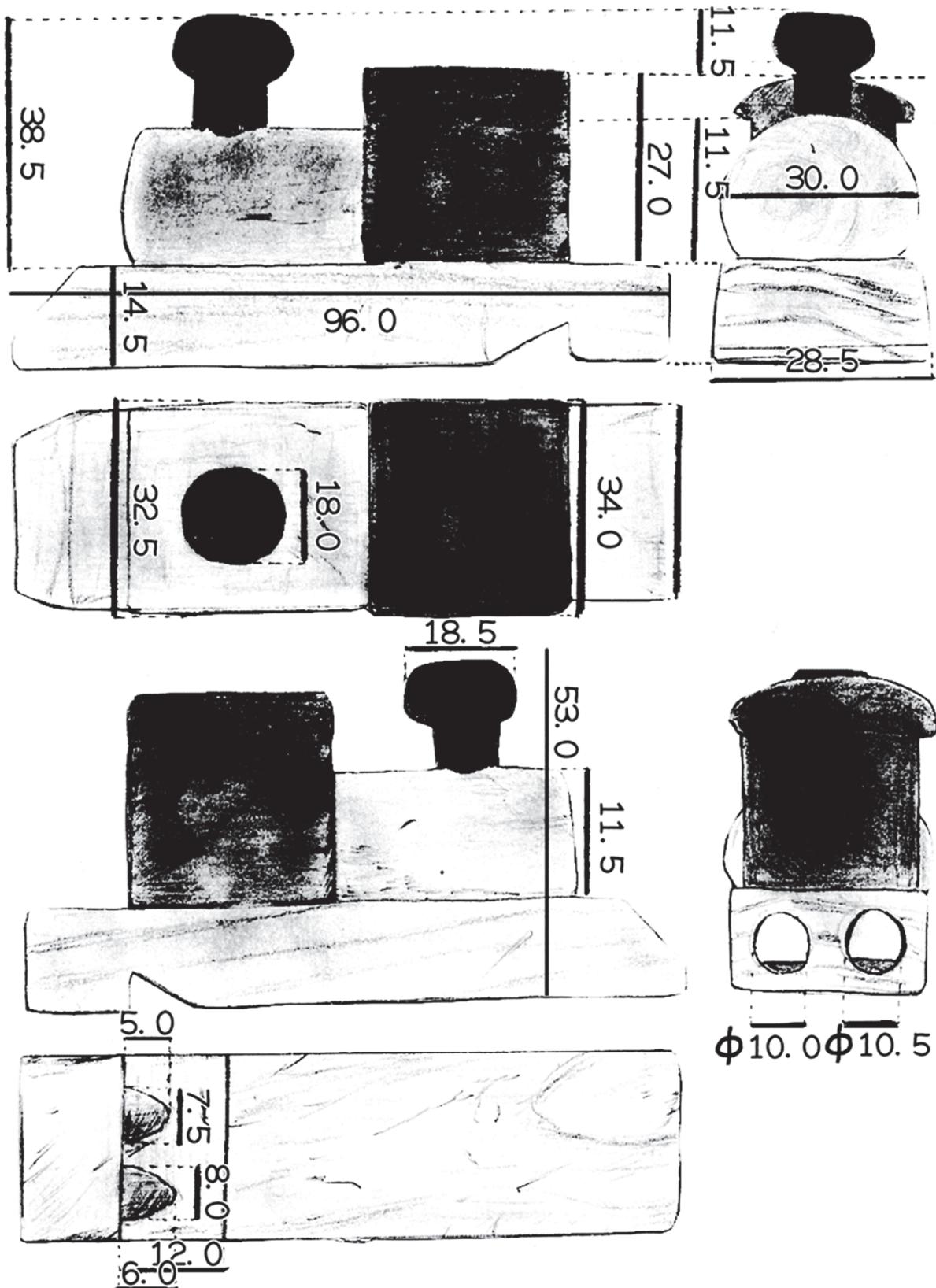
レプリカと資料本体の音色が異なってしまう可能性も考えられるので、資料本体の音声は録音して、それを再生できるようにしたい。

蒸気機関車のような外観と、笛であることのどちらも、来館者に理解してほしいので、本資料の展示ケースは、一方方向からではなく、周囲360度どこからも資料を閲覧できるものを考えた。角のあるケースは、光の屈折を生み、ケースの外から資料を覗くと資料が歪んで見えてしまうので、球状のケ



ースを用いる。展示ケースには白く摩擦係数の低い布を敷き、その上に資料を展示する。球の直径は300mmほど、資料近くにタスク照明を設置するのではなく、展示室全体を照らすようなアンビエント照明で採光する。

イラストレーション (Illustration)



## コンディション・レポート (Condition Report)

全体的に資料の状態は良好と言える。その理由として、所有者が本資料を笛としてあまり利用せずに今日に至ったことが考えられる。

使用前の傷=資料ではなく、商品として価値を下げる点として挙げられることは二つある。一つ目は、絵具による色付けが施されているにもかかわらず、色むらがあり、下の木目が出てしまっている箇所があること。二つ目は、ニスの塗装にもむらがあり、凸状に厚く固まっている箇所があること。

使用による状態の劣化としては以下の点が挙げられる。一つ、煙室の橙色の部分や木目がそのままに出ているスノープラウ部分に、彩度の低く、濃い色のものが擦れた時に付いてしまったと考えられる擦傷が数か所見受けられること。一つ、資料の全体、特に資料の下面に顕著に爪や他の玩具の固い部分に当たったことによると考えられる極わずかな凹みがあること。

埃や指紋による汚れは、眼鏡を拭くクロスなどの摩擦係数の低い布等で拭きあげることで取り除けば、問題はないと思われる。

## リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

本資料は上記の通り木製である。従って、直射日光の当たる場所や高温多湿の場所に長時間放置すると、ひび割れ、日焼けによる色褪せ・変色、変形、カビが発生する等が考えられる。また、彩度の低く濃い色のものが周囲にあると、木目や薄い色（橙色）の部分に色が移ってしまう可能性がある。強い香りのある場所では、匂いも移ってしまうと考えられる。故に、直射日光の当たらない、室温 18°C～20°C、相対湿度 55%～60%の無臭の室内に保存することが求められる。また、無風状態での保存が望ましい。何故なら、風は木材の周囲に漂う湿気を飛ばし、木の表面を急激に乾燥、収縮やひび割れの原因になるからである。木製のものは木口（年輪の出ている面）を上にすることで、伸縮が少なくなるので、本資料前面を上側に保存することも望ましい。

## ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

コンディション・レポートで述べたように、本資料には爪による傷が既に存在している。爪が当たることによる傷や指紋の付着を防ぐため、白く摩擦係数の低い手袋をはめて本資料を取り扱うことが望ましい。木材は油分の付着による変形が考えられるので、素手で扱うことにより、手の油分が移ることを防ぐためにも、手袋をしての作業が望ましい。

資料を取り扱う際、その作業を行う机にも、白く摩擦係数の低い布を敷き、そのうえで作業することで、硬い机表面と資料がぶつかることによって傷ができてしまうことを未然に防ぐことができると思われる。

## レーベル (Label)

レーベルに用いたフォントは、展示パネル等への使用を考えて作られた、UD フォントの一種である BIZ UD ゴシックとした。

### 擬音笛 汽笛ぶえ (Train Whistle)

擬音笛とは、波の音、風の音、鳥や虫の音などの日常的な音を表現するための笛である。楽曲上で演奏する際に用いられるほか、演劇などでの効果音にも用いられる。この汽笛ぶえはその名の通り、汽笛の音色を再現する。劇効果用等の実用性よりも、蒸気機関車を模した、意匠性を高めた玩具・雑貨である。

## 【参考】

Fun! Fun! SL! SL のしくみ JR 東日本高崎支社(<https://www.jreast.co.jp/takasaki/s1/>)  
International Monetary Fund ([https://www.imf.org/external/np/fin/data/rms\\_mth.aspx?SelectDate=2001-12-31&reportType=CVSDR](https://www.imf.org/external/np/fin/data/rms_mth.aspx?SelectDate=2001-12-31&reportType=CVSDR))  
木材博物館 木材の比重リスト ([https://www.wood-museum.net/specific\\_gravity.php](https://www.wood-museum.net/specific_gravity.php))

## 編集後記

本学の学芸員課程で開講されている科目は1～3年次まで、4年生用に開講されている科目はない。しかし、それは科目数が少なくて単位の修得がラクであるということを示しているのではない。1～2年次に開講されている科目の多さからもそれはうかがえる。就活と直接かぶらない比較的自由に使える時間を使って、実習などに腰を据えてじっくり向き合ってほしいとの想いからである。もちろん、学芸員課程で開講されている科目の単位を取るだけで満足してほしくはない。言うまでなく、課外活動にも自主的に取り組んでほしい。本報告書のなかでもたびたび取り上げているように、新ひだか町における宿泊研修や奥尻島、仙台市、石巻市で文化財等を取り扱う機会は、講義科目とは別に準備されたものである。諸経費やサークル活動とのからみなどの理由により、すべての学生が参加できるものではない。今後もできるだけ多くの機会を提供するつもりなので、意欲のある学生は積極的にトライして研鑽をつんでもほしい。本報告書にも掲載した小平・遠別地域での化石発掘のフィールドワークは、佐々木さんの自主的な興味と働きかけで実現したものである。貴重な機会をご提供くださった本学講師で博物館実習を担当されている栗原憲一先生をはじめ、北海道博物館や三笠市立博物館の皆さんにこの場を借りて感謝申しあげたい。

奥尻島は2018年7月で北海道南西沖地震から25年が経過し、2019年3月には東日本大震災から8年が過ぎた。さまざまな課題をかかえつつも、復興は一段落し、次なる震災に備えるために記憶の風化が懸念される時期にさしかかっている。震災遺構はなつかしいかつての街並みの景観とともに、自然の脅威をも伝えてくれる。悲しい記憶を再燃させるために、保存を望まれながらも取り壊しを余儀なくされたものは少なくない。しかし、震災遺構のみが被災の記憶を伝えるものではない。本報告書の『特集』「被災地の復興と記憶」でも、新しい取り組みに光をあてている。もちろん、悲しい記憶の継承はどうあるべきかについての解答は1つではないことは承知している。今後も被災を経験された人たちとともにその手がかりを探っていきたいと考えているところである。